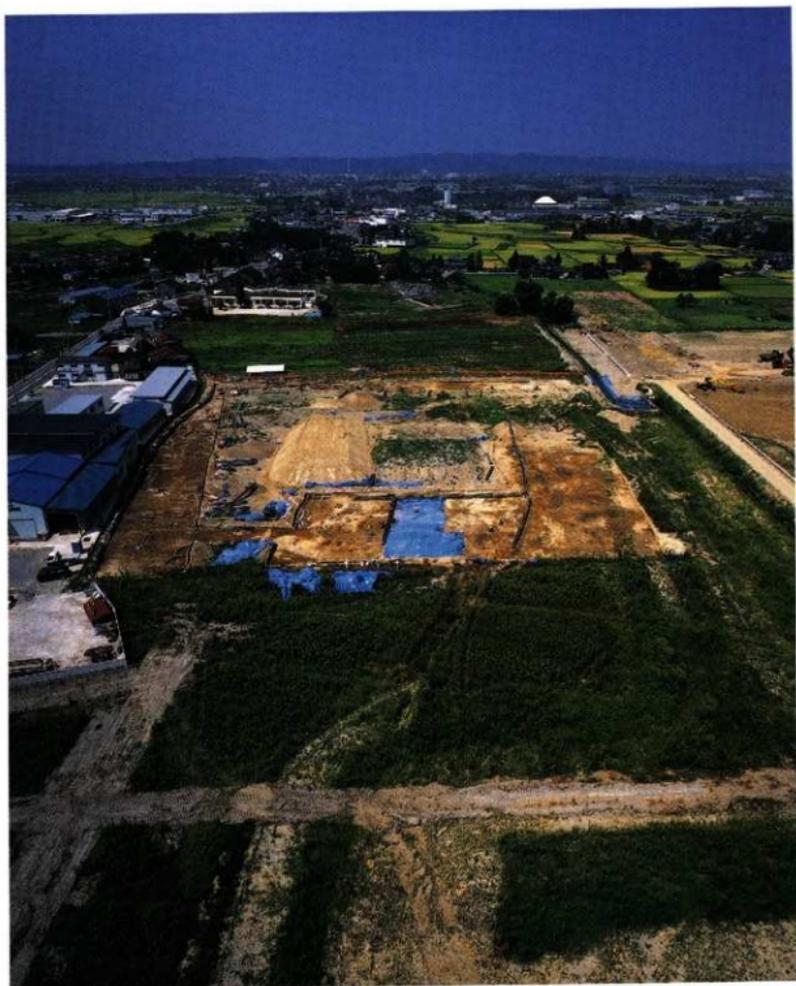


富山県 婦中町

中名Ⅱ遺跡 発掘調査報告

1995年3月

婦中町教育委員会



調査区全景



瀬戸瓶子



輸入陶磁器

出土遺物

序

豊かな婦負丘陵の緑と清らかな神通川、井田川という美しい自然環境の中で長い歴史と伝統に培われた婦中町に、近年、幾多の埋蔵文化財が発掘されて来ています。

今回、中名地区では県営公害防除特別土地改良事業に伴う埋蔵文化財の調査が進められ、中世に営まれた集落遺跡が発見されました。中名Ⅱ遺跡の中心時期は鎌倉時代・戦国時代であり、出土遺物のなかには奈良・平安時代に遡る焼物である須恵器も発見されました。近くにある熊野神社との関係から考えますと、興味深いものであるように思われます。婦中町教育委員会では、こういった遺跡に親しんでいただこうと小学生や地区住民の方に対し、現地説明会や体験発掘を進めてきたところであります。

本書はこうした調査の成果をここにまとめ、今後の調査研究を進める上での参考にするとともに、埋蔵文化財に対する一層の理解に役立てていただければ幸いと存じます。

終わりにこの調査にご協力いただきました地元熊野地区の方々、そしてご指導いただきました富山県教育委員会の方々に深く感謝を申し上げます、はじめのごあいさつといたします。

平成6年3月

婦中町教育委員会

教育長 清水 信義

例 言

- 1 本書は富山県婦負郡婦中町中名大百劫地内に所在する中名Ⅱ遺跡の発掘調査報告である。
- 2 調査は県営公害防除特別土地改良事業（神通川流域第3次地区）の実施に先立ち、富山県農地林務部富山農地林務事務所の依頼を受けて婦中町教育委員会が実施した。調査の実施にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから調査担当者の派遣を受けた。
- 3 調査事務局は婦中町教育委員会生涯学習課に置き、文化振興係長見波重尋が調査事務を担当し、課長平井光雄が総括した。また、調査にあたって作業員については婦中町・大沢野・八尾シルバー人材センター、仮設事務所敷地については婦中町農業協同組合の協力を得た。
- 4 調査期間 平成6年8月1日～10月27日 調査面積 4,450㎡
- 5 試掘調査・発掘調査担当者および調査員は次のとおりである。

試掘調査	平成5年度	担当者	婦中町教育委員会	文化財保護主事	片岡英子
			富山県埋蔵文化財センター	文化財保護主事	島田修一
	平成6年度	担当者	婦中町教育委員会	文化財保護主事	片岡英子
			富山県埋蔵文化財センター	文化財保護主事	高梨清志 河西健二 越前慶祐
本調査	平成6年度	担当者	婦中町教育委員会	文化財保護主事	片岡英子
			富山県埋蔵文化財センター	文化財保護主事	高梨清志 河西健二 越前慶祐
- 6 資料の整理、本書の編集と執筆は、富山県埋蔵文化財センターの職員の協力を得て調査担当者及び企画調整課長・宮田進一がこれに当たった。
- 7 調査期間中および資料整理期間中、次の方々から有益な教示と助言を頂いた。記して謝意を表したい。
藤沢良祐・上野 章・桃野真見・宮田進一・酒井重洋
- 8 本書の挿図・写真図版の表示は次のとおりである。
 - (1) 方位は真北、水平基準は海拔高である。基準杭は国家座標を用いて設定した。
 - (2) 遺構の表記は次の記号を用いた。掘立柱建物：SB 溝：SD 穴・土坑：SK 柱穴：SP 井戸：SE
 - (3) 挿図の土器の縮尺は、1/2・1/3に統一した。写真図版の遺物の縮尺は1/2・1/3に統一した。
 - (4) 出土品および記録資料は、婦中町教育委員会が保管している。
- 9 発掘調査・遺物調査参加者は次のとおりである。
生田寿美子・中坪千春・竹内余徳（整理作業員） 大野淳也・松原和也・岩崎晉尋・古沢亜希子・近藤美紀・勾坂友秋・内田亜紀子・稲石純子・景山和也・大平奈央子・佐藤聖子（調査補助員）

本文目次

序文			
例言			
目次			
I 位置と環境	1	2 遺構	4
II 調査に至る経過	2	3 遺物	15
III 調査概要	4	IV まとめ	22
1 地形と層序	4	引用・参考文献	
		写真図版	

挿図目次

第1 地形と周辺の遺跡	第29 SB10・11・12
第2 遺跡範囲と調査区割区	第30 SB13
第3 基本層位	第31 SB14・15
第4 器種分類図	第32 SB16
第5 出土遺物分布図	第33 SB17
第6 中世上層面遺構概略図	第34 SB18・19・20・21・22・23・24
第7 SB13の復元	第35 SB25・19
第8 遺構図(下層)	第36 上層検出井戸(1)
第9 下層検出溝断面図	第37 上層検出井戸(2)
第10 下層遺構図(1)	第38 土坑(1)
第11 下層遺構図(2)・溝断面図	第39 土坑(2)
第12 SB28・29	第40 土坑(3)
第13 SB30・31	第41 土坑(4)
第14 SB32・33・34	第42 土坑(5)
第15 SB35・36・37、SA01・02・03	第43 土坑(6)
第16 SB38	第44 土坑(7)
第17 SB39	第45 土坑(8)
第18 SB40	第46 出土遺物実測図(1)
第19 SB41	第47 出土遺物実測図(2)
第20 下層検出井戸・土坑・溝	第48 出土遺物実測図(3)
第21 遺構図(上層)	第49 出土遺物実測図(4)
第22 試掘トレンチ断面図	第50 出土遺物実測図(5)
第23 上層検出溝断面図	第51 出土遺物実測図(6)
第24 上層遺構図(1)	第52 出土遺物実測図(7)
第25 上層遺構図(2)・溝断面図	第53 出土遺物実測図(8)
第26 SB01・02・03	
第27 SB04・05・06	表1 遺跡名一覧
第28 SB07・08・09	表2 下層検出建物一覧

I 位置と環境 (第1図)

富山県は、県中央部に走る呉羽丘陵で東西に二分され、「呉西」「呉東」と称されている。婦中町は後者に入り、県のちょうど中央部にある。町の地形は、西側の丘陵部、東側の平野部に二分される。丘陵部は呉羽丘陵から南の牛岳へと連なっている。一方、平野部は神通川と井田川が形成した扇状地が広がっている。中名Ⅱ遺跡は、婦負郡婦中町中名地内にあり、神通川と井田川に挟まれた微高地に位置する。遺跡近隣には中名Ⅰ・Ⅴ・Ⅵ遺跡、持田Ⅰ・Ⅱ遺跡など、古代～中・近世の遺跡が密集している。中心部には熊野神社があり、この地域はそれにちなんで熊野地区と呼称される。当神社は『延喜式』の神名帳に記載されている式内社である。伝承によると久寿二年(1155)、立山麓の五智山円福寺が光明坊のときに萩の島に移り、為成郡十八ヶ村の総社となった。歴代の住僧が熊野神社の別当職として奉仕し、光明山来迎寺と寺号を改めた後、富山市に移った。その後は坪野村の豪農若林源左衛門に奉斉が命ぜられた。源左衛門は佐伯有基の子孫であるともいわれ、現在に伝承される稚児舞はこの頃に遡る。さて、遺跡北西の呉羽丘陵づたいは遺跡の密集地であり、千坊山遺跡(旧石器・縄文・弥生・平安・中世)、各願寺前遺跡(縄文・中世)、王塚古墳・勅使塚古墳(古墳時代)など各時代の遺跡が数多く存在する。遺跡西方には、小倉中稲遺跡(中近世)、富崎城跡(縄文・弥生・中世)、富崎遺跡(弥生～近世)などがある。神通川を挟んで富山市側には、任海宮田遺跡(縄文・古墳・奈良～中世)、友杉遺跡(奈良・平安・中世)など大規模な遺跡群が連なっている。(片岡)



第1図 地形と周辺の遺跡 (1/50,000)

Ⅱ 調査に至る経過 (第2回)

廻中町では、町域全部を網羅する分布調査は行われておらず、平成4年度段階で確認されていた大半の遺跡が、町西側の丘陵部にあった。東側の平野部、特に井田川と神通川に挟まれた地域については、遺跡の分布状況はほとんどつかめていない状況であった。

昭和49年、カドミニウム汚染田の復元を目的に、県営公害防除特別土地改良事業が策定された。廻中町域でもこの事業が3次に分けて進められることになった。そこで工事に先立ち、工事予定区内における遺跡の分布調査が必要になった。神通川流域第1次地区は昭和54年～59年の工期で、面積は11.93haであった。分布調査を昭和53年度に行ったが、遺物は確認されなかった。第2次地区は昭和58年～平成6年の工期で、面積は165.1haであった。分布調査は昭和57年度に実施したが、ここでも遺物は確認されなかった。第3次地区の予定工期は平成4年度～平成16年度で、予定面積は329.2haである。平成2・3年度に実施した分布調査では遺物は発見されなかった。しかし、平成5年11月の分布調査では、8箇所遺跡を発見した。そしてさらに同年12月に行った分布調査でも7箇所、翌年4月には10箇所遺跡が確認された。それまでこの地域は井田川・神通川の氾濫原で遺跡は遺存しないものと考えられてきたが、分布調査の結果、平成6年度段階で確認された遺跡の数は25箇所に上った。

その為、工事を目前に控え、これらの遺跡に対する試掘調査が早急に必要となってきた。農地サイドとの協議により優先して状況を把握すべき場所から順に、試掘調査を行うことになった。平成6年3月に、11箇所の遺跡を対象に試掘調査を実施した。調査では、重機及び人力により地山面まで掘り下げて、遺跡の範囲や遺存状況を確認した。トレンチを計111箇所を設定して調査を行ったところ、中名Ⅰ遺跡・中名Ⅱ遺跡・清水島Ⅱ遺跡・堀Ⅰ遺跡の計4箇所遺構が確認された。そのうち中名Ⅱ遺跡と清水島Ⅱ遺跡については、この調査で遺跡範囲が確定できなかったため、同年5月に再度試掘調査を行った。同年11・12月には、3箇所の包蔵地でさらに試掘調査を進めた。トレンチを162箇所を設定したところ、中名Ⅴ遺跡・道場Ⅰ遺跡・道場Ⅱ遺跡の他に、中名Ⅰ遺跡の広がりや新規発見の中名Ⅵ遺跡

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	中名Ⅱ	散布地	中世・近世	26	任海	散布地	縄文(晩)・奈良・平安・中世
2	中名Ⅰ	散布地	古代・中世・近世	27	任海二十町	塚	中世?
3	中名Ⅴ	散布地	古代・中世・近世	28	任海池原寺	寺院	中世・近世
4	堀Ⅰ	塚	中世・近世	29	友杉	集落	奈良・平安・中世
5	清水島Ⅰ	散布地	中世・近世	30	總川城跡	城館	中世・近世
6	道場Ⅰ	散布地	中世・近世	31	八日町	散布地	平安・中世
7	道場Ⅱ	散布地	中世・近世	32	黒崎横田	散布地	平安・中世・近世
8	中名Ⅳ	散布地	古代・中世・近世	33	黒瀬大屋	散布地	弥生(後)・奈良・平安・中世・近世
9	持田Ⅱ	散布地	古代	34	福板	寺院	中世
10	持田Ⅰ	散布地	古代・中世・近世	35	南郷Ⅰ	散布地	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
11	添島Ⅰ	散布地	中世・近世	36	小倉礮水河原	散布地	古墳・奈良・平安・中世
12	砂子田Ⅰ	散布地	古墳・古代・近世	37	田中城館	城館	中世
13	板倉Ⅱ	散布地	古代・近世	38	翠尾	散布地	中世・近世
14	板倉Ⅰ	散布地	近世	39	小倉中樋Ⅱ	散布地	中世
15	下替田Ⅰ	散布地	近世	40	千里C	散布地	不明
16	上替田Ⅱ	散布地	近世	41	富崎	散布地	近世
17	増田Ⅰ	散布地	近世	42	富崎城	散布地・山城	縄文・弥生・中世
18	上替田Ⅰ	散布地	中世	43	蓮花寺	寺院	中世
19	吉倉A	集落・墓	平安・中世	44	鏡板Ⅱ	散布地	中世
20	南中田D	集落	縄文・奈良・平安・中世	45	鏡板Ⅰ	集落	縄文(中世)
21	吉倉B	集落	奈良・平安・中世	46	新町Ⅱ	集落	縄文・奈良・平安・柱石・近世
22	任海鎌倉	集落	奈良・平安・中世	47	二本榎木Ⅱ	散布地	縄文・奈良・近世
23	任海	集落	平安・中世	48	櫛ヶ城	城館	中世
24	栗山権原	集落	平安・中世	49	総野Ⅳ	散布地	縄文
25	栗山A	集落	縄文(晩)・奈良・平安・中世	50	安田城跡	城館	中世・近世

が確認された。これらの試掘調査の結果、この地域は古代～中世の遺跡の密集地であることが判明した。

それらの結果をふまえて、文化財サイドからは婦中町教育委員会・県文化課・県埋蔵文化財センター、農地サイドからは県耕地課・県農地林務課・婦中町農地課により、度重なる協議を行い今後の進め方を検討した。協議では、試掘調査結果と計画田面高の数字の突き合わせや調整を何度も行い、遺跡を最大限そのまま保存して調査面積を少なくするため、両サイド努力を重ねた。遺跡のうち調査せざるを得ない範囲が決定した段階で、調査の優先順位を検討した結果、平成6年8月より中名Ⅱ遺跡の発掘調査を行うことになった。

発掘調査面積は4,450㎡で、まずは試掘調査の結果をもとに重機による表土掘削を行った。次に基準坑の設定を行い、2×2mを一区画とした調査区を設けた。その後、人力により遺構の検出と掘削を行い、引き続き、図化・記録作業に入った。調査期間は8月1日～10月27日であった。

(片岡)

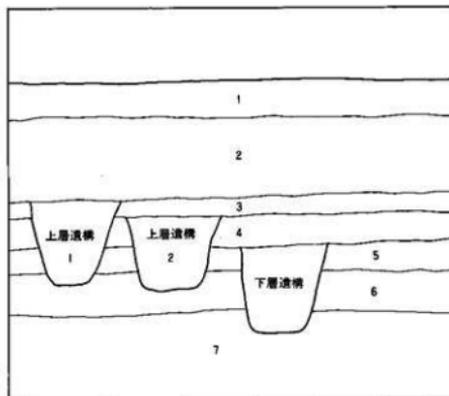


第2図 遺跡範囲と調査区劃図 (1/2,000)

Ⅲ 調査の概要

1 地形と層序

周辺の地形は、過去には場整備等の地形の改変を受けておらず、現在使用されている用水等も旧河道などの自然地形を利用しており、古い自然地形が良好に遺存している。分調査での中名Ⅱ遺跡の範囲は南北に長い楕円形を呈しており、東西端は旧河道と思われる自然地形の影響により低くなっており、遺跡もこの旧河道で切れるものと思われた。試掘調査では北・西・南側は民家等があり遺跡範囲は明確には把握できなかったものの、東側は耕作土直下に近世以降と思われる、北流する旧河道を確認した。遺跡はこの旧河道により削平を受けており、この河道の左岸をもって遺跡の東端とした。



第3図 基本層位模式図

遺構面は大まかに上・下層の2面検出しており、帰属時期は下層が中世前半、上層が中世後半である。

調査区の基本層位は6層から成り、上から順に1・2層：黒褐色砂質シルト・褐灰色シルト（耕作土・床土）、3層：明褐色＋褐灰色シルト（上層遺構検出面1）、4層：灰黄褐色砂質シルト（上層遺構検出面2・下層包含層）、5層：褐灰色砂質シルト（下層遺構検出面）、6層：黒褐色＋褐灰色砂質シルト（地山）、7層：黄褐色シルト（地山）8層：赤褐色礫層（地山）、9層：褐灰色砂土（地山）となる。地山（6～9層）の堆積は遺跡の中央を南北方向（X0Y90～X60Y60ライン）に高くなり東西方向へ向けて緩やかに低くなる。湧水層は8層下層から9層にかけてで検出した井戸はこの層まで掘り込まれている。

下層の遺構は5層上面から掘り込まれている。4層が下層の遺物包含層となり、同時に上層の遺構面という二つの性格をもっている。この4層は東側では堆積は薄いものの西へ行くに従い厚くなる。

上層の遺物包含層は耕作等で削平を受けており、ほとんど遺存しない。遺構は3層上面から掘り込むもの（上層遺構1）と4層上面から掘り込むもの（上層遺構2）を確認した。この2種類の遺構は調査区の壁面で確認したもので平面的には確認していない。遺構密度の低い東側では3層は存在せず、A地区の西側・B地区などの遺構密度の高い部分においてその堆積が見られる。このことから3層は整地層的な性格をもつ可能性も考えられる。また、上層の遺構覆土はほぼ同じで、この2種類の遺構に関しては時期差はほとんどないと思われる。3層の堆積は4層と同様、西に行くに従い厚く堆積し、遺構検出面の地形は緩やかに東から西へと傾斜している。

2 遺構

(1) 下層

検出した主な遺構は掘立柱建物14棟・井戸1基・溝8条・土坑・サク条遺構などである。

下層の遺構分布は地山の最も高い部分（X90Y0～X60Y60ライン）に集中しており東・西端では遺構密度は低い。

東端のY71付近でSD301の左岸と思われる黒色土の落ち込みを確認した。この落ち込みはさらに、近世以降の北流する旧河道により削平されており遺跡の東端となる。

(a) 掘立柱建物

掘立柱建物の分布は次のとおり大きく4つのグループに分けられる。傾向としては調査区の中の標高が高く安定した場所には建物規模が大きく母屋的な性格をもつa・c・dのグループが分布し、標高の低い部分には建物規模が小さく小屋的な性格をもつbグループが分布している。

aグループ (SB28～SB33)

A地区の中央、

調査内のSD112とSD110に挟まれた標高の高い場所に分布する。SB32を除き、総柱の掘立柱建物である。建物の主軸方位は溝とはほぼ同じ方向を向く。数回の立て替えはあるものの、東西を溝に挟まれた、共に有機的な関係をもつ同

番号	規模	長軸(m)	短軸(m)	面積㎡	主軸方位	備考
SB28	2×(2+a)	2.3+2.3	2.2+2.4+a	12+a	N-65°-E	倉庫?
SB29	3×2+1	2.0+2.3+2.4	2.7+2.8+(2.1・1.9)	48	N-17°-W	SE25附属・北面庇
SB30	4×(1+a)	2.4×4	2.3×(1+a)	5+a	N-75°-E	
SB31	4×2	2.4×4	3.0×2	58	N-73°-E	
SB32	5×(1+a)	2.6+2.4×3+2.2	2.6×(1+a)	31+a	N-68°-E	
SB33	2×2	2.4×2	2.1+2.0	20	N-70°-E	SK192附属
SB34	1×1	2.6	2.6	7	N-5°-W	小屋?
SB35	4×a	2.8×3+1.4	—	—	N-9°-W	
SB36	1×1	2.4	2.0	5	N-10°-W	小屋?
SB37	1×1	4.4(3.8)	3.8(3.4)	17	N-75°-E	小屋?
SB38	4×3	2.6×3+2.2	2.8×3	84	N-2°-W	SK360・361附属
SB39	3+1×4	2.8×3+(2.4)	2.2+2.5×2	78	N-3°-E	北面庇
SB40	5×3+1	2.6×5	2.4×3+(2.2)	122	N-2°-E	SK360・361東面庇
SB41	3+1×3	2.8+3.0+2.7+(2.2)	2.3×3	74	N-10°-W	南面庇

表2 下層検出建物一覧 ※規模の「+」は庇を表す。

時期の建物群として捉えることが出来る。

SB28 グループの東端に位置しており、他の建物に比べ柱穴の規模が大きく深いのが特徴で、特に建物の主軸と考えられるSP4・5・6においてこの傾向が強い。柱穴の規模から考えて倉庫的な建物を想定する。

SB29 底部分であるSP1・2・3・4は他の柱穴と比べ規模が小さく浅い。柱の並びもほかの柱穴と比べると不正確である。この底部分 (SP2・3・6・7に囲まれた部分) に木組みの井戸であるSE25が位置している。井戸は建物の柱穴を避けるように造られており、ここではSE25はSB29の付属施設であると捉える。

SB30 SB31と切り合い関係にあり、SB31が古い。SB30・31・32は建て替えられている建物で、その順番はSB31・32・30の順で立て替えられている。

SB33 側柱の建物で柱位置が不規則である。SB31・32と重複しており建設位置を考えるとSB30の付属建物か、もしくはSB29の付属建物として位置づけることが出来る。

bグループ (SB34～SB37)

A地区の西側とB地区に分布し、調査区西側の標高の低い場所に位置している。SB35を除き小規模な建物であり柱間も規則性に乏しい。性格的には簡易な小屋的なものと考えられる。

cグループ (SB38～SB40)

C地区の南側、標高の高い場所に位置する。建物の東部分を上層の遺構であるSD202により削平を受けている。この3棟は立て替えとして捉えることが出来る。この建物群はSB40のSP11とSP13からフイゴ羽口、付属すると考えられる土坑 (SK360・361) から焼土・炭などを出土しており、鍛冶関係を行っていた建物として考えることが出来る。

SB40のSP5・10・15・20・25・30の柱列は他の柱穴と比べ規模が浅く長軸方向の柱間も他の長軸の柱間と比べ短いため底と考えられる。なお、SK360・361からは焼土・炭に混じり、中世土師器(3-8)が出土した。

d グループ (SB41)

D地区の北端、標高の高い場所に位置する。短軸の南端の柱列(SP17・18・19・20)は底と考えられる。周辺には構列(SA1・2・3)が何らかの形で付属する。建物はSD301・302が埋没した後に建てられており、时期的にはcグループと同時期か、もしくは新しい。

(b) 井戸

井戸の名称区分は宇野氏の区分を用いる。SE25は先述したようにSB29に付属する。規模は掘り方が南北に長い楕円形を呈し、長軸2.26m、短軸1.97mを測る。深さは検出面から1.28mで8層の下層まで掘り込んである。8層から下の掘り方の壁面には酸化鉄の層の沈着が見られ、機能時においては8層が湧水層であったと考えられる。井戸側は木組みで水溜には直径45cm、高さ約20cmの曲物をもつ。井戸側は下から40cm程しか遺存しておらず詳細は不明であるが、四隅に隅柱をもち縦板で井戸側を組んである。横棧は認められなかったものの、井戸側の中に直径約5cm、長さ50cmから60cmの木の棒が数本落ち込んでおり、これが横棧であるとすれば、この井戸は宇野氏のBIV類の縦板隅柱横棧どめ井戸に分類できる。

セクション断面の観察では、①層は2次堆積か、もしくは擾乱で、この下まで井戸側の痕跡が確認できた。②・③層は井戸の自然堆積層である。裏込めの土は④・⑤・⑥・⑦層である。⑤層から底部部切りの中世土師器1が出土している。

(c) 溝

検出した溝は他の遺構との位置関係・セクション断面の観察から考えて、その性格は区画溝的な性格をもつものと自然河川的な要素の強いものの2種類に分類出来る。前者はSD110・SD112・SD26・SD27・SD203などで特にSD110・SD112がその傾向が強い。これらの溝は先述したとおり建物の主軸方向とほぼ同軸方向に流れており、区画内の施設を意識している。セクション断面の観察では自然に埋まった痕跡は少なく、覆土中に地山のブロックを含んでおり意識的に短期間の内に埋められていることがうかがえる。このことは区画内の施設が廃棄されると同時に区画溝としての役割を終えたものと捉えることが出来る。後者はSD301・302で、2つは並んで流れておりSD302が古い。A地区の東端においてSD301の左岸を確認しており、この溝は地形に沿って北流している。セクション断面の観察では断面は緩やかに落ち込んで浅い皿状を呈し、人為的な掘削は受けておらず自然河川の様相が強い。覆土も上層まで緩やかに堆積していった様子が観察された。この2条の溝は集落の側を流れる自然河川としてあったものを部分的に手を加えて使用していたと考えられる。

出土遺物はSD27から中世土師器(18・19)白磁20、SD203から須恵器壺底部(37)、SD301からは中世土師器(21-36)が出土している。SD203の須恵器は流れ込みであり、溝の時期を示すものではない。

(d) 土坑

下層で検出した土坑は少なく十基に満たない。SK192はSB31内にあり、ほぼ同軸方向を向く。平面形は隅丸の長方形を呈し、規模は長軸2.16m、短軸0.88mを測る。ほぼ垂直に落ちる掘り方をもち、底面もほぼ平らで非常に丁寧に掘られている。出土遺物はなく时期的なことは不明であるが、SB31の付属施設として捉えることができる。SK360・361はSB39・40のいずれかの付属施設として考えられる。2つの土坑は共に非常に浅く、上層の遺構の削平を受けており、詳細な平面形は不明である。覆土には多量の焼土と炭が入り底面は平らで堅く締まっている。北側にはSK360を切ってSD213が東西に走り、SK360の掘り方はこの溝で終わっており、切り合い関係にあるもののこの溝は土坑の排水溝として捉えることが出来る。先述したように付近からフィゴの羽口等の鍛冶関連の遺物が集中して出土しており、SK360・361は鍛冶遺構の可能性が考えられる。

(高梨)

(2) 上層

(a) 建物遺構

上層において27棟の建物遺構（以下建物とする）を復元した。建物は、調査区の西半分でのみ見られた。

これらの建物が中世末のもので柱列配置が複雑化していることから、柱列の表し方は（例）SB100：1-3と表し、数字は柱穴番号を表す。また、梁・桁表現は、判断が困難である場合が多いため、出来るだけ使用を避け、表現は建物単位構造の中核をなす中核屋と下屋を構成する補助屋とを使用する。なお、建物のタイプ呼称・用語については、河西氏（河西1994a・1994b）の研究成果に倣っている。また、付属する遺構については、可能性があると思われるものも取り上げた。

SB01 1-4のみが確認された。間尺は1.4m+1.4m+1.9m、柱穴の直径は平均30cm深さは平均31cmである。建物は調査区東側に延びる。

SB02 1-4・4-6で囲まれた範囲を中核屋とする梁行1間型柱列の建物である。間尺は、1-3間4.2m+4.2m、1-4間3.8m、6-12間2.3mである。ただし、2-3間にはP7・P8、3-6間にはP11が見られる。また、SD05・SD06は、雨落ち溝もしくは根太の痕跡と考える。SD05はSK09を切る。SK09は、建物内に取り込まれていたと考える。建物範囲としては、西側SD06まで、南側SD05まで、東側12-23列までと推定される。その他建物には、SK07・SK08・SK09・SK13・SK14が伴うとみられる。SK08・SK09は、貼り床状の床面を持った土坑である。また、2-3列の西側に9-10が、SK08の北端側には13-14がみられる。柱穴の規模・深さをみてみると、中核屋の主柱穴は、直径40cm深さ60cm前後を測るのに対し、補助的な他の柱穴は直径35cm深さ25cm～35cm程度の小さく浅いものが多い。

SB03 SB02と一部重複し、P4に切られる。建物の大半は調査区外へ延びる。19-20は、さらに東に延びる可能性が高いがSE08に切られており検出できなかった。間尺は、15-19間0.9m+1.0m+1.3m+2.0m、19-20間1.6mである。柱穴規模はほとんど差はなく約30cmである。しかし、柱穴の深さはP16・P18がそれぞれ80cm・70cmと深いのに対し、P15・P17・P19・P20は約30cm～40cmである。以上から、15-18までが中核屋部分、それより南側は補助屋部分と考えられる。

SB04 SB02・SB03と一部重複するが切り合い等はない。建物は調査区北側に延びると思われるが、1-4・12-7を中核屋とする梁行1間型柱列の建物である。4-12列の1-4列のP2に対応する部分は、SK102内になるため礎石が掘えられている。また、2-3間にP3が、4-7間にP6がみられる。中核屋の東側は、補助空間と見られる柱列が見られる（7-8・9-11・13-10・17-18）。各柱間は、およそ1.35m・1.7m～1.75m・1.9m～1.95mの間尺が使われている。中核屋部分と補助屋部分における差は見られない。柱穴規模は、直径16cm～40cm深さ12cm～60cmと柱穴間にはばらつきがある。しかし、中核屋と補助屋部分とで特に差は見られない。柱穴規模の平均は、直径26cm深さ32cmである。この建物にはSK95・SK102・SK114が伴う。SK102は、貼り床状の床面を持った方形の土坑である。なお、SE08は、SK102を切ることから建物には伴わない。SK118・SK110は、切り合い関係からこの建物に伴う可能性は低いと考える。しかし、貼り床状の床面を持った土坑であり、他の建物の一部であった可能性は高い。

SB05 1-5・6-9に囲まれた範囲を中核屋とする建物である。梁行2間の建物であるが、P6・P10が棟持柱とは考え難く、梁行1間型柱列の建物の範疇であると思われる。建物自体はさらに東側に延びることが予想される。間尺は一定しておらず、1-5間1.1m+1.5m+1.6m+2.9m、5-9間1.6m+2mである。それぞれの柱穴規模は一部を除き特に目立った差は見られず、中核屋部分と補助屋部分との差は見られない。柱穴規模の平均は、直径約36cm深さ約33cmである。建物に伴う遺構には、SE07・SK107・SK115・SK119がある。SK119は、集石が見られ井戸との関係が考えられる。また、SK115には、貼り床状の床面及び石列が見られる。なお、SE07の掘り方は、柱穴に切られるものの位置関係からSB05に伴うと考える。

SB06 一部SB05に重複する。SB06に伴うSK111との切り合い関係から、SB05より古い。また、建物は南側に延びると考えられるが、SD07に切られるなどして詳細は不明である。1-4間の間尺は1.35m+1.3m+1.4mを測り、1.35mを基本としていとみられる。各柱穴の柱穴規模もばらつきは少なく、平均で直径28cm深さ29cmである。SK111は、覆土に炭化物・焼土が大量にみられた。

SB07 1-3の北側を中心としてSK01・SK23を取り込む形の建物として復元した。SK01は、貼り床状の床面を持つ土坑である。柱穴規模にばらつきは見られず、平均で直径24cm深さ20cmである。1-3間の間尺は、5.5m+1.3mである。また、1-3の約2.4m南側には、1-3に並行してSB08：1-3がある。SB07：1-3とSB08：1-3を1つの建物と考え、梁行1間喰違い柱列型の建物と見ることも可能である。

SB08 1-3及び3-5からなるL字型柱列の建物である。1-3間の間尺は5.5m+3.0mを測り、3-5間の間尺は1.8m+1.5mを測る。この建物にはSK24・SK25等が伴い、いずれも貼り床状の床面を持つ。柱穴規模はさほど大きくなく、P1~P3が直径20cm深さ25cm前後、P4・P5が直径24cm深さ15cm前後である。

SB09 建物はさらに西側に延びる可能性があるが、1-3・4-12で囲まれた範囲を中核屋とし、6-4・4-8列を補助屋とする建物として復元した。6-4・4-8は、SK33を囲むように並ぶ。柱穴の深さにはばらつきがあるものの、直径は、ほとんどが直径20cm~25cmである。間尺は、1-3間が1.85m+3.05m、1-4間が4.0mである。また、6-7間は3.9m、7-8間は2.8mである。建物に伴う遺構には、SK33の他にSK32等がある。

SB10 1-3・3-4を確認し、建物はさらに東側調査区外に広がる。柱穴規模は直径35cm前後、規模の差はさほど見られない。1-3間・3-4間の間尺は、それぞれ3.5m+3.5m・2.8mである。

なお、SB07・SB08・SB09・SB10付近には5基の井戸が確認されたが、どの建物に伴うものか判別できない。

SB11 1-5・6-7を中核建物とする梁行1間喰違い柱列型の建物である。SB13と一部重複するが直接切り合い関係はない。しかし、SB13~SB16の建物位置を規制している遺状遺構に切られており、これらの建物より古い。1-5間の間尺は0.8m+1.4m+1.5m+1.95m、6-7間の間尺は2.9m、1-5列と6-7列との間は3.65mを測る。柱穴規模は、直径25cm前後のものが多く差は見られない。

SB12・SB13・SB14はそれぞれ重複し、SB12はSB13より新しくSB14より古い。建物内にはいくつかの土坑が存在するが、いずれの建物に伴うものか判断しがたいものが多い。また、これらの土坑は、比較的浅いものが多く、貼り床を持つ土坑もほとんどない。

SB12 1-3・6-4で囲まれた範囲を中核屋とする梁行1間型柱列の建物である。1-3間・1-6間の間尺は、それぞれ2.1m+3.7m・2.6mである。

SB13 3-16・4-7で囲まれた範囲を中核屋とする梁行き1間型柱列の建物である。建物の全体が把握でき、規模も大きい。P3・P16は、楕円柱穴でそれぞれ長軸60cm・80cm、短軸40cm・48cm、深さ60cm・35cmを測る。他の多くの柱穴は、円形で直径20cm~40cm・深さ20cm~30cm程度である。また、P4・P7・P8は、柱穴内に根固めの石をもつ。SK58は、既と考える土坑で、SB13に伴う。間尺は、4-7間1.8m+1.45m+1.75m、3-7間3.3m、8-12間2.1m+2.15m+1.2m+1.5m、14-15間4.25m、12-13間2.95m、8-14間2.1mとなる。また、この建物の北側には17-19が、西側には楕円柱穴20 (SK56) -21 (SK52) が見られ、関連した門や納屋などの施設とも考えられる。

SB14 1-4・1-7・7-16・16-4を中核屋とする建物として復元した。柱穴間の規模のばらつきは大きく、直径20cm~72cm、深さ12cm~48cmの差がある。20-17・10-13等の柱列は、間仕切り等が考えられる。間尺は、1-7間が1.6m+1.75m+2.4m、7-16間が2.3m+1.5m+1.5m+1.1mを測りバラバラである。20-17・10-13間の間尺も一定ではない。

SB15 SB12・SB13・SB14とは遺状遺構・SD20を隔てて位置する。調査対象地内で検出した柱穴は少なくともはつきりしないが、SK78・SK77など覆土に焼土・炭化物が混じる工房関連と考えられる遺構を建物内に取り込んだ範囲で存

在したと考える。

SB16 1-4を棟柱列とする建物で、今回の調査で確認した建物中最大規模である。SB17と重複する。1-4の柱穴は、直径80cm～95cm・深さはP1を除き60cm以上を測る。8-12・5-7等の補助屋部分の柱穴と比べ明らかに規模の違いがある。1-4間の間尺は3.45m+6.5m+3.9mとバラバラである。2-12・12-13・5-7は、SK325・SK324を囲むように並ぶ。SK324・SK325・SK307は、いずれも貼り床状の床面を持つ浅い土坑であるが、SB16・SB17のどちらにも伴う可能性がある。しかし、SK307がSB17の柱穴に切られることから、SB16にはSK307・SK324が伴う可能性が高いと思われる。2-12間の間尺は1.5m+1.75m+1.3m+1.3m+1.2m、2-12列と5-7列間は3.9mを測る。

SB17 13-3・14-4で囲まれた部分を中核屋とする梁行1間型柱列の建物である。中核屋部分の柱穴規模は、直径70cm～115cmと大きい。1-2・P5は、中核屋部分の柱穴と差は見られないが、11-8・16-17・P18・19-20は、直径20cm～30cm前後と明らかに小さい。柱穴の深さは、全体に浅く20cm～30cm前後のものが多い。SB17に伴う遺構として、SK306・SK325・SE41・SE42・SD204・SD210がある。SD204・SD210は、10-17列・16-17列に並行して検出され、根太痕跡と考えられる。SK306・SK325の覆土には炭化物・焼土が見られ、特に、SK325では床面上面に若干の焼土の広がりが見られた。間尺は、3-13間は4.9m+4.6m、12-14間は3.0m+3.45m、3-5間3.25m+1.6m、5-2間1.8m、11-8間2.3m+2.3m+2.5m、11-6間1.2m+1.2mを測る。また、4-14列と8-11列の間は0.8mを測る。

SB18 建物としては不明瞭ではあるが、1-3を主柱列としSK351・SK352を取り込むI字型柱列の建物として復元した。しかし、すぐ南には、SB18:1-3に並行してSB19:1-3があり、梁行1間噴き型柱列の建物とみることも可能である。1-3間の柱穴は、直径40cm前後深さ10cm前後である。また、間尺は2.1m+2.0mである。

SB19 1-3を主柱列としSK335～SK338を取り込む範囲のI字型柱列の建物としてとらえた。1-3間の柱穴規模はばらつきが多い。間尺は2.0m+2.5mである。建物範囲を考えると、この集落への東からの出入口と考えるSD205・SD207を側溝とする遺跡に重複する形となる。しかし、切り合いがないため、新旧関係は不明である。

SB20 建物としては不明瞭ではあるが、1-6を主柱列としSK316・SK318を取り込むI字型柱列の建物として復元した。1-6間の柱穴は、真っ直ぐに並ばず、間尺も不揃いで2.5m+2.9m+2.1m+2.35mである。柱穴規模はいずれも、直径20cm～25cm前後深さ20cm前後を測る。

SB21 建物としては極めて不明瞭だが、1-2を主柱列としSK345を取り込むI字型建物として復元した。柱穴規模は、P1が長軸55cm・85cm、P2が短軸25cm・50cmと大きいが、深さ4cm・8cmと浅い。1-2間の間尺は2.9mを測る。

SB22 規模が小さくやや不明瞭ではあるが、L字型柱列の建物として復元した。ただし、付近にはこの建物に伴うと思われるような土坑は見あらず、建物の範囲がどれほどであったかは全く不明である。間尺は、1-3間が1.1m+1.1m、1-4間が1.5mを測る。柱穴規模は、いずれも直径30cm前後である。

SB23 1-3より西側に延びる建物として復元したが、大半がSD201に切られたり調査対象地西側に延びるため詳細は不明である。1-3間の間尺は、1.7m+1.9mを測る。柱穴規模は、直径30cm程度で浅い。また、1-3列の西側に、不整形なSK311・SK334がみられる。これらの土坑を柱穴とすると1-3列からの間尺は、約1.5m前後となる。

SB24 1-5を主柱列とするI字型柱列の建物として復元した。SB19同様、建物範囲を考えると、この集落への東からの出入口と考えるSD205・SD207を側溝とする遺跡に重複する形となる。ただし、SB24の柱穴は、SD205に切られる。1-5間の間尺は、1.35m+1.3m+1.0m+1.7mを測る。柱穴規模は各柱間でばらつきが大きい。

SB25 建物の半分は調査対象地北側に延びるとと思われる。中核屋は、1-6列・6-10列に囲まれた部分と考える。中核屋内部には、3-6列に平行して1-2列が見られる。建物には、SE21・SE22・SK198・SK153等多くの遺構が伴うものと思われる。各柱間の間尺は、1-2間が2.9m、3-7間が1.35m+1.9m+2.2m+1.65m、6-10間が2.55m+1.4m、7-12間が1.65m+1.0m、1-6列と1-2列の間は1.9mを測る。柱穴規模は、P3・P6・P8・P10は、直径

が60cm～85cmと大きく深さも45cm～55cmと深いが、他の柱穴は、直径25cm～40cm深さ15cm～40cm程度である。

SB26 1-5を主柱列としSK159・SK172～SK175を取り込むI字型柱列の建物として復元した。1-5間の間尺は、1.4m+1.6m+1.45m+1.9mを測る。柱穴規模は、深さにはばらつきが見られるが、直径は20cm～25cm前後である。

SB27 柱穴は確認されなかったが、根太痕と考えられる溝が確認された。SD12A・SD12Bは、幅30cm程度の断面方形に近い浅い溝で、SD11・SD13に直交するように確認された。SD11・SD13の間は10.1mを測る。

(b) 井戸

中名Ⅱ遺跡の上層面において、井戸は13基確認された。これらの井戸の周辺にはいずれも建物が見られるがそれぞれ、どの建物に伴うものかははっきりしない。確認された井戸はいずれも石組井戸である。この付近は、現在でも1.5m～2.0m程度掘り下げれば湧水が見られる。断ち割り断面を見てみると、当時の湧水面は、場所によっては若干の差はあるが、地山の堆積・マンガン沈着の様子から見て現在より若干高く1.0m～1.5m前後（標高22.4m前後）であったと思われる。

SE01 掘り方の直径約2m、内径長軸約0.9m・短軸約0.6m、深さ約1.3mの楕円形の石組井戸である。覆土中には廃棄後投げ込まれた人頭大以下の石が多く見られた。石組は円筒形に積み上げているが、底部付近で内径が直径約0.3mと急に細くなっている。曲物は確認されなかったが、他の井戸の例から見て本来曲物が据えられていた可能性が高い。出土遺物は、珠洲のスリ鉢・小壺・甕（42～45）がある。

SE02 深さ約1.4mの円形の石組井戸である。石組の上部がかなり抜き取られているが、確認できた時点で掘り方の直径約2m、内径約0.6mを測る。覆土には地山ブロックが混ざり、廃棄後は、石を抜き取り埋められた。

SE03 深さ約1.35mの円形の石組井戸である。廃棄後西側半分の石が抜き取られているが、掘り方の直径約1.8m、内径約0.5mを測り、底には曲物が残っていた。石組は上部から底まで曲物の直径で円筒形に積み上げられている。

SE04 掘り方の直径約1.9m、深さ約0.95mの円形の石組井戸である。内径は、底部で0.3m余りであるが、上部では約0.9mとかなり急に開く。覆土中には廃棄後投げ込まれた人頭大の石が多く見られ、底には曲物が残っていた。

SE05 掘り方の直径約1.8m、内径約1.05m、深さ約1mの円形の石組井戸である。内径は、底部で0.4m余りと上部に向かってかなり急な角度で広がる。石はかなり乱雑な積み方である。覆土の埋り方から見て、廃棄後一気に埋められたと考えられる。また、すぐ東側に接するように集石遺構がみられ、井戸との関連が予想される。

SE06 掘り方の直径約1.6m、内径約0.75m、深さ約1.2mの楕円形の石組井戸である。覆土中には廃棄後投げ込まれた石が多く見られた。底部内径は約0.3mで、上部から底に向かって緩やかに細くなっている。出土遺物には、瀬戸の瓶子（53）・漆器皿がある。瓶子は、13世紀中頃のもので底に近いところから割れた状態で出土した。漆による補修痕があり、補修されながら伝世した物である。井戸の廃絶に際して行われた祭祀時に投棄された物と考える。

SE08 上部の石組の石がほとんど抜き取られており、かつ断ち割りを行っていないため断面形は不明である。内径は長軸約0.6m・短軸約0.4mを測る。底には曲物が見られた。廃棄後、石が抜き取られ徐々に埋まっていったものと思われる。出土遺物には、中世土師器（49）・珠洲スリ鉢（50・51）がある。

SE17 SE08同様、石組の石がかなり抜き取られているため正確な数値ではないが、掘り方の直径約2.5m、内径約0.7m、深さ1.75mの円形の石組井戸である。石組は底から4段程度しか残っていない。底部で急に細くなるが、ほぼ円筒形に積み上げられていたと思われる。底には2段重ねの曲物はかなり良好に残っていた。

SE21・SE22 両者は切り合い関係が見られ、SE22がSE21を切る。SE22を作る際にSE21の上部の石組は抜き取られている。SE21は、掘り方の直径約1.5m（推定）、内径は約0.9m、深さ約1.9mの円形の石組井戸である。内径は、底部で約0.35mで緩やかに細くなっている。SE22は、丁寧な作りの井戸で、掘り方の直径約2.35m、内径約0.7m、深さ約1.8mの円形の石組井戸である。石組は、ほぼ円筒形に積み上げられている。SE22の北東には集石遺構が見ら

れ、井戸との関連が予想される。また、両者とも底部には曲物が見られた。

SE24 掘り方の直径約1.8m、内径約0.7m、深さ約1.35mの円形の石組井戸である。石組みはほぼ円筒形に積み上げられているが、全体にやや歪んで東側に傾いており、底部でやや細くなる。底には曲物が比較的良好に残っている。出土遺物には、中世土師器(48)がある。

SE41 掘り方の直径約1.5m、内径約0.7m、深さ約1.3mの円形の石組井戸である。廃棄後、人頭大以下の石が多く投げ込まれていた。石組みは、円筒形に積み上げられている。底部には曲物片が僅かに確認された。出土遺物には、図示していないが箸状木製品・漆器碗がある。

SE42 掘り方の直径約2.35m、内径長軸0.7m・短軸0.5m、深さ0.9mの楕円形の石組井戸である。掘り方の東側に寄って作られている。浅いため湧水点に達していたのか疑問がもたれる。上部をSD202に切られているため残りは悪く、雑な積み方であるが、円筒形に作られている。出土遺物には、珠スリ鉢(52)があるが、流れ込みの可能性が高い。

(c) 土坑

SK07・SK08・SK09・SK13・SK14 SB02に取り込まれるか付属する土坑である。しかし、SK13以外は、建物の柱穴に切られる。SK08は、長軸3.25m短軸2.85mの隅丸長方形の土坑である。掘り方の深さは45cmを測るが、やや粘性の強いシルト質砂土で埋め戻し、深さ10数cmのところに貼り床を施す。SK09は、長軸3.25m短軸2.55mの長方形の土坑である。SK08同様、掘り方を埋め戻し、深さ15cm前後のところに貼り床を施す。SK07は、長軸2.5m短軸1.65m、SK14は、長軸1.55m短軸1.35mの長方形の土坑である。深さはともに7cm前後を測り、やや締まった床面を持つ。しかし、その床面は、貼り床とはいえず掘り方も持たない。SK13は、SK14に切られるが、長軸2.4m短軸2.1m深さ20cmを測る長方形の土坑である。

SK95・SK102・SK110・SK118 SB04に取り込まれるか付属する土坑である。しかし、SK118は、SK102・SK110に切られ、SK110・SK118は、建物の柱穴にも切られる。また、SK102内には、建物の礎石が見られる。SK95は、長軸1.2m短軸1.0m深さ14cmの円形の土坑である。底面は丸く、水平を意識していない。SK102は、長軸2.8m短軸2.7m深さ25cmのほぼ正方形の土坑である。底面は、貼り床は見られないが、平坦である。SK110・SK118は、いずれも長軸約2.1m短軸約1.8mを測り、掘り方は持たないが、底面に貼り床が見られる。

SK115・SK119 SB05に取り込まれるか付属する土坑である。SK115は、東側1/3程度が調査区外に延びるが、一辺約2.8m深さ20cmの方形の土坑である。床面は、貼り床状の堅い面が見られる。土坑内には直径15cm～25cm程度の浅いピットがいくつも見られる。また、土坑中央には、崩れているもの偏平な石を二段に積んだ石列が見られ、土坑の一部は埋め戻している。これは、後述するSK58のような厩としての性格が考えられる。SK119は、掘り方がはっきりしない浅い土坑で、覆土に炭化物・焼土が混じり、土坑内及びその周辺には拳大～人頭大の石が集められている。

SK111 SB06に取り込まれると考える土坑である。しかし、SD07に南側1/3を、SK106の一部を切られるほか、SB05・SB06の柱穴にも切られる。一辺約2.6m深さ約30cmの正方形の土坑で、底は水平を意識していない。覆土は、焼土を含む炭層と厚さ5cm～10cmの粘性の強い層の互層である。炭化物は薫たのものや木炭片である。底面には30cm～50cm程度の石が数個見られた。壁面・石には被熱した様子は見られない。

SK01 SB07に取り込まれる土坑である。SD07に一部を切られる、長軸2.2m短軸2.1mの正方形の土坑である。掘り方の深さは35cmを測り、それを埋め戻し深さ10cmのところに貼り床を施す。

SK24・SK25・SK35 SB08に取り込まれるか付属する土坑である。SK24は、長軸2.4m短軸1.85m深さ15cmを測る長方形の土坑である。貼り床は見られないが、床面は堅く締まっている。SK25は、一辺3.6m前後深さ45cmを測る正方形の土坑である。土坑の底面を床面とし、底面は平坦である。床面は、マンガン沈着が見られるものの貼り床は見られない。SK35は、長軸2.45m短軸1.65m深さ35cmの不整形な土坑である。

SK32・SK33 SB09に取り込まれるものもしくは付属すると考えられる土坑である。SK32は、長軸1.8m短軸1.5m深さ12cmの不正形な土坑である。SK33は、長軸2.45m短軸1.55m深さ15cmの長方形の土坑である。底面は水平で、貼り床は見られないがマンガン沈着が見られる堅い床面を持つ。

SK56・SK58・SK67 SB13に取り込まれるか付属する土坑である。SK56は、長軸1.0m短軸0.65m深さ約10cmの楕円形の小型の土坑で、いわゆる楕円柱穴でSK52と対を為す。この土坑から鑄型と思われる土製品が出土している。SK67は、SB14に伴う可能性もある土坑である。長軸1.2m短軸1.0m深さ15cmの長方形の土坑である。覆土に炭化物・焼土が混じる。SK58は、長軸2.8m短軸2.1m深さ0.35mの掘り方を持つ長方形の土坑である。しかし、掘り方は、北側と西側の一部を浅くし、中央部1.5m×1.2mに厚さ数cmの貼り床を施す。さらに、25cm前後の平坦な石を2段積み、石列の東側および南側を埋め戻し石の隙間および北側をバラスで埋める。石列は、内側に面取りをおこなう。また、石列は、北側及び東側には元より無かったものと思われる。その結果、長軸1.65m短軸1.35mの長方形の土坑として機能していたと思われる。石列の内側の覆土に炭化物等は含まれない。

SK70・SK71・SK73・SK77・SK78・SK79 SB15に取り込まれるか付属する土坑である。SK77は、長軸1.75m短軸1.6m深さ5cmの長方形の土坑である。中央部分に長軸0.75m短軸0.35mの長楕円形をしたピットが伴う。このピットは、さらに中心部にピットが見られた。中心部ピットの底から8～10cmまではシルトで埋められ、軸が何かを差し込んだと思われる極小さい穴が確認された。ピット部分以外の床面には貼り床状の面が見られ、中央部のピット東側には炭化物の広がりが見られた。また、SK78は、SK77に隣接する一辺約1.2mの正方形の土坑である。中央南側を中心として同心円状に厚さ約20cmの焼土・炭が広がっている。SK79は、北側1/3が調査対象地外に延びるが、一辺約1.4m深さ約15cmを測る。貼り床は見られないが、床面は強く締まっている。床面の西側から南側にかけて炭化物・焼土層が広がる。さらに、SK77の南側からはSD20に向かって排水溝が見られる。SK70・SK71等周辺の土坑にも焼土や炭化物が多く見られ、SB15は何かの工房跡と推測される。

SK307・SK324・SK325 SB17に取り込まれるか付属する土坑である。SK307・SK325は、長軸2.9m短軸2.7m前後深さ10cm～15cmのやや歪んだ正方形の土坑である。掘り方は持たないが、底面には貼り床を施す。SK307は、床面の一部に焼土と炭化物の広がりが見られた。SK325は、覆土に炭化物・焼土が混じり、床面に10cm～25cm前後の石が多く見られる。SK324は、SK325に切られるため全体は分からないが、一辺約2.15m深さ15cmのやや歪んだ正方形の土坑と思われる。掘り方は見られないが、底面には貼り床を施す。

SK306 SB16に取り込まれるか付属する土坑である。長軸1.8m短軸1.35m深さ30cmの長方形の土坑である。底面は平坦だが、明確な床面は持たない。覆土には炭化物・焼土が混じり、20cm前後の石が10個程度見られた。

SK336・SK337・SK338 SB19に取り込まれるか付属する土坑である。SK336は、長軸1.4m短軸1.35m深さ40cmのほぼ正方形の土坑である。覆土には炭化物が混じる。SK337は、長軸1.0m短軸0.7m深さ10cmの長方形の土坑である。SK338は、長軸1.2m短軸0.6m深さ30cmの楕円形に近い土坑である。覆土には焼土が混じる。いずれも底面は平坦だが、明確な床面は持たない。

SK316・SK317・SK318 SB20に取り込まれるか付属する土坑である。SK316は、直径1.4m深さ15cmのほぼ円形の土坑である。SK317は、長軸2.15m短軸1.9m深さ20cmの不正形な土坑である。SK318は、長軸1.8m短軸1.2m深さ15cmの不正形な土坑である。SK317・SK318ともに、覆土には炭化物・焼土が混じり、床面には締まりはやや少ないが貼り床状のものが見られる。

SK345 SB21に取り込まれるか付属する土坑である。長軸2.0m短軸1.65m深さ12cmの長方形の土坑である。覆土には炭化物・焼土が混じり、底面は平坦でマンガン沈着により強く締まっている。

集石 SB25に取り込まれるか付属する土坑である。SE22の側に位置し、長軸2.4m短軸1.1m深さ8cmの楕円形の

土坑である。15cm～30cmの石が集められている。同様の遺構は、他にもSE05の東側で確認されている。これは、掘り方は余り明確ではないが、大きさが揃った石が長方形に比較的きれいに並べられていた。いずれも井戸のすぐ側で確認されていることが注目される。

SK159 SB26に取り込まれるか付属する土坑である。長軸2.8m短軸1.6m深さ約30cmの長方形の土坑である。底面はほぼ水平で、貼り床は見られない。西側から北側の壁際にかけて15cm～40cm程度の石が見られた。覆土は単層で、炭化物等は見られない。

SK49 直径約2.9mを測る円形の土坑である。東半分が調査対象地外に延び、深さ約60cmを測る。覆土は水平に堆積しており、炭化物等は混じらない。

SK50 直径約2.1mの円形の土坑である。深さ約0.4mを測り、途中厚さ約8cm～10cmの焼土を若干含んだ炭層が見られる。炭化物は、薫状のもの・木炭である。底面は、水平を意識していない。炭層より下層では直径25cm～30cm程度の石が10個前後見られた。壁面・石に被熱した様子は見られない。また、注目される出土遺物に土製暖房器具(70)がある。類似した土坑にはSB16に伴うSK111がある。

SK157 直径2.9mを測る円形の土坑である。SD101A・SK158等に切られるが、深さ約40cmを測る。覆土は単層で、炭化物の塊が混じる。

SK54・SK55・SK301 いずれも掘り方の底面が床面として機能していたと考えられ、底面はほぼ水平である。SK55は、SK54に切られ、やや不整形である。SK54・SK55は、貼り床を持たず、深さ40cm程度を測る。SK301は、全体の1/4程度しか確認できないが、一辺5.5m前後深さ約50cmの正方形の土坑である。底面には、明確ではないが貼り床が見られる。床面付近からは15世紀後半の完形中世土師器が多く出土した。

SK121・SK122・SK123 当初、SD07に直交する溝と考えていたが、連続する土坑であることが確認された。SK122がSD07に切られており詳細は不明であるため、切り合い関係ははっきりしない。いずれも平面形は円形に近い隅丸方形である。SK121は、様々な土が混じった土が東側から堆積している。また、SK123は、各層がブロック状もしくはレンズ状に堆積している。さらに、底面は水平を意識しておらず、土坑そのものを利用していただけと思われる。これらの埋土の様子は、採土穴のあり方に似ている。

(d) 溝状遺構

上層においては、南北東西に走る区画溝を始め多くの溝が検出された。しかし、調査対象地の関係で、どの溝がどの溝につながるのかははっきりしたものはほとんどない。

SD07 東西方向に走り、SD31に突き当たる。勾配はほとんどなく、X40Y45～Y50にかけてみられた炭化物層の堆積から見ても淀みに近い状態であったようである。断面形は、基本的には逆台形を呈す。Y45以西には多くの石が投げ込まれている。出土遺物は、中世土師器(115・116・120)・珠洲甕(117・118)・青磁梅瓶(120)等がある。

SD09 東西方向に走る。区画溝の一部と思われるが、他の区画溝に比べ浅く、層もはっきりしない。また、覆土も単層であることからさほど長い間存在した溝ではないようである。出土遺物には、中世土師器(121～126)・珠洲スリ鉢(128)・瀬戸御目付大皿(127)等がある。瀬戸御目付大皿は漆による補修痕がある。

SD19 南北方向に走り、断面は逆台形を呈する。覆土には東側から流れ込んだ黄褐色砂が厚く見られた。同様の砂は、SD31・SD101Bにおいても東側からの流れ込みが確認されている。出土遺物は、中世土師器04がある。SD19は、SD101A・SD07と繋がる可能性が高い。

SD20 東西に走り、SB15の屋敷地とSB12～SB14の屋敷地を区画する。埋土にはSB15から流れ込んだ炭化物・焼土が多く見られ、西端には石が多く投げ込まれていた。出土遺物には、中世土師器(15)・珠洲蓋(16)・同スリ鉢04がある。中でも珠洲蓋は、他に類例が見られないものである。

SD31 南北方向に走る溝で、北はSD101Bに南はSD19につながる。他の溝同様、勾配はほとんどなく、水はほとんど淀んでいたと思われる。断面形は、逆U字形を呈する。

SD101A 南北方向に走り、勾配は緩いが北流していたものと思われる。SD101Bに直交し、これを切る。断面は逆台形で、覆土に焼土・炭化物は混じらない。出土遺物は多く、中世土師器（130・131）・珠洲スリ鉢（135～141）・越前壺（134）・瀬戸天目茶碗（133）等がある。

SD101B 東西方向に走り、X52Y45付近で南に直角に折れる。勾配は非常に緩くほとんど淀んでいたと思われる。断面は、基本的には逆台形である。覆土には焼土・炭化物が混じり、粘質土と砂質シルトの互層になっている。中には廃棄時に投げ込まれたと思われる石が多く見られる。

SD201 SD19に平行して南北方向に走り、SK301を切る。南側は削平を受けており明確には確認されなかった。勾配は緩いが、北流していたものと思われる。X63～X64Y13～Y17にかけては多くの石が見られる。覆土には、焼土・炭化物が混じる。出土遺物には、中世土師器（155）・八尾甕（157）・青磁碗（156）等がある。

SD202 SB16・SB17・SB18等の建物群を囲むように「コ」の字状に走り、SE42・SX211を切る。勾配は緩くほとんど淀んでいたと思われる。南西部は削平を受けており確認されなかったが、SD201とつながっていた可能性もある。また、この溝を境に東側には遺構密度が激減する事から、集落の東端を区画していたと考えられる。また、東からの出入口部分と考えられる箇所は幅は0.9mと狭くなっている。出土遺物は多く、中世土師器（160～162）・土師質スリ鉢（163）・珠洲壺（166）・珠洲スリ鉢（167）・青磁碗（164・165）等がある。

SD203 調査対象地南側で確認されたいずれの遺構にも切られる。水が流れる方向は不明だが、南北に走る溝がX20Y85付近で西に折れ西南西の方向に走る。覆土は、地山と酷似した焼土・炭化物を若干含む砂（質）土である。

SD209 SD202の東側を南東から北西方向に流れる溝である。覆土の様子から一度埋まった後掘りなおしているようである。覆土には石が多く見られ、焼土・炭化物が混じる。出土遺物には、中世土師器（168・169・170）・青磁碗（171・174）・瀬戸尊式花瓶（170）がある。

(e) その他の遺構

a 道状遺構

道状遺構1は、調査区南西部（X15Y55付近）において、北からSB15の西側を通りSB12～SB14に突き当たり西に折れる道状遺構が確認された。いわゆる波板状凹凸面は検出されなかったが、幅2m余りの堅く締まった汚れた面が検出された。道とSB15との間には排水溝・区画の目的を持つSD20・SD21がみられる。また、西に折れた道の両側には排水溝が見られる。道状遺構2は、調査区南東側（X15Y75付近）においてSD205・SD207に挟まれた幅約2.5mの部分は道であった可能性が高いと考えられる。SD202の一部が狭くびれ、痕跡は確認できなかったが橋が架かっていた可能性がある。

道状遺構1は、調査区北側において検出されていないが、集落を南北に貫く幹線道路であり、道状遺構2は、東から集落にはいるための道であったと考える。しかし、西への続きが確認されなかったことから、SD201・SD202に囲まれた屋敷地へ入るためだけの道であった可能性もある。

b 不明遺構（SX211）

調査区の南端において確認された。深さ1.2m程度あり、幅約10m程度ある。南側は緩やかに立ち上がっているが、北側は急峻な立ち上がりになっており、人の手が加わっている可能性がある。ちょうど集落の南端を区画する位置にあり、堀や船着き場としての機能を考えた。しかし、SD202に切られ、出土遺物がなく時期がはっきりしないため集落に伴っていたかは不明である。覆土は、シルト・粘質土・砂の互層になっており、炭化物・焼土が混ざる。裡土の様子から8層～14層以前と以降の2時期に分けられる。

（越前）

2 遺物

今回の調査で出土した遺物は中世土師器、八尾・珠洲・越前、瀬戸・美濃、輸入陶磁器、フイゴ羽口、鉄製品（釘・刀子・鉄滓）、石製品（砥石・硯・石臼・五輪塔）、木製品（漆器椀）などである。遺構から出土した遺物は少なくその多くは包含層からの出土である。遺物量が少ないため遺構・包含層に関係なく器形が分かるものに関しては出来る限り図化し載せることにつとめた。記述の方法は遺構出土の遺物は遺構ごとに載せ、包含層の遺物は上層と下層に分け器種ごとに載せた。なお、中世土師器の器種分類は宮田氏の区分²⁷を参考にし、珠洲は吉岡氏の編年²⁸を用いた。

中世土師器 比較的数量の多い中世土師器はロクロ成形（Aタイプ）と非ロクロ成形（Bタイプ）に分け、口縁・全体的な形態から分類した。出土層位を上層と下層に分けると、混ざり込みはあるもののAタイプはほとんどが下層から出土している。Bタイプは5タイプまでが下層の出土で、6タイプ～12タイプが上層の出土である。6～12タイプは1～5タイプと比べ水鏡された肌理細かい胎土を使用している。なお、6タイプ以降は破片が小さいものも多く、その特徴を捉えきれなかった部分があり、分類には曖昧な部分があることを断っておく。

ロクロ成形（Aタイプ）

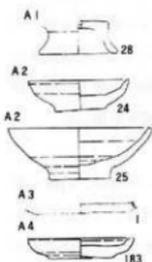
- A1タイプ ロクロ成形後、中空の柱状高台を張り付けたタイプである。底部のみの出土である。
- A2タイプ 体部が途中で軽く内湾し立ち上がるタイプで器形には大小がある。大は口径13～14cm、器高4～5cmを測る。小は口径8～9cm、器高2～2.5cmを測る。小型の器形のタイプの方が体部の内湾度が大い。
- A3タイプ A2タイプより大きな底部をもち底部の器壁は薄い、大型の皿か碗である。底部のみの出土である。
- A4タイプ 小さな底部をもち、短い体部がやや外反気味に立ち上がる。内面端部に平坦面をつくる。内底面は平坦で丁寧なナデを施す。

非ロクロ成形（Bタイプ）

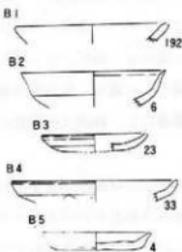
- B1タイプ 体部がやや内湾し幅の広い2段ナデを施すタイプである。
- B2タイプ 体部が端部でつまみ上げるように外反し、端部に2段ナデを施すタイプである。
- B3タイプ 体部は緩く立ち上がり端部をつまみ上げるようになるタイプである。
- B4タイプ やや外反した体部をもち口縁に1段ナデを施す。器形には大小が見られ、大は口径15～16cmを測る。小は口径8～9cmを測る。内面の調整に木口のハケを使用するものと使用しないものがある。
- B5タイプ 体部と底部がはっきり区別出来、短い体部がやや外反しながらまっすぐ立ち上がるタイプである。
- B6タイプ 体部は底部から緩やかに立ち上がり、その境ははっきりしない端部には幅広い1段ナデを施すタイプである。
- B7タイプ 底部は丸く小さい、体部はまっすぐに立ち上がり、比較的深い器形をもつタイプである。
- B8タイプ 底部は小さく体部はまっすぐに延び口縁端部のナデの部分で弱く外反する。器形には大小が見られる。
- B9タイプ 底部が平らで口縁端部は強く外反し外面端部をナデ、面取りを施す。内面端部は平坦で浅い沈線を施すものもある。
- B10タイプ 底部は平らで口縁端部のが弱く外反する。口縁部外面の調整の有無でさらに2種類に分けた。調整のあるもの①タイプである。調整がなく、端部が波打っているもの②タイプである。
- B11タイプ 底部は平らで口縁端部には強いナデ調整を施し外反するタイプである。
- B12タイプ 底部が大きく内底面は丁寧なナデを施し、見込み部分には指ナデが回る。体部は直線的に低く立ち上がり端部のナデ部分が横むように弱く外反するタイプである。

八尾 図化したものは口縁だけであるが壺の胴片なども出土している。

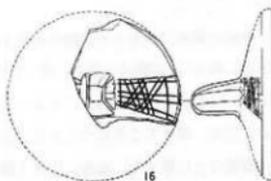
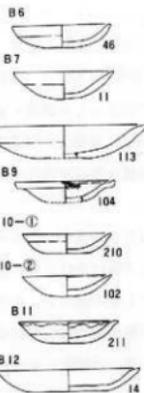
中世土師器
口夕口成形



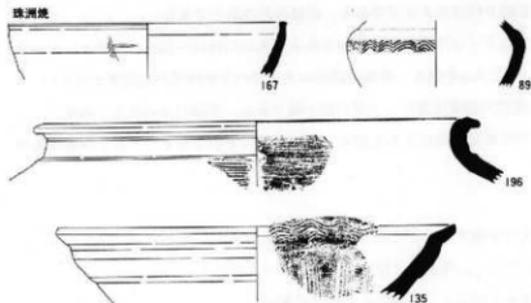
弁口夕口成形



八尾焼



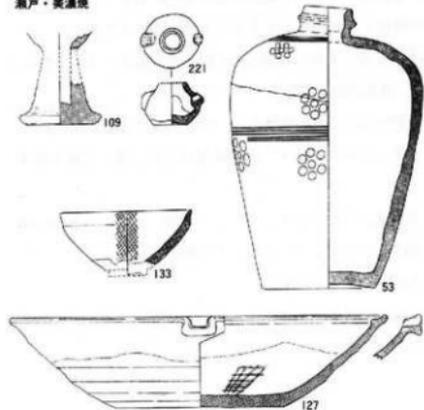
珠洲焼



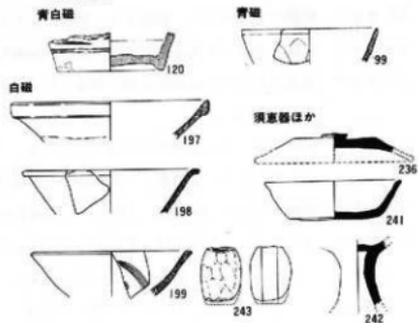
越前焼



瀬戸・美濃焼



輸入陶磁器



第4図 器種分類図

珠洲 壺・壺・スリ鉢が出土している。時期的には珠洲編年のⅠ・Ⅱ期に属するものとⅤ・Ⅵ期に属するもの二時期に大別される。特異なものとしては16が挙げられる。類別がなく断定は出来ないが特殊な容器の壺と考えられる。全体的に非常に丁寧な作りである。

越前 壺が出土している。

瀬戸・美濃 瓶子・尊式花瓶・天目茶碗・卸目付き大皿・端折り皿・水注などがある。全て上層の遺構から出土している。

輸入陶磁器 青白磁の梅瓶底部・白磁碗・青磁碗などがある。出土数は少ない。

須恵器 若干ではあるが須恵器が出土している。すべて下層の包含層からの出土である。

(1) 下層遺構出土遺物

下層の遺構からの出土遺物は少なく、器種は中世土師器・珠洲などが中心で、主に標高の高いA・C・D地区からの出土で、特にSD301からの出土が多い。

(a) 井戸

1は中世土師器でA3タイプである。焼成は良く底部には乾燥時に付いたと思われる線状痕が2条つく。SE25の裏込めの土である⑦層から出土している。この井戸はSB29の付属施設であり、この中世土師器が下層建物群aグループの帰属時期を決める遺物となる。

(b) 土坑

2は珠洲の壺底部でSK177から出土している。3～8は中世土師器で3・4はB5タイプ、5～8はB2タイプである。7は他のB2タイプより器壁が厚手である。これらはSK361からの出土である。この他に図示しなかったが鉄滓・刀子などが出土している。9・10・11は中世土師器で9はB8タイプ、10はB10-①タイプ、11がB7タイプである。共に土坑の浅い部分から出土しており上層からの混じり込みである。

(c) 柱穴

12は中世土師器でSP390から出土した。焼成が甘く調整は不明、器形からB4タイプとする。13は中世土師器のB2タイプでSP793から出土した。他のB2タイプより体部が短く端部の外反は強い。14は中世土師器でB12タイプである。遺構は下層検出であるが14は遺構上面から出土しており混じり込みである。焼成は良好、胎土自体はふい黄褐色であるが、内外面とも灰褐色を呈しており、意識的に煤などを付け、黒色処理をしたようである。この遺物は柱穴の時期を示す遺物ではない。

(d) 溝

15～17はSD20からの出土である。15はA2タイプの中世土師器、16・17は珠洲の製品で17は壺の底部である。16は先述したように類別はなく断定は出来ないが特別な容器の壺と思われる。焼成は良好で内外面とも灰色、胎土は灰白色を呈する。取っ手部分は丁寧なヘラ削りで角の部分には面取りを施してある。角部分の4面の内2面には自然釉がかかる。外面体部は取っ手部分から放射状に指ナデを施し、二方向にヘラでヤグラ状の模様を描く。端部にはヘラ削りを施す。内面にはヘラ削りを施し、ヘラで巴文を描く。1つは鮮明に描かれているがもう一つはかなり崩れている。全体からは非常に丁寧に作られているという印象を受ける。時期的には一緒に出土した15の中世土師器と同時期であると考えられる。18～20はSD27からの出土である。18は土師質の手ずくね土器、にぶい橙色で焼成は良好である。胎土には小石が混じる。成形は底の部分を作ったのち体部を張り付けて作る。調整はほとんど行っていない。19はA2タイプの中世土師器である。20は白磁の碗の体部で、釉色は灰色を帯びた白色を呈する。21～36はSD301からの出土である。36を除き中世土師器である。36はここでは生焼けの須恵器のとしたが中世土師器の可能性もある、小破片なので磨耗が激しいため区別できなかった。21・22・29・30・31・32・33・34はB4タイプである。遺構から出土したB4タ

イブのすべてがSD301から出土している。21は口縁部のナデ部の下に段をもち、内面の調整は指ナデである。22は他のB4タイプより口縁部のナデ幅が狭い。内面の調整には木口のハケを用いている。29は口縁が外反し端部には炭化物が付着している。ここではB4タイプとしたが小破片のため判断としない。31はこのタイプの中では底面が平らで体部の立ち上がりが浅い。32-34はB4タイプの典型的な器形である。共に大型品で口縁部には一段ナデを施す。内底面には木口のハケによる調整を施す。23はB3タイプである。内面の調整には木口のハケを用いている。24-27はA2タイプである。24は完形の小型品である。焼成は良好で、胎土は浅黄褐色を呈し、他のA2タイプの胎土より肌理の細かい粘土を使用し、調整は丁寧になされている。体部が途中で折れるように内湾し、見込みの部分には浅い段をもつ。外底部には乾燥時に付いた線状痕が二条付く。25は大型品で焼成・胎土・調整は24と同様である。内底部が凹み、高台はこのタイプの中では比較的高い。口縁の一部には炭化物が付着している。24と25はSD301の最下層から並んで出土している。調整も丁寧になされており、胎土も他のものとは違っていることなどを考慮すれば祭祀的な意味をもっているものと思われる。28はA1タイプである。37はSD203から出土している須恵器の壺の底部である。全体の磨耗が激しく流れ込みであろう。溝の時期を示すものではない。

(2) 上層遺構検出遺物

上層の遺構から出土した遺物はA地区の西側、B地区、C地区西側と調査区の西側からの出土が多い。

(a) 獨立柱建物

38は10-②タイプで、SB14からの出土である。褐灰色を呈し焼成は良好、口縁には軽いナデは施されるものの端部は未調整のまま被打っている。39はSB07のP3からの出土でA2タイプである。体部は真直ぐ延び、途中で内側に屈曲し、口縁部はやや外反する。内面の調整はヘラ状の調整器具を用いており、この様な調整方法は当遺跡ではこの個体しか見受けられない。見込み部分の浅い段や、体部が内側に屈曲するものへラ状の調整器具のためである。外底面には乾燥時に付いた2条の線状痕が見られる。SB14自体は上層の遺構であり、下層からの混じり込みである。40はSB14のP1から出土したB11タイプの中世土師器である。他のものと比べ器壁が薄く、口縁部はかるく外反する。浅黄褐色を呈し、焼成はやや甘い。41はSB25から出土したB3タイプの中世土師器である。木口のハケを用いて調整される。SB25自体は上層の遺構であるので下層からの混じり込みである。

(b) 井戸

42-45はSE1からの出土である。42はV期のスリ鉢、43は小壺で双耳壺となる。44は壺胴部破片、45はV期の壺口縁部である。46・47はSE21出土の中世土師器である。46はB6タイプで胎土は灰白色を呈し焼成は良好、体部は細く立ち上がり端部には幅広いナデを施す。47がB10-①タイプである。49-51はSE08からの出土である。49は中世土師器のB10-①タイプで同タイプのものより器壁が厚手である。端部には炭化物が付着する。50・51珠洲のV期のスリ鉢、同一個体と思われる。52はSE42からの出土、珠洲のI期の鉢口縁部である。53はSE06出土で瀬戸の灰釉瓶子である。胴部を一部欠くものは完形品である。胴部と肩部にかけては漆による接合痕がある。粘土巻き上げ成形で、文様は肩の中央と胴部に5条の螺旋状の楕円沈線を描き、胴全面に竹管による「七曜星」の文を押捺する。灰釉は不安定で沈着化しており、釉の遺存状況は悪く剝離が激しい。遺物の帰属時期は13世紀中頃とおもわれる。井戸は上層で検出しており、周辺の遺構や、過去の石組井戸の調査例の時期から考えると井戸の帰属時期は16世紀代が妥当であり、瓶子は伝世品の可能性が高い。出土状況は井戸の下層からまともな状態で出土しており、図示出来なかったが一緒に漆器の皿が出土している。これらの遺物は、井戸廃棄時に一緒に埋められた可能性がある。

(c) 土坑・柱穴

54・55はSK07出土である。54は珠洲壺胴部片で内面に陶製の押圧具の痕跡が見られ、古い段階の珠洲である。55

は雷文帯をもつ青磁碗である。56・57はSK08出土である。56はB10-①タイプの中世土師器で口縁部に炭化物が付着している。57は底部糸切りで内外面に施釉されている。近世の瀬戸・美濃の灰釉の小壺と思われる。58-60は共にB10-①タイプの中世土師器でそれぞれSK09・13・24から出土している。61はSK11から出土した珠洲のV期スリ鉢である。62-65はSK17から出土した中世土師器で共にB10-①タイプである。63は端部に炭化物が付着している。66-68はSK25から出土した66・67が中世土師器で66がB4の小型のタイプで、内面には木口のハケによる調整が施される。67はB10-①タイプで端部には炭化物が付着する。68はV期の珠洲スリ鉢である。69-72はSK44から出土した。72を除き中世土師器で共にB10-②タイプである。72は珠洲のスリ鉢である。77はSK50出土の土師質の暖房具である。外面には布跡が残り、内面には2次的なものであろうか、鑿跡が残る。78はSP980から出土したB10-①タイプの中世土師器である。79はSK91出土のB6タイプの中世土師器、80はSK43出土の美濃の鉄釉の天目茶碗、81はSK92出土の竜泉窯系の内面に草花文をもつ青磁碗である。82はSK102出土のB10-①タイプの中世土師器である。83はSK103出土のB12タイプの中世土師器である。84はSK109出土のB11タイプの中世土師器である。85・86はSK111から出土した中世土師器でそれぞれB10-①・B10-②タイプである。87はSK106出土の珠洲甕の胴部破片である。88はSK112出土の珠洲のスリ鉢で胎土と卸目からIV・V期のものであろう。底に砥痕あり、表面が非常にツルツルしており砥石に転用されている。89は珠洲の肩部に櫛目波状文をもつ産R種でSK161出土である。90はSK154出土の端反りの青磁皿である。91はSK183出土のA2タイプの中世土師器である。92はB10-①タイプの中世土師器でSK159から出土した。93は-97は中世土師器でSK130から出土した。93-95はB9タイプ、96はB11タイプである。98・99はSK306出土で98は中世土師器でB5タイプ、99は鑄のない蓮弁文をもつ青磁碗で透明感のある黄緑色の釉が施釉されている。100は近世の青磁の盤である。101・102はSK332から出土した中世土師器で共にB10-②タイプである。103はSK324出土で美濃の皿の底部である。灰釉で内底面には砂目の跡が残り漆接合痕が見られる。104-106はSK325出土で104・105は共にB9タイプの中世土師器である。104は内面に炭化物が付着している。端部は極端に屈曲し受け口状を呈する、B9タイプの典型的な器形である。106は美濃の灰釉端反皿の底部である。削り出し高台で内底面に施釉する。後述の159・164と同一個体と思われる。107はSK340出土でB10-②タイプの中世土師器である。108はB9タイプの中世土師器、109は美濃の灰釉尊式花瓶である。底部糸切りでこれらはSK331から出土している。110は珠洲の甕胴部破片である。内面には平行な5条の押圧具の痕跡が見られ、焼成も良く、古い段階の珠洲である。111はB9タイプの中世土師器でSP681出土である。112はSP859出土の中世土師器でB10-②タイプである。113はSP349出土のB8タイプの中世土師器である。

(d) 溝

114はSD06出土のB10-①タイプの中世土師器で、口縁部は緩く外反し、端部には強いナデ調整が入る。全面に炭化物が付着している。115-118はSD07出土である。115・116が中世土師器でそれぞれB8・B10-②タイプである。116の口縁部には全面炭化物が付着している。117・118は珠洲のスリ鉢で卸目と胎土からIV・V期と思われる。119・120はSD08出土で、119がB10-②タイプの中世土師器で、120が青白磁の梅瓶の底部である。121-128はSD09から出土している。121-126は中世土師器で121はB10-①タイプ、122・123はB10-②タイプ、124はB4タイプ、125・126はB8タイプである。127は美濃の卸目付大皿である。内面の卸目の部分には炭化物が付着している。128は珠洲のV期のスリ鉢である。129はSD33出土の鑄蓮弁文の青磁の口縁である。130-141はSD101からの出土である。130・131は中世土師器でそれぞれB10-②タイプである。132・133は瀬戸美濃の鉄釉の天目茶碗である。134は越前の甕で、肩部には2条の櫛目沈線がめぐる。溝が南に曲がるコーナー部分でまとまって出土した。135-140は珠洲である。135・137は口縁に波状文をもつV期のスリ鉢である。136・138・141はスリ鉢の底部で135もしくは137と同一個体と思われる。139はI期のスリ鉢である。他の遺物とは時期が合わないため、流れ込みと思われる。140は口縁に波状文をもつV期のスリ鉢である。142・144・145はSD102出土である。142は口縁に波状文をもつV期のスリ鉢である。144はB10-②タイプ

の中世土師器で、145は珠洲のV期のスリ鉢である。146-152はSD106出土である。151・152を除き中世土師器である。146・147はB11タイプ、148・150はB8タイプ、149はB10-②タイプで内外面に炭化物が付着する。151は近世陶磁器、152は越中瀬戸の鉄釉丸碗底部である。153・154はSD108出土である。153は中世土師器でB5タイプである。154は同安楽系の青磁皿で、見込み部分に細い櫛書きの雷光状の施文をもつタイプと思われる。溝自体は上層の遺構であり、遺物は流れ込みと思われ、溝の時期を示すものではない。155-157はSD201から出土した。155はB11タイプの中世土師器である。156は竜泉窯系の青磁碗、157は八尾焼の口縁部である。157は流れ込みと思われる。158は珠洲のⅡ期の壺口縁部である。159はSD201出土の美濃の端反皿の底部で、先述の106と同一個体である。160-167はSD202出土である。160-162は中世土師器で160はB11タイプで端部には炭化物が付着している。161はB9タイプで端部外面には丁寧なナデを施し、見込み部分には調整時に付いたと思われる浅い沈線が回る。162はB8タイプである。163は土師質のスリ鉢か、もしくは珠洲の生ヤケの未製品であろうか、使用により脚目は磨耗して消滅しており、底部の器壁が非常に薄い。164は美濃の端反皿の体部で、先述の106・159と同一個体である。165は白磁で口縁部を外反させ端部を水平にするもので内面には沈線が回る。他の遺物の時期と合わないため流れ込みか、もしくは伝製品と考えられる。166・167は珠洲の製品で166は壺口縁部、167はⅡ期の鉢である。168-174はSD209出土である。168・169・172は中世土師器である。168は丸底のB7タイプ、169・172はB9タイプの完形品である。169は外端部に面取りを施し底部は少し凹んでいる。172は端部の調整は弱いナデを施し口縁部には炭化物が付着している。170・171・173は美濃の製品である。170は灰胎の尊式花瓶の胴部の膨らんだ部分である。先述の109と同一個体となると思われる。173は天目茶碗で口縁部が外反する。174は鏝をもたない蓮弁文の青磁碗で、先述の99と良く似ている。175はSD207出土でB11タイプの中世土師器である。見込み部分には、強い指ナデによる調整が施されている。176・177は須恵器の壺・高杯壺高台部分である。遺構から出土しているが混じり込みと思われ溝の時期を示すものではない。

(3) 下層包含層出土遺物

下層の包含層から出土した遺物は中世前期に属するものでA2・B4タイプの中世土師器が大半を占めている。遺物数は少ないものの、分布は各建物群の周辺に多く見られる。なお、上層・下層の遺物分布図で各グリッド内にスクリーントーンで示してあるのは包含層出土、遺構内に示してあるのは遺構内出土の遺物である。

178-192は中世土師器である。タイプ別では178-182・185・186はA2タイプ、この内186が大型で他のものは小型である。183がA4タイプ、187-191はB4タイプ、192はA1タイプである。178は端部外面に浅い沈線がめぐる。A2タイプではこの個体だけである。調整は細かく、整形後布などでロクロナデの痕跡を消している。179は外底部に2条の線状痕が付く。180は底部の器壁が他のものより厚い。181は調整方法は179と似る。外底部には2条の線状痕が付く。182は磨耗が激しく調整は不明、器形からA2タイプとした。184は底径6cmを測り小型のタイプとしては底径が大きい。外底部には2条の線状痕が付く。185は磨耗が激しく調整は不明、器形からA2タイプとした。186は粗雑な作りで端部は丸く納める。183は完形品で、少し歪んでいる。A4タイプはこの個体だけである。焼成は良く、浅黄褐色を呈し、調整は丁寧で、ロクロ整形後、指ナデで整形痕をスリ消してある。188は体部と底部の境は明瞭で、口縁は垂直に立ち上がる。内面は木口のハケで調整する。190は体部と底部の境は不明瞭で体部の立ち上がりは短い。内面は指ナデで調整する。192は口縁には幅広い2段ナデを施している。

193-196珠洲である。193・194がⅡ期のスリ鉢、195はⅢ期スリ鉢である。196はⅡ期の甕である。

197-200は白磁である。197は大きな玉縁をもつタイプ。198・199は口縁部を外反させ、端部を水位にするものである。199は内面に櫛目文をもつ。200は碗の体部破片で、内面に沈線状の段がめぐる。胎土・釉色から197と同一個体と思われる。

(4) 上層包含層出土遺物

上層包含層から出土した遺物の分布は各建物の周辺に多く見られ、特にA地区西とB地区北とC地区中央に集中している。

中世土師器は201～220である。タイプ別では216はB6タイプ、208・217・220はB8タイプ、215はB9タイプ、203・205・209・210・214はB10-①タイプ、201・202・204・208・218・219はB10-②タイプ、211・212はB11タイプである。この内、口縁部などに炭化物が付着しているものは204・206・208・210・211・212・219・220であり、210・211は全面に炭化物が付着している。

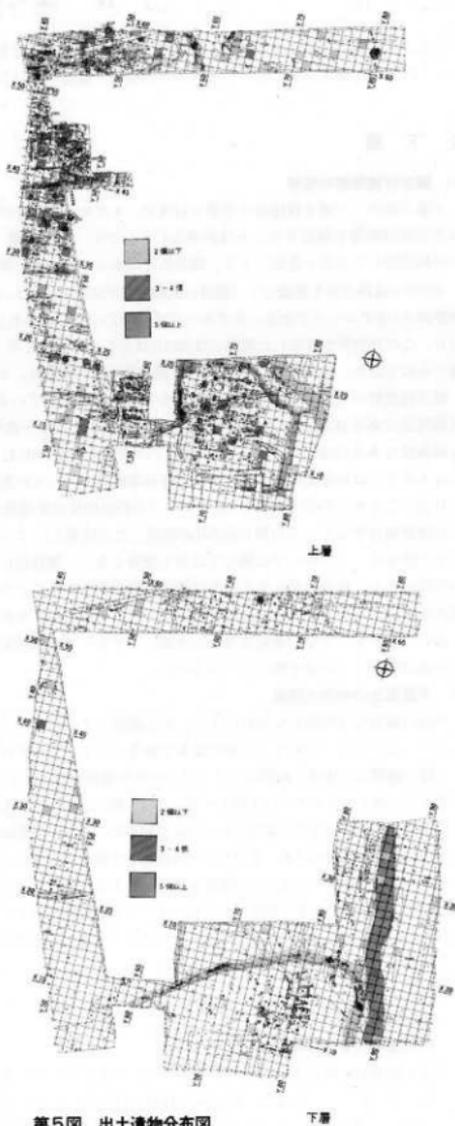
221～224は瀬戸・美濃である。221は鉄釉の耳付水注である。222・223は鉄釉の天目茶碗、224は灰釉の瀬戸甌子口縁部である。先述の53より釉色が濃い。肩部に3条の螺旋状の櫛目沈線を描いている。

225～232は珠洲である。225は壺胴部破片、後はスリ鉢である。226～229は古い時期の珠洲であり下層からの混じり込みである。232は底部で使用のため卸目も消滅し、器壁も非常に薄くなっている。233～235は青磁である。

236～243は古代の須恵器・土師である。近接する中名I遺跡では試掘により古代の遺構が確認されており、ここからの混ざり込みと思われる。224は釘、225は刀子の一部である。

246～251は石製品である。246は1辺約5cmの菱形の型の硯である。海の部分の隅に凹みがあり、注ぎ口と思われる。作りは荒く、砥石などからの転用と考えられる。248～251は砥石である。その他、図示しなかったが福光町の桑山石を使用した石臼の上石、五輪塔の空風輪、フイゴの羽口などが出土している。羽口は直径10cmを測り、中央に直径3cmの穴が貫通している。先端は炉内にあったためガラス質の物質・炭化物等が付着している。

(高梨)



第5図 出土遺物分布図

下層

IV まとめ

これまで、調査の概要を記述してきたが、十分な整理・分析を行っていないため考察としてまとめるに至っていない。ここでは上層と下層に分け、それぞれの遺構・遺物についての問題点を若干の考察を加え、まとめに変えたい。

1 下層

(1) 掘立柱建物群の推移

下層で検出した掘立柱建物は全部で14棟で、4グループに分けられる。これら個々の建物群は離れており、直接にはその新旧関係を検証することは出来ない。しかし、他の遺構（SD301・302など）との関係との関係や柱穴及びその付属施設からの出土遺物により、間接的ではあるがその新旧関係を検証することが出来る。

SD301の流路方向を意識して（建物の長軸方向がSD301に平行、もしくは直角に建てられている。）建てられている建物群はa・dグループである。aグループはSD112・110に挟まれており、この溝は東を流れるSD301に沿って作られており、この建物群が存在した時期にはSD301は存在していたと考えられる。dグループのSB41はSD301に接するように建てられており、SD301が完全に埋没した後に建てられており、aグループはdグループより古いことがうかがえる。

掘立柱建物の柱穴、もしくは付属施設から遺物が出土しているのはa・cグループである。aグループではSB29の付属施設であるSE25から1点だけではあるがA3タイプの中世土師器が出土しており、cグループではSB38・40の付属施設であるSK360・361からB2タイプの中世土師器が出土している。帰属時期は後述する中世土師器の編年からA3タイプは12世紀中頃、B3タイプは12世紀後半として位置づけられる。これにより、aグループはcグループより古いことがうかがえる。c・dグループの新旧関係は直接検証できないがA3タイプとB2タイプの中世土師器では時期幅は少なく、この間にSD301が埋没したとは考えにくい。建物群の新旧関係はa→c→dの順で捉えることが出来る。bグループに関しては出土遺物もなく、間接的にも新旧関係を検証する手だてがない。しかし、柱間の不規則さや、柱列の乱れなど中世後期の様相が見られることから、一番最後に建てられた可能性が高い。故に、下層の建物群はa→c→d→bの順番で推移していったと考えられる。なお、それぞれの帰属時期は不明瞭な点もあるものの、aグループが12世紀前半から中頃、cグループが12世紀後半、dグループが13世紀前半、bグループが13世紀中頃以降とここでは位置づけておきたい。

(2) 下層出土の中世土師器

今回の調査では時間的な制約により、出土遺物とその出土した遺構間の相互の関係についての十分な検討は出来なかった。ここでは、これまでの研究成果を参考にして、それぞれのタイプの中世土師器の帰属時期を示してみたい。

下層で確認した中世土師器はAタイプ（ロクロ成形）が4タイプ、Bタイプ（非ロクロ成形）が5タイプの計9タイプである。A1・2タイプはI期1小期、3はI期2小期に位置づけられる。A4タイプは県内ではあまり見られない特異な器形である。県内での類例としては同じ埴中町の小倉中稲遺跡が挙げられる。ここではロクロ土師器の最終段階であるI期3小期に位置づける。B1タイプは幅広い2段ナデのタイプでI期小1期に属しA1・2タイプと同時期である。B2タイプは2段ナデではあるが端部が外反しB1より新しく、I期2小期に位置づけられる。ただし、このタイプの中世土師器はこれまであまり確認されておらず、この地域特有のタイプであろうか。B3・4タイプは1段ナデの中世土師器が出現するI期3小期に位置づける。B5タイプはII期3小期に位置づける。（高梨）

2 上層

(1) 建物群の推移

1 中世後半における町並み

中世上層面は15世紀末から16世紀後半にかけて形成された村落であり、区画溝や道などによって計画的に配置されているものである。中世前半の散村的な様相とは一変し、何らかの拘束力のもとに集村した状態ととらえることができる。県内の調査例では福光町梅原胡堂遺跡、福岡町開幹大滝遺跡に良く似た例がある。梅原胡堂遺跡では15世紀代から集村がみられ、大滝で区画され、道に沿った建物の配置がみられる。開幹大滝遺跡は16世紀代の城下手

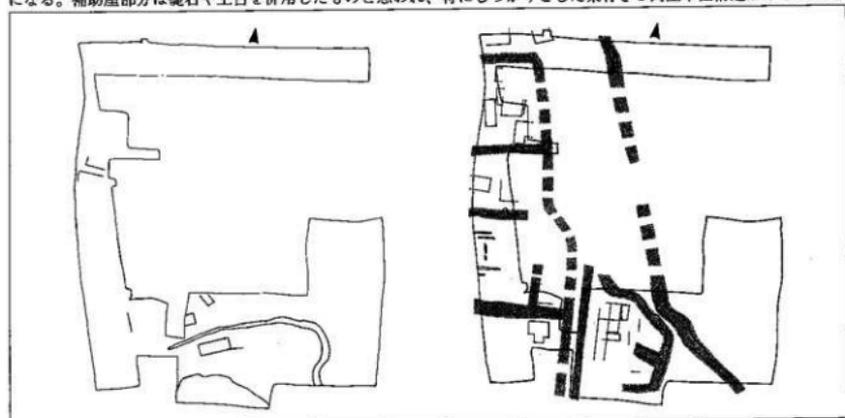
工業集落で、道路に沿った長方形区画の中にそれぞれ建物が配置されている。中名Ⅱ遺跡の場合も両者に良く似ており、明確な主要道路遺構の確認はできていないものの、主要道路に沿った村落と思われる。

今回調査された中名Ⅱ遺跡の中世上層面は遺構の配置、切り合いから少なくとも2時期にわかれ、区画溝の形成されない段階と区画溝が形成されている段階とに分かれる。区画溝が形成されない段階には数棟の建物が点在する状況であるのに対し、区画溝が形成された段階には南北に5つのブロック、東西に2から3のブロックが形成される(第A図)。西側のブロックは南北に20mもしくは40mの間口をもち、各ブロック間は幅50～100cmの溝で区切られる。区画する溝のうち2重になっているものは中央部が道路になっているものと思われ、一重の溝についても片側に堅くしまった汚れ面をもつものがあり、区画溝に沿って、それぞれの建物へ通路が確保されていたものと思われる。また、調査区中央を南北に直接的に伸びるSD19とSD201は幅1mを超えるもので、この村落の中核的な水路と思われる。調査部分が一部であったため全容はわからないが、両溝にはさまれた部分を主要道とみることも可能である。調査区の東側は河川跡であり、建物等は存在しない。

各ブロックには建物が2～3棟程度同時に建っていたものと想像されるが、道路に面して並ぶような規則性はみられない。開闢大滝遺跡では一つのブロックにおいて道路側に面して建物が並び、後背空間に井戸、畠や庭といった完結したセットをもつのが特徴であったが、中名Ⅱ遺跡では同じ区画ブロックをもちながらそのあり方に違いがある。それは開闢大滝遺跡が手工業集団の町並みという性格を帯びているのに対し、中名Ⅱ遺跡は2～3棟の建物が相互補完的な役割で一つのブロック内に存在するといった一般的な生活単位を基本形としていることによるものと思われる。

井戸は基本的に石組みで建物1棟に対して1基の割合で存在する。このありかたは中世後半期以降に特徴的なあり方で、中世末の石名田木舟遺跡、開闢大滝遺跡なども同様である。建物に対して井戸が構成要素の一つとして確立した段階と言える。

建物は26棟復元したが、当核期の建物は遺構として残りにくく、明確に把握できたものは少ない。しかし、開闢大滝遺跡などの調査例を参考に柱列、土坑、井戸、区画溝の位置関係から建物の敷地を想定することが可能である。特に土坑は貼床や堅固面をもつものが多く、建物に付属する遺構とはほぼ断定できることから、それを取り込む範囲に建物を想定できる。建物は梁行き1間型のものとI字・L字柱列配置のものが多く、土台の併用が想像されるものもある。当核期の建物構造については明確なことがわかっていないが、梁行き1間型のものが早い段階からみられ、柱列がI字、L字、T字に並ぶだけのものが開闢大滝遺跡で16世紀代になってみられる。後者は主要柱列のみが掘立柱で、他の柱が礎石や土台を用いた構造と考えられる。バラエティが多く、自由な組み合わせが可能のため比較的簡素な構造が想像され、階層的には一般的な建物であろう。現存する古民家にも類例がある。梁行き1間型は梁行き1間部分が建物の中核部分(中核屋)となり、時代が新しくなるにつれてこの両脇等に下屋(補助屋)が付帯するようになる。補助屋部分は礎石や土台を併用したものと思われ、特にしっかりとした梁行き1間型単位構造がみられるも



第6図 中世上層面遺構概略図

のほど階層的には高い家屋と思われる。そういった点では中名Ⅱ遺跡では建物構造にバラエティが多く、一般的な様相が強い建物が主体であるといえる。

2 堅穴状土坑

当遺跡には大小合わせると50余りの方形堅穴状土坑が存在する。この堅穴状土坑は神奈川県鎌倉市内遺跡で検出されるような方形堅穴建築址や北東北で検出される中世堅穴住居とは異なるもので、それ単体では完結しない付属施設的な性格であると考えられている。特に富山県内では220例を超える中世期の堅穴状土坑が検出されているが、竈や炉をもったり、柱をもつなどの生活住居として認識される例はなく、中世初期もしくは古代から引き続き建物の一部を構成する土坑空間であると言える。

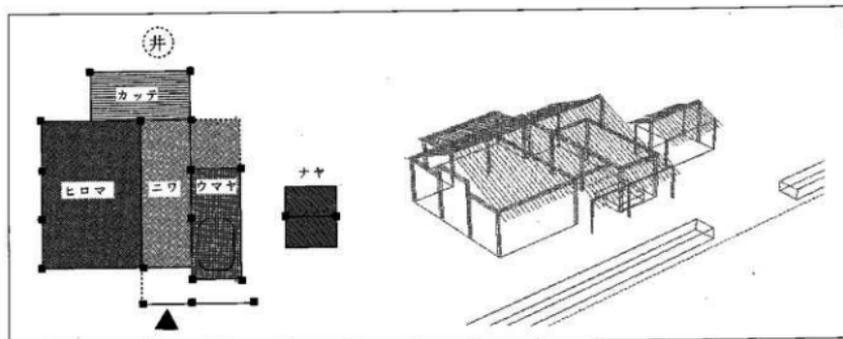
中世の堅穴状土坑の分類について筆者は現在6類、細分で10類に考えている⁸⁷⁷。その中で当遺跡において多かったのは1類で、3類・5C類・6類が少数ながら認められた。各類ごとに代表的な土坑についてみることにする。

1 a類にはSK01・SK24・SK307などがあり、比較的規模の小さい土坑が多い。深さは極めて浅いのが特徴で、検出面によっては存在が見失われる可能性が高い類である。1 b類にはSK08・SK09などがあり、一旦埋め戻された土坑中位面に貼床面をもつ。貼床は1 a類と共通して苦汁等と想定されるものを混ぜ込んだ極めて堅い土で構成される。炭化物が土坑内に堆積する2類は明確なものがなく、梅原胡摩堂遺跡、開幹大滝遺跡では普遍的に見られることと対照的である。3類にはSK50・SK78があり、SK50は皿状に炭化物が堆積し、焼土はそれを取り囲むようにみられた。炭化物下には人頭大の礫がみられたほか、バンドコが出土しており、もとは炉であったものと推定される。SK78は皿状に薄く堆積した炭化物の上に焼土がこんもりと乗っており、特に中心部直径20cmほどは強く焼けている。開幹大滝遺跡で数多く見られた炉関連遺構と酷似しており、円形の炉壁が乗っていたものと思われるものである。5C類にはSK58があり、L字の石列があるものである。石列の外側は埋め戻されており、内部は石列2段分の深さに掘られたままで120cm四方の空間が確保される。また、この空間の北側には数cm大の小礫によるバラスが残存している。石列は内面が面揃されている。類似例には梅原胡摩堂遺跡のSK5482・SK5957・5958があり、SK5482はL字の石列である。近世民家に残る石列を伴う土坑には水場、竈、囲炉裏、既、土間(土間境)が考えられるが、中名Ⅱ遺跡、梅原胡摩堂遺跡の例ともに建物の下屋部分に位置することや規模から既である可能性が高いと考えている。6類にはSK54・SK55があり、大型である点に特徴がある。この類の土坑からは遺物が出土することは少なく、土坑は埋め戻された状態で機能していた可能性がある(埋め戻されていた場合は5 a類になる)。いずれにせよ土坑そのものに機能があるというよりは整地的な様相が強い類といえる。

3 SB13(中世末の民家)の復元

SB13は復元した建物の中で最も全容が推定できるもので、先に既の可能性が高いとした5C類の堅穴状土坑を伴うものである。

この建物の中核的な柱は、柱穴径が大きく深い点から柱穴4・7・3・16と思われ、この1間×1間が中核屋(空間A)になる。そのうち、柱穴4と7は底部に礎石をもち、この間には更に深い柱穴5と6があるが、対応する柱が対辺には存在しないことから、壁際の加重を分散するために意識的に補充された柱と思われる。この中核屋の西側に



第7図 SB13の復元

は柱穴8から11で構成される補助屋(空間B)と、更に外へ柱穴14・15で構成される張出(空間C)、南側には柱穴12・13の補助屋(空間D)がある。また、柱穴17から19は通路、出入り口等の屋根部分を支える柱列と思われる。柱穴20・21については檜円柱穴であり、独立した物置小屋のようなものではないかとみている。

さて、この建物について間取りを復元してみたいが、まず以下の点に注目した。①中核屋(空間A)は近世民家では中核的な単位構造である広間部分に相当すると想定でき、空間A、空間B・Cをそれぞれ単位構造とみなすことができる。②道路状遺構や区画溝SD20等との配置からみてこの建物に対する通路は建物の北側にあると思われ、柱列17～18が入り口であると思われる。③富山県の民家ではほとんどの場合、厩は入り口側手前にある。④この建物の井戸は未発見であり、調査区からみると柱穴12・13の南側に存在している可能性が高く、空間Dはダイドコロ・カッチ(裏側)に相当する可能性がある。

以上を基に間取りを想像復元したのが第B図である。この場合棟方向は東西となり、2間型の建物となる。富山県の近世民家は3間広間型が主流とされるが、座敷に相当する部分がなく、3間型に発展する前段階の形とみるべきだろうか。面積的には50㎡そこそこであり、現存する3間広間型の近世民家とはやはり一線を画する感がある。この他に梅原胡摩堂遺跡のSB160・165・166が同時期で良く似ており、同様の復元が可能であると考えている。これらの復元は推測に基づく部分が大半であるから、今後慎重な検討が必要であると考えているが、中世前半からみられる総柱獨立柱建物とそれに伴う堅穴状土塊の復元に向けて参考になるのではないかと考えている。(河西健二)

(2) 石組井戸について

今回確認された石組井戸を宇野氏の研究成果あてはめてみると、基本的に円筒形のCⅠ類に属する。時期はいずれも15世紀後半～16世紀前半のもので、宇野氏が木組井戸から石組井戸への転換期とした時期である。

これらの石組井戸をその断面形から次のように分けることが出来る。

A類…比較的偏平な大きな石で積み上げられた断面が円筒形のもの(SE03・SE22・SE24・SE41)

B類…A類と似るが、石は偏平ではなく、曲物部分で急に細くなるもの(SE01・SE06・SE17)

C類…底部から上部にかけて比較的急な角度で広がるもの(SE04・SE05・SE21)

石の積み方を見てみると、積み上げる方向に特に規則性は認められないが、A類のものは石の大きさ・面をある程度揃え、丁寧な積み方のものが目立つ。それに対し、C類のものは石の大きさ・形状も揃わずに雑な積み方のものが多い。SE02・SE08は、残りが悪く石組の断面形等は不明であるが、いずれもA類もしくはB類であると思われる。

また、曲物の有無と石の積み方から次のように分けられる。

I類…曲物を持たず、石を掘り方の底から積み上げる。(SE02・SE08・SE41)

Ⅱ類…掘り方の深さに関わらず、曲物の上面から石を積み上げる。

以上のことを踏まえ、他の遺跡の石組井戸についてみる。しかし、石組井戸の確認例はあまり多くないうえ、断面形態が底まで分かる例が少ない。

- ・婦中町小倉中稲遺跡では延べ16基の井戸が確認され、うち石組井戸は9基である。しかし、そのうち2基は、石がほとんど抜かれてしまっている。時期は、15世紀後半～16世紀後半である。曲物は、7基で確認されている。
- ・婦中町小倉中稲Ⅱ遺跡では3基の井戸が確認され、うち2基が石組井戸である。時期は、時期決定の決め手となる遺物がなく不明である。曲物は1基で確認されている。
- ・婦中町友坂遺跡では2基の井戸が確認され、うち1基が石組井戸である。時期は、15世紀後半である。底には曲げものが据えられている。
- ・井口村井口城跡では素掘りの井戸も含め5基以上確認され、うち1基が石組井戸である。15世紀後半のものである。この石組井戸には曲物が確認されている。

また、上市町弓庄城にも石で井戸枠をつくったものが見られる。しかし、作りが特異であることから今回は省いた。先の分類をこれらの石組井戸にあてはめてみると、小倉中稲遺跡においては、AⅠ類が2基・AⅡ類が3基・BⅡ類が2基となる。また、小倉中稲Ⅱ遺跡においてはAⅠ類・BⅡ類各1基ずつ、友坂遺跡は特異な形をしているがBⅡ類の範疇とする。井口城のものは底部の形状が不明であるがA類もしくはB類である。

A類～C類の時間的差について考えてみる。当遺跡のSE21とSE22の切り合いよりC類よりA類のほうが新しいことが分かる。また、出土遺物からみてもC類・B類・A類の順で新しくなり矛盾はない。I類とⅡ類の時期差については、例が少ないためはつきり断定はできないが、Ⅱ類の方が若干新しい可能性があると考ええる。より詳細な検討

については、現在、富山県文化振興財団（以下、財団）が調査・整理中の能越自動車道関連調査の報告を待ちたい。

しかし、同時期の遺跡である小杉町白石遺跡⁹¹⁵・福光町梅原胡摩堂遺跡⁹¹⁶・高岡市下佐野遺跡⁹¹⁷・魚津市早月上野遺跡⁹¹⁸などの井戸は、素掘り井戸・木組井戸などしか見られない。木組井戸から石組井戸への転換がなされていったということであれば、同時期に木組井戸・素掘り井戸しか見られない遺跡があるというのは説明がつかない。この差は、井戸の立地や地質に左右されるものである可能性があることが高麗〔上市町教委 1984〕・押川〔井口村教委 1990〕によって指摘されている。しかし、それだけでは解決しない面も多くあり、井戸の用途・遺跡の性格等について検討が必要であると思われる。（越前）

(3) 上層出土の中世土師器

ここでも下層と同様にこれまでの研究成果を参考にしてそれぞれのタイプの中世土師器の帰属時期を示してみたい。

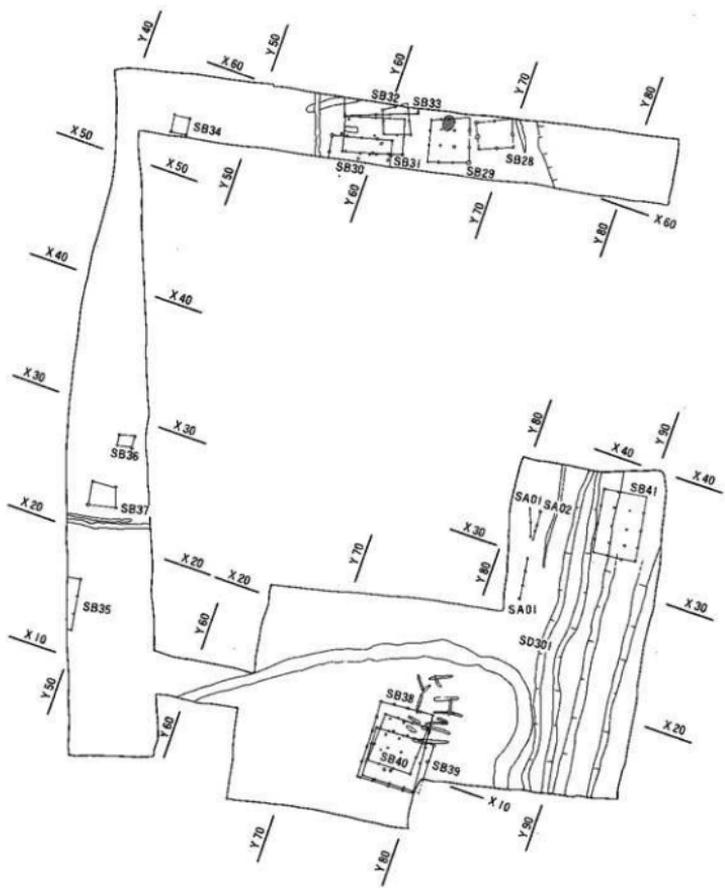
上層において出土した中世土師器は非ロクロ成形のタイプでB6タイプからB12タイプまでの7タイプである。B6・7タイプは幅広い1段ナデをもつタイプで、6が平底7が丸底であり共にⅡ期3小期にあたる。B8タイプは4期2小期にあたる。B9タイプはV期1小期にあたり、弓庄城跡などにその類例が見られる。B10タイプは端部に調整を加えるものと加えないものに小分割した。共にⅣ期1小期にあたり、端部に調整を加える①タイプの方が古い様相をもつと思われる。B11タイプはⅣ期1小期にあたり、B12タイプはV期3小期にあたる。

これまでの研究成果を元に当遺跡出土の中世土師器を帰属時期を検討してみたが、細かい部分でこれまでの編年観・タイプ分けが合わない遺物も見受けられ、特に下層出土の中世土師器に関してはその傾向が顕著に見られた。これは、これまでの研究成果が中世遺跡の調査例が多い呉西（富山県西部）を中心とした編年観であり、呉西の東側に位置する当遺跡においては、地域差としてその違いが生じたものと理解したい。今後はより狭い地域での編年観の確立が必要となっていく。

（高梨）

参考文献

- ※1 熊野神社稚児舞保存会 1991 『熊野神社稚児舞の由緒』
- ※2 越中町教育委員会・越中町婦人ボランティア講座 1992 『越中町歴史のあしあと』
- ※3 越中町 1967 『越中町史』
- ※4 宇野隆夫 1989 『井戸考』『考古資料に見る古代と中世の歴史と社会』真陽社
- ※5 河西健二 1994 『雑記 建物遺構』『埋蔵文化財年報(5)』(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所
- ※6 河西健二 1994 『中世末から近世の建物』『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告書』(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所
- ※7 宮田進一 1992 『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
- ※8 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- ※9 越中町教育委員会 1993 『富山県越中町小倉中稲遺跡調査報告』
- ※10 越中町教育委員会 1993 『富山県越中町小倉中稲(2)遺跡調査報告』
- ※11 越中町教育委員会 1993 『富山県越中町小倉中稲Ⅱ遺跡』
- ※12 越中町教育委員会 1984 『富山県越中町友坂遺跡発掘調査報告書』
- ※13 富山県井口村教育委員会 1990 『井口城跡発掘調査報告書』
- ※14 上市町教育委員会 1984 『富山県上市町弓庄城跡第4次緊急発掘調査概要』
- ※15 富山県小杉町教育委員会 1994 『小杉町白石遺跡発掘調査報告』
- ※16 (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所 1994 『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告書』(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所
- ※17 高岡市教育委員会 1992 『2.下佐野遺跡、中尾地区』『市内遺跡発掘調査概報Ⅰ』
- ※18 富山県教育委員会 1975 『富山県魚津市早月上野遺跡第1次緊急発掘調査概報』
- ※19 (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所 1994 『3 開発大滝遺跡』『埋蔵文化財年報(5)』(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所
- ※20 (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所 1994 『埋蔵文化財年報(6)』(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所
- ※21 太田博太郎他 1976 『日本建築史基礎資料集 二十一 民家』中央公論美術出版
- ※22 河西健二 1994 『雑記 建物遺構』『埋蔵文化財年報(5)』(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所



井



第8図 遺構図(下層) (1/800)

SD301 A - A'

A L = 24.20m



sp301 B - B'

B L = 24.00m

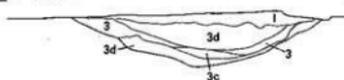


SD301

- ① 黄褐色シルト質砂土
- ② におい黄褐色砂土
- ③ 黄褐色シルト質砂土
- ④ a 黄褐色シルト質粘土
- ④ b におい黄褐色シルト
- ④ c 灰白色粘質土+黄褐色シルト
- ④ d 黄褐色シルト+におい黄褐色シルト

SD301 C - C'

C L = 24.10m



SD301 D - D'

D L = 24.10m



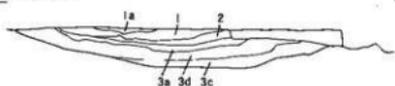
SD302 A - A'

A L = 24.20m



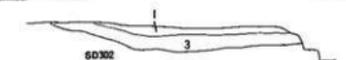
SD302 C - C'

C L = 24.20m



SD302 B - B'

B L = 24.00m



SD302 D - D'

D L = 24.10m

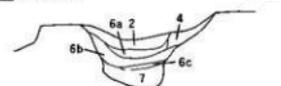


SD302

- ① におい黄褐色砂土
- ② a [3] + におい黄褐色シルト質砂土
- ② b におい黄褐色シルト
- ② c におい黄褐色シルト質粘土
- ② d 黄褐色シルト質粘土
- ③ a 黄褐色シルト質粘土
- ③ b におい黄褐色シルト質粘土
- ③ d 灰黄褐色粘質土

SD203②-②'

② L = 24.20m



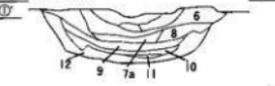
SD203①-①'

① L = 24.10m



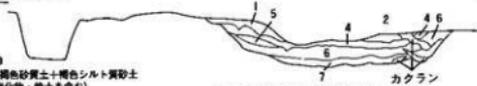
SD203③-③'

③ L = 24.20m



SD203④-④'

④ L = 24.20m



SD203

- ① 黄褐色粘質土+褐色シルト質砂土 (炭化物、粘土を含む)
- ② 黄褐色土+灰白色シルト (炭化物、粘土を含む)
- ③ a 黄褐色シルト
- ③ b 黄褐色粘質土+灰白色シルト (炭化物、粘土を含む)
- ③ c 灰白色粘質土+黄褐色シルト (炭化物、粘土を含む)
- ③ d [3] + 黄褐色シルト
- ④ a 灰黄褐色シルト+灰白色シルト (炭化物、粘土を含む)
- ④ b 黄褐色シルト質砂土 (炭化物、粘土を含む)
- ④ c [3] + 黄褐色シルト
- ④ d a 黄褐色粘質土+黄褐色シルト (炭化物、粘土を含む)
- ④ d b 黄褐色粘質土+黄褐色シルト (炭化物、粘土を含む)
- ④ d c 黄褐色粘質土+黄褐色シルト (炭化物、粘土を含む)
- ④ d d 黄褐色粘質土+黄褐色シルト (炭化物、粘土を含む)
- ④ e a 黄褐色粘質土+黄褐色シルト (炭化物、粘土を含む)
- ④ e b 黄褐色粘質土+黄褐色シルト (炭化物、粘土を含む)
- ④ e c 黄褐色粘質土+黄褐色シルト (炭化物、粘土を含む)
- ④ e d a 黄褐色粘質土+黄褐色シルト (炭化物、粘土を含む)
- ④ e d b 黄褐色粘質土+黄褐色シルト (炭化物、粘土を含む)
- ④ e d c 黄褐色粘質土+黄褐色シルト (炭化物、粘土を含む)
- ④ e d d 黄褐色粘質土+黄褐色シルト (炭化物、粘土を含む)

SD203⑤-⑤'

⑤ L = 24.30m

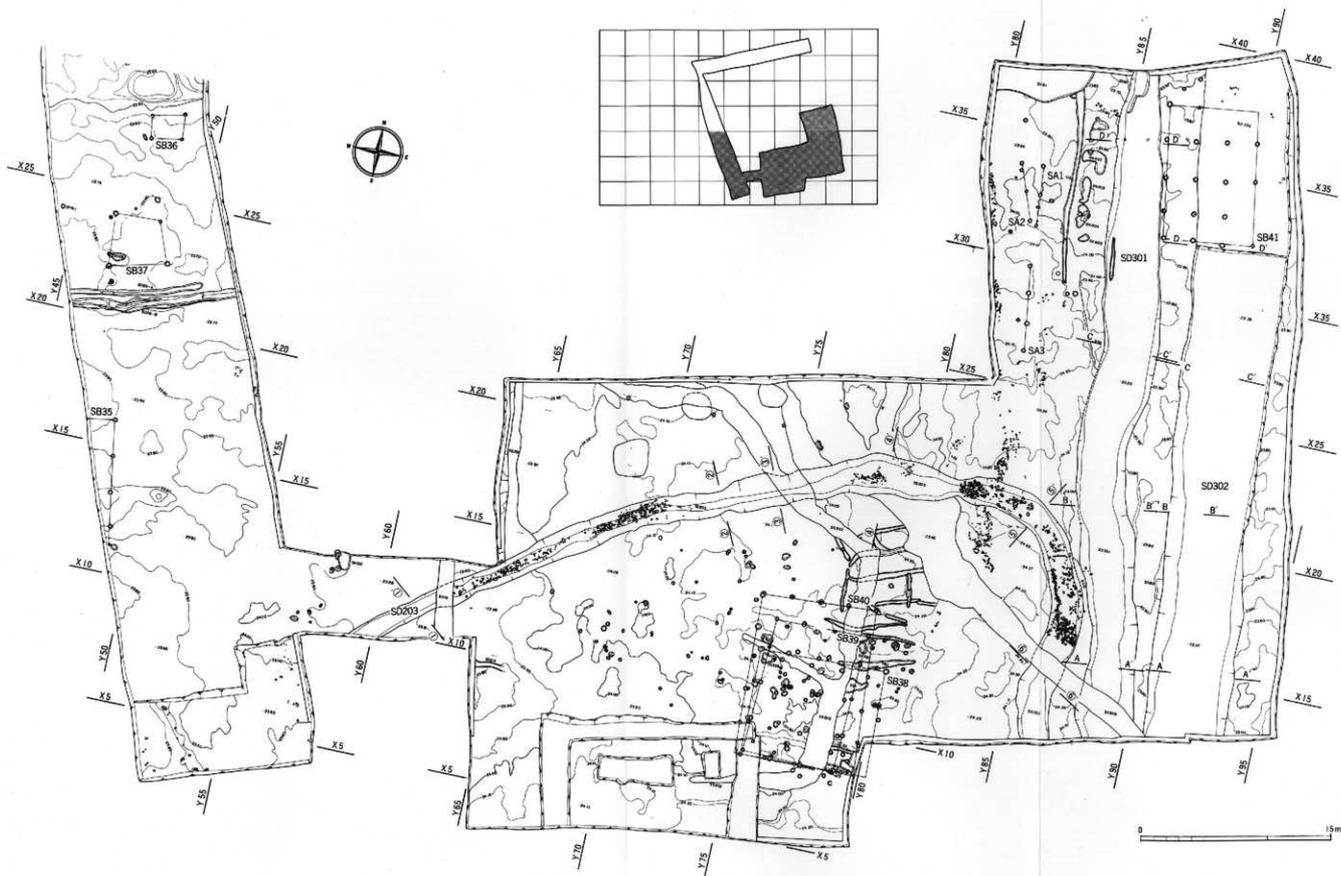


SD203⑥-⑥'

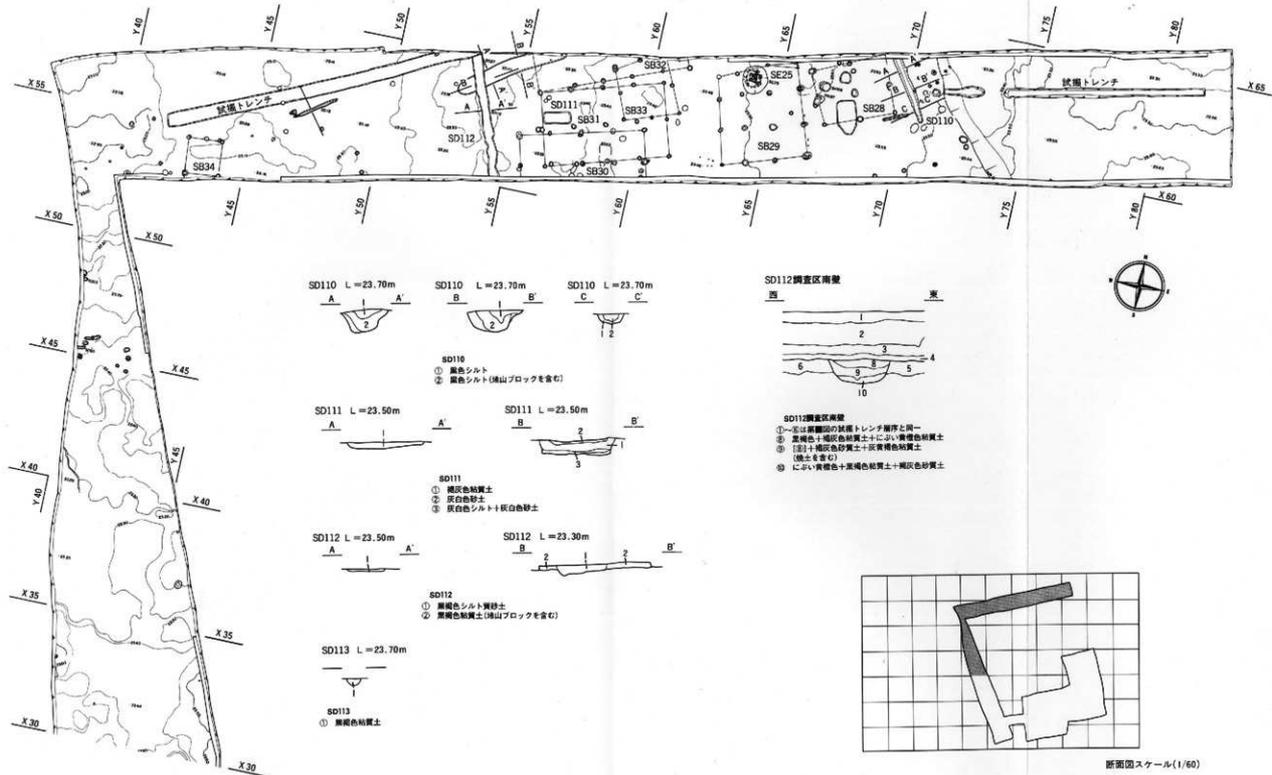
⑥ L = 24.40m



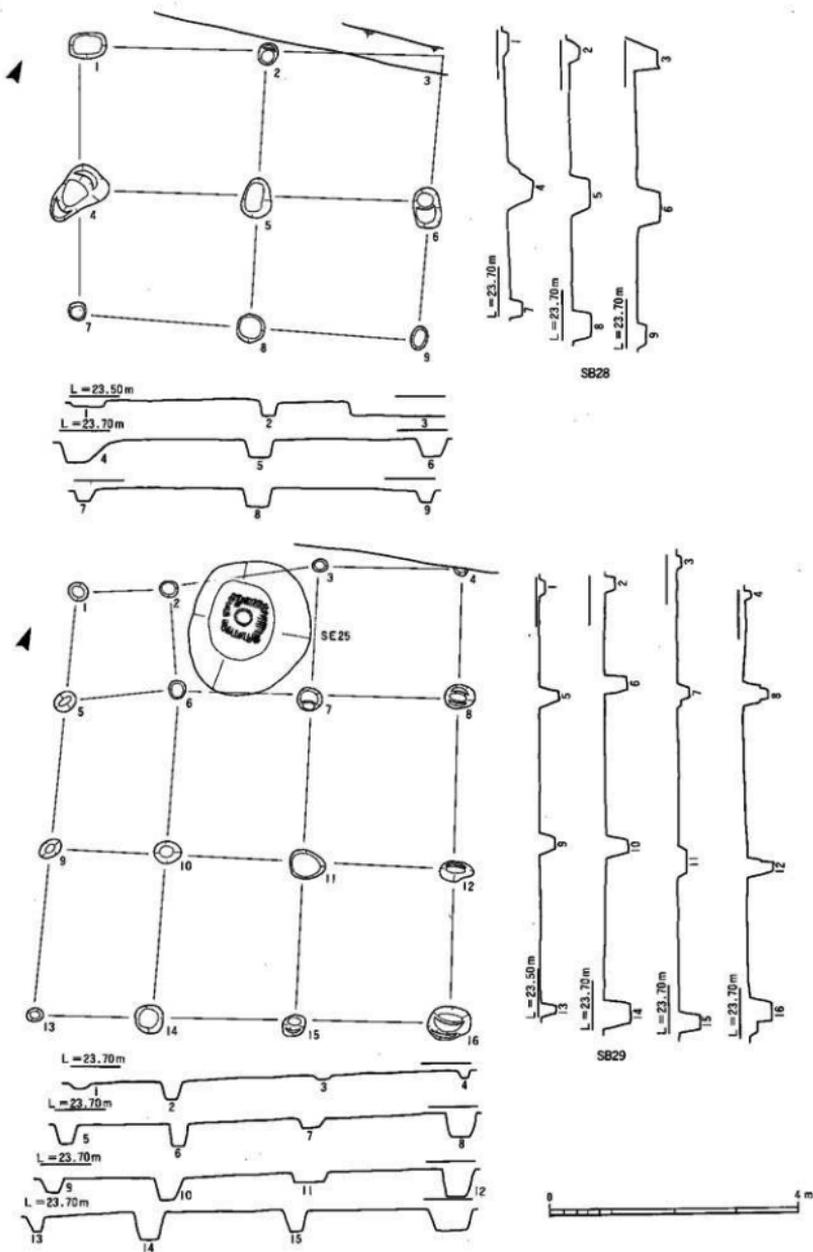
第9図 下層検出断面図 (1/60)



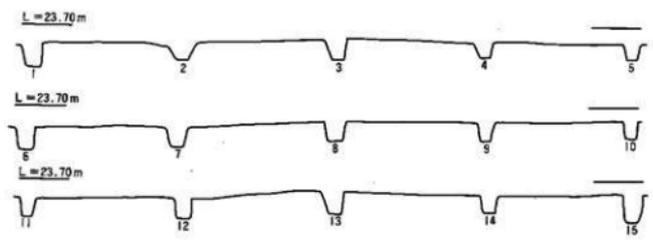
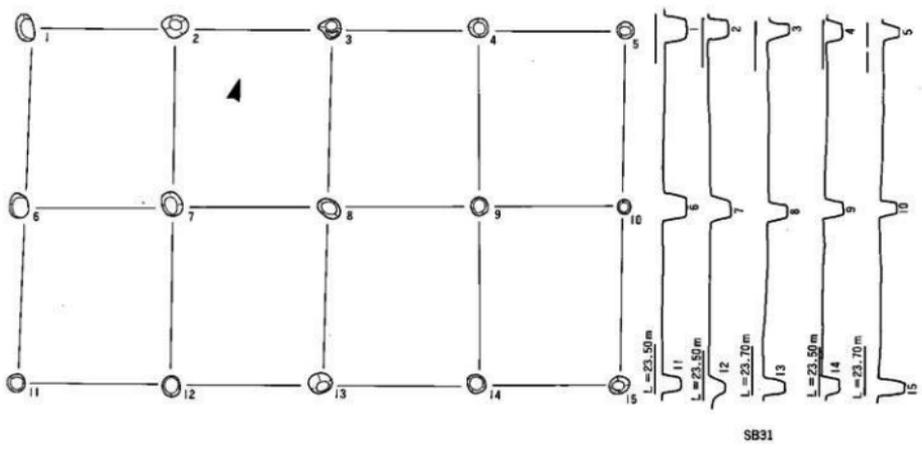
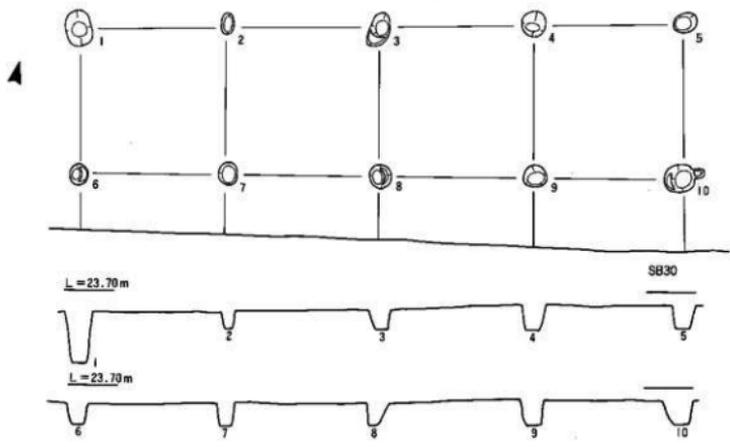
第10圖 下層遺構圖(1) (1/300)



第11図 下層遺構図(2) (1/300)、溝断面図 (1/60)

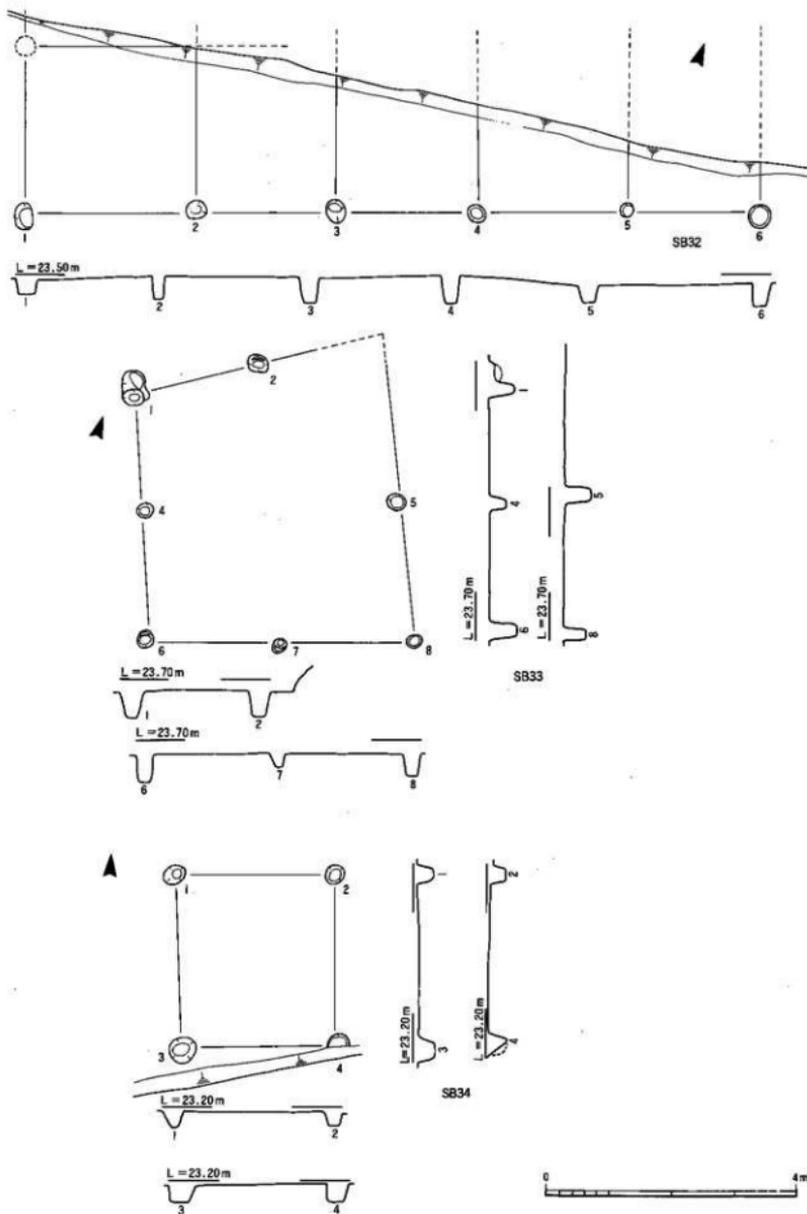


第12圖 SB28·29 (1/80)

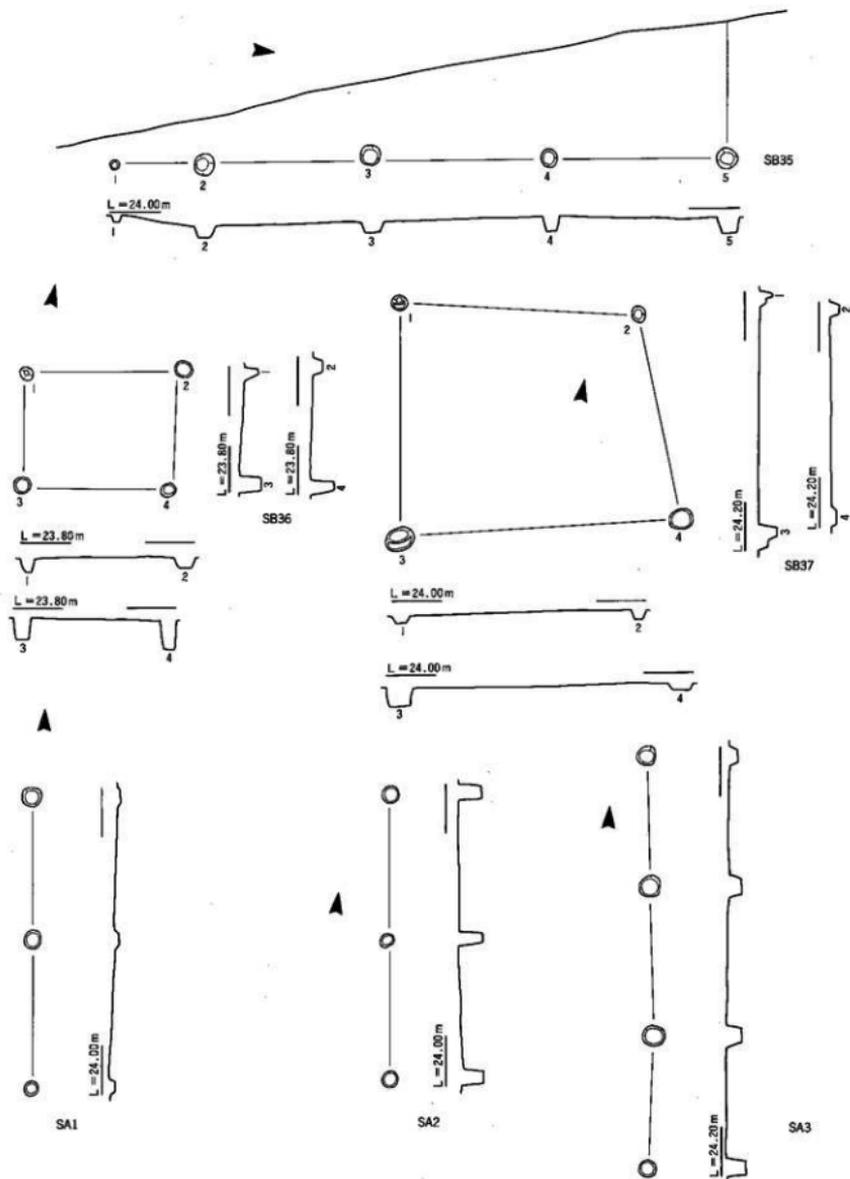


第13图 SB30·31 (1/80)

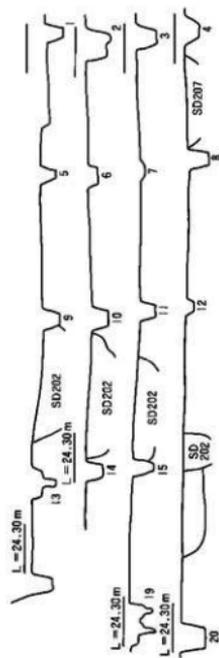
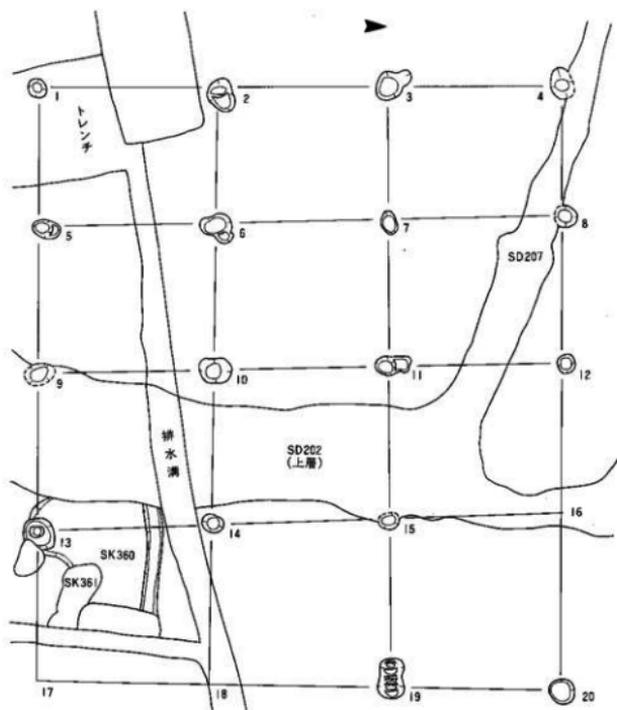




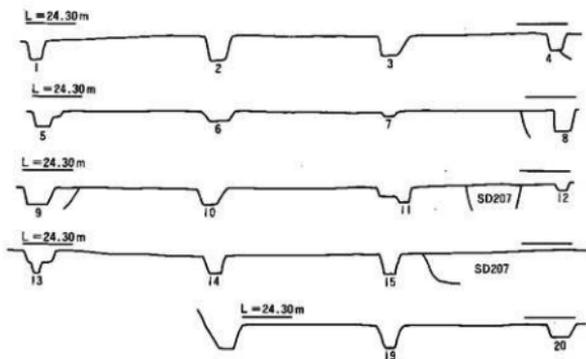
第14图 SB32·33·34 (1/80)



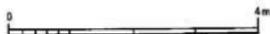
第15图 SB35·36·37、SA1·2·3 (1/80)

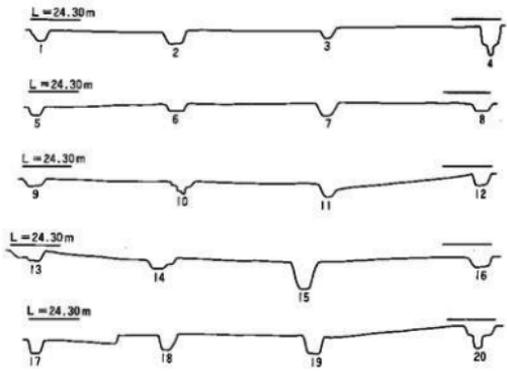
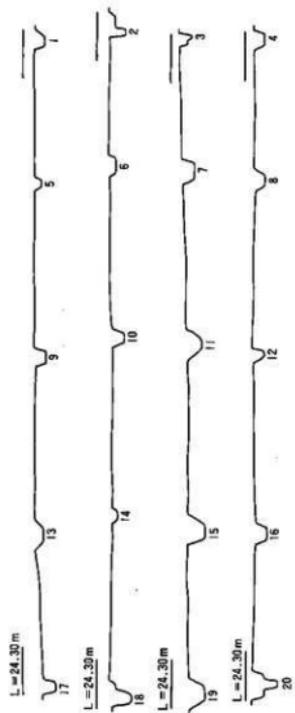
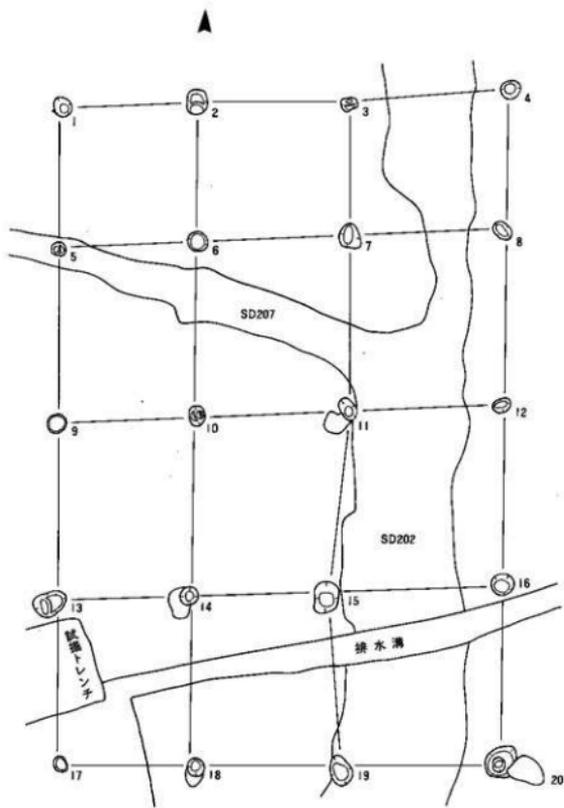


SB39

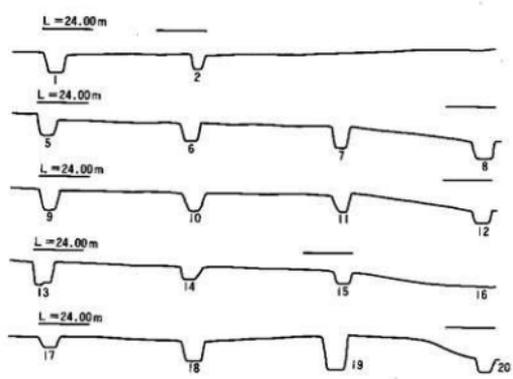
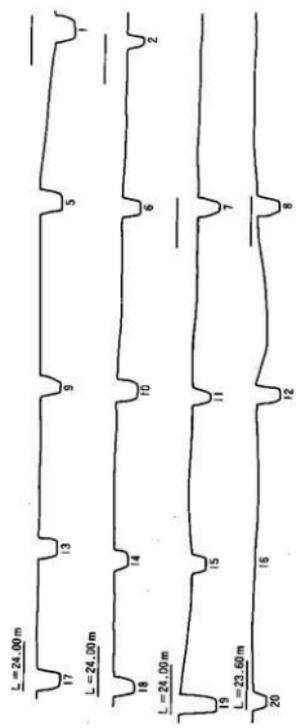
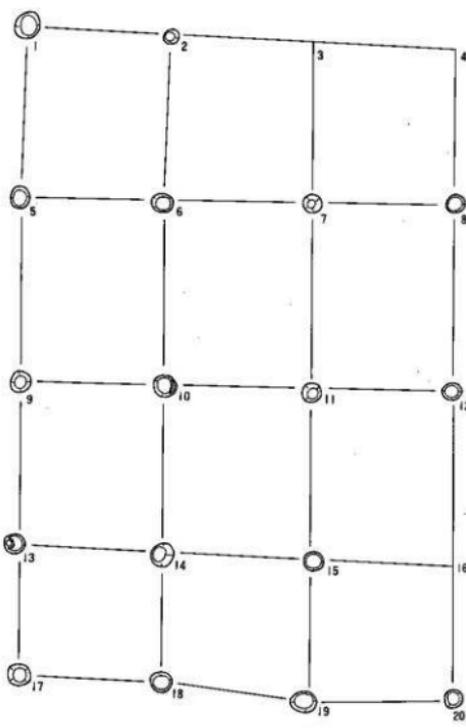


第16図 SB38 (1/80)

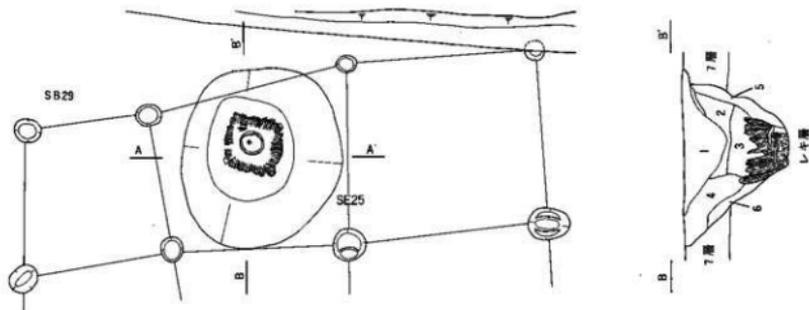




第17図 SB39 (1/80)

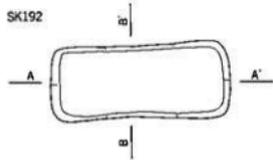


第19図 SB41 (1/80)



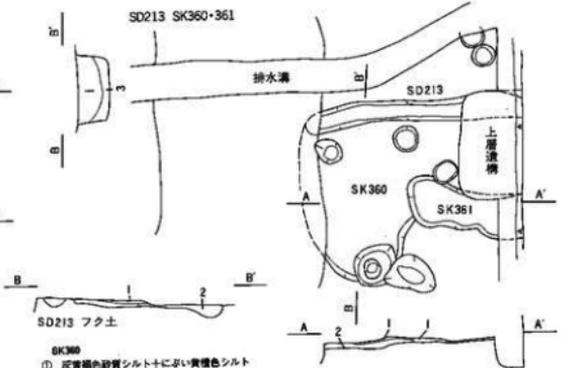
SE25

- ① 黄褐色砂質土+褐色砂質シルト (炭化物・焼土を含む)
- ② 黄褐色粘質土+褐色砂質シルト (炭化物・焼土を含む、酸化で赤味を帯びる)
- ③ 黄褐色粘質土 (酸化で赤味を帯びる)
- ④ 黄褐色砂質土+黄褐色粘質土 (酸化で赤味を帯びる)
- ⑤ 黄褐色シルト質砂土+黒褐色粘質土 (酸化で赤味を帯びる)
- ⑥ 褐色シルト質砂土 (焼土・コウキを含む、酸化で赤味を帯びる)
- ⑦ [3] 灰白色砂質土 (酸化で赤味を帯びる)



SK192

- ① 褐色シルト質砂土
- ② 褐色粘質土+褐色砂土
- ③ 褐色粘質土

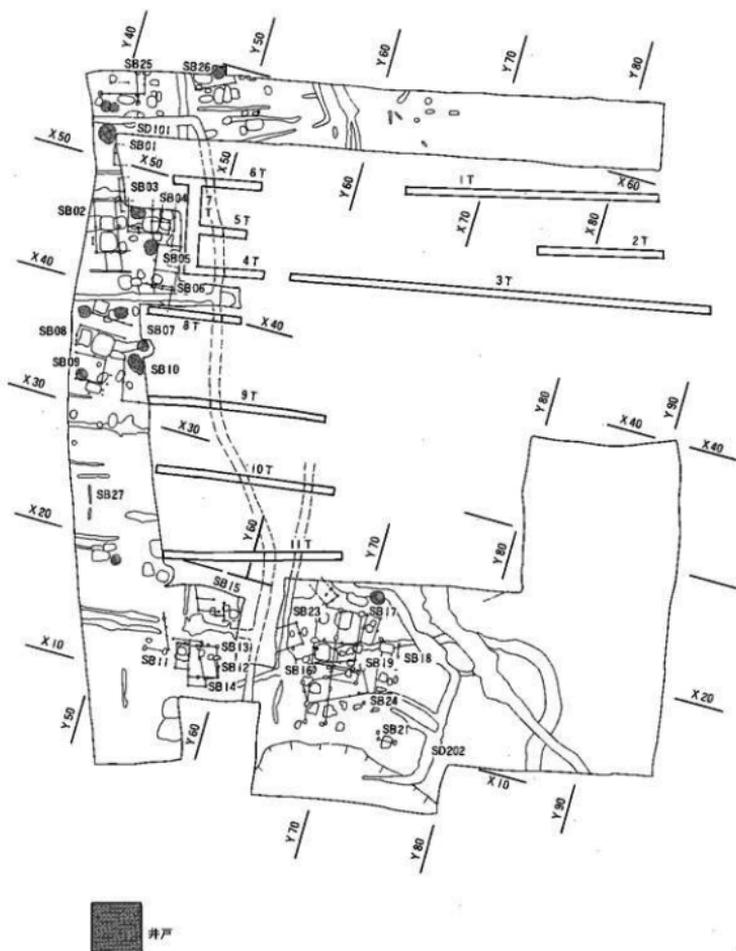


SK360

- ① 灰黄褐色砂質シルト+いり黄褐色シルト (酸化で赤味を帯びる)
- ② 褐色シルト+灰白色シルト (酸化で赤味を帯びる)

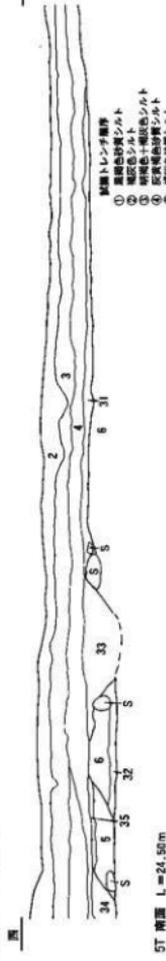
SK361

- ① 灰黄褐色砂質シルト (炭化物・焼土を含む、酸化で赤味を帯びる)
- ② 褐色+黒色シルト (炭化物・焼土を含む、酸化で赤味を帯びる)



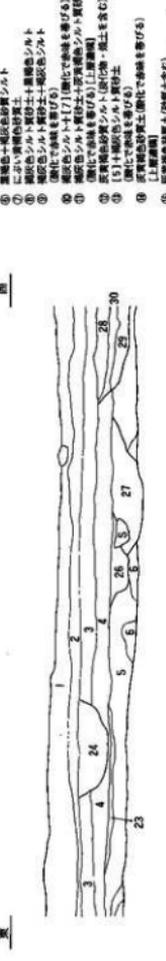
第21図 遺構図(上層) (1/800)

4T 北側 L=24.50m



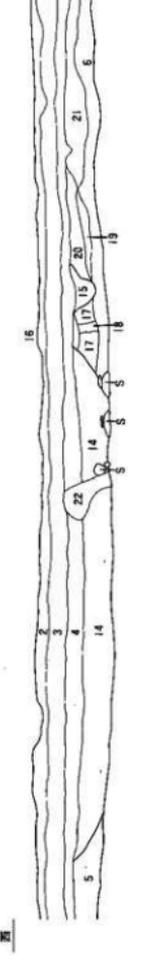
- ① 細かい黄褐色砂質土、土層間色シルト (層間で砂層を穿ける)
- ② ①同
- ③ ①同
- ④ ①同
- ⑤ ①同
- ⑥ ①同
- ⑦ ①同
- ⑧ ①同
- ⑨ ①同
- ⑩ ①同
- ⑪ ①同
- ⑫ ①同
- ⑬ ①同
- ⑭ ①同
- ⑮ ①同
- ⑯ ①同
- ⑰ ①同
- ⑱ ①同
- ⑲ ①同
- ⑳ ①同
- ㉑ ①同
- ㉒ ①同
- ㉓ ①同
- ㉔ ①同
- ㉕ ①同
- ㉖ ①同
- ㉗ ①同
- ㉘ ①同
- ㉙ ①同
- ㉚ ①同
- ㉛ ①同
- ㉜ ①同
- ㉝ ①同
- ㉞ ①同
- ㉟ ①同
- ㊱ ①同
- ㊲ ①同
- ㊳ ①同
- ㊴ ①同
- ㊵ ①同
- ㊶ ①同
- ㊷ ①同
- ㊸ ①同
- ㊹ ①同
- ㊺ ①同
- ㊻ ①同
- ㊼ ①同
- ㊽ ①同
- ㊾ ①同
- ㊿ ①同

5T 南側 L=24.50m



- ① 黄褐色砂質土
- ② ①同
- ③ ①同
- ④ ①同
- ⑤ ①同
- ⑥ ①同
- ⑦ ①同
- ⑧ ①同
- ⑨ ①同
- ⑩ ①同
- ⑪ ①同
- ⑫ ①同
- ⑬ ①同
- ⑭ ①同
- ⑮ ①同
- ⑯ ①同
- ⑰ ①同
- ⑱ ①同
- ⑲ ①同
- ⑳ ①同
- ㉑ ①同
- ㉒ ①同
- ㉓ ①同
- ㉔ ①同
- ㉕ ①同
- ㉖ ①同
- ㉗ ①同
- ㉘ ①同
- ㉙ ①同
- ㉚ ①同
- ㉛ ①同
- ㉜ ①同
- ㉝ ①同
- ㉞ ①同
- ㉟ ①同
- ㊱ ①同
- ㊲ ①同
- ㊳ ①同
- ㊴ ①同
- ㊵ ①同
- ㊶ ①同
- ㊷ ①同
- ㊸ ①同
- ㊹ ①同
- ㊺ ①同
- ㊻ ①同
- ㊼ ①同
- ㊽ ①同
- ㊾ ①同
- ㊿ ①同

6T 北側 L=24.50m



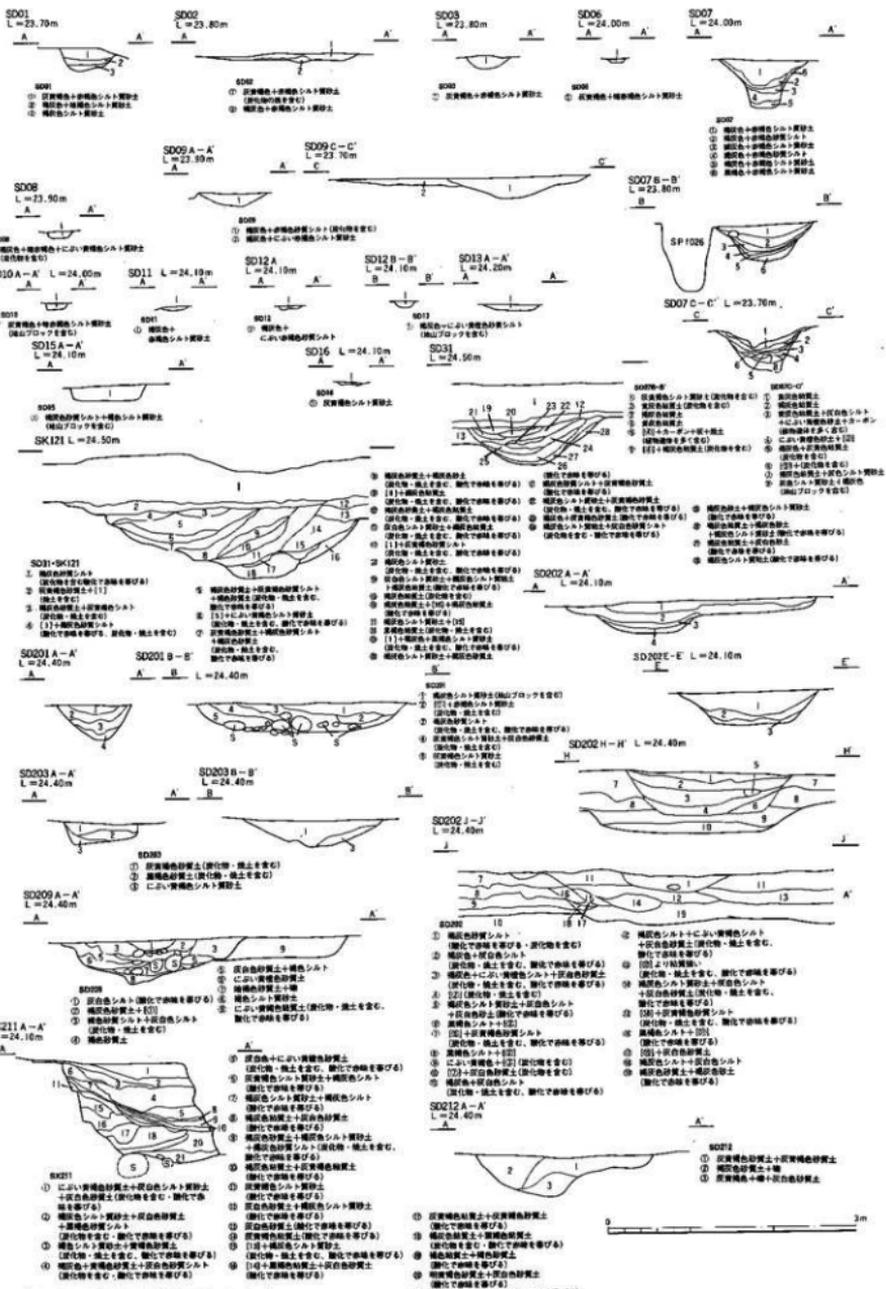
- ① 黄褐色砂質土
- ② ①同
- ③ ①同
- ④ ①同
- ⑤ ①同
- ⑥ ①同
- ⑦ ①同
- ⑧ ①同
- ⑨ ①同
- ⑩ ①同
- ⑪ ①同
- ⑫ ①同
- ⑬ ①同
- ⑭ ①同
- ⑮ ①同
- ⑯ ①同
- ⑰ ①同
- ⑱ ①同
- ⑲ ①同
- ⑳ ①同
- ㉑ ①同
- ㉒ ①同
- ㉓ ①同
- ㉔ ①同
- ㉕ ①同
- ㉖ ①同
- ㉗ ①同
- ㉘ ①同
- ㉙ ①同
- ㉚ ①同
- ㉛ ①同
- ㉜ ①同
- ㉝ ①同
- ㉞ ①同
- ㉟ ①同
- ㊱ ①同
- ㊲ ①同
- ㊳ ①同
- ㊴ ①同
- ㊵ ①同
- ㊶ ①同
- ㊷ ①同
- ㊸ ①同
- ㊹ ①同
- ㊺ ①同
- ㊻ ①同
- ㊼ ①同
- ㊽ ①同
- ㊾ ①同
- ㊿ ①同

7T 南側 L=24.50m

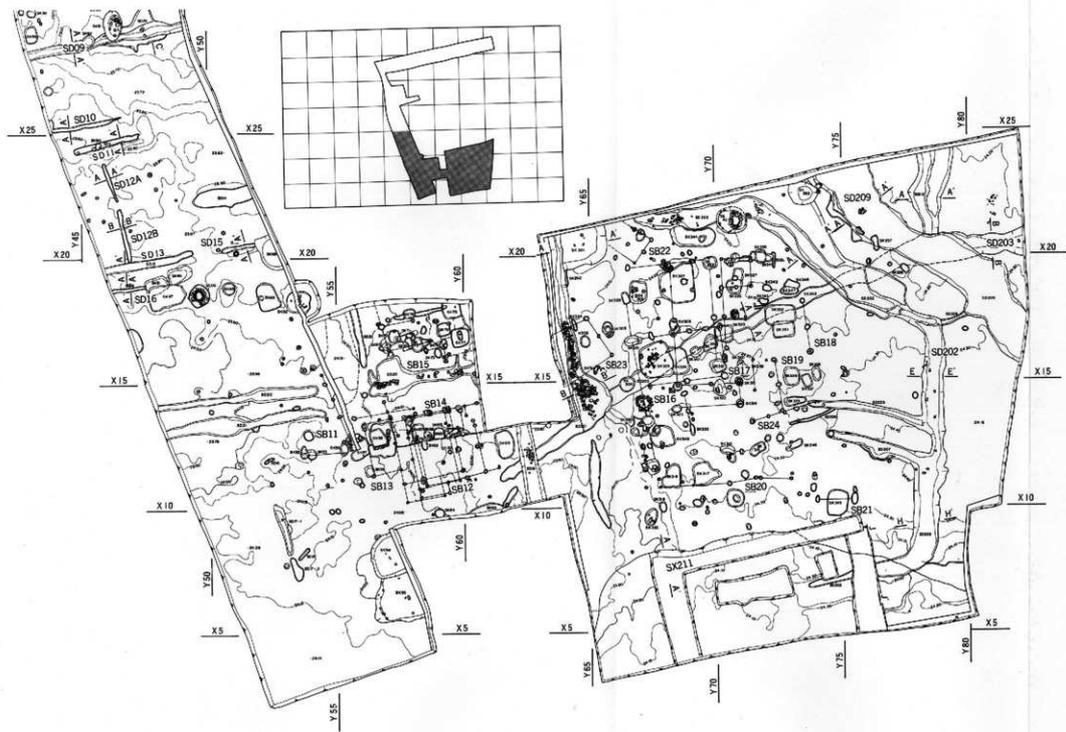


- ① 黄褐色砂質土
- ② ①同
- ③ ①同
- ④ ①同
- ⑤ ①同
- ⑥ ①同
- ⑦ ①同
- ⑧ ①同
- ⑨ ①同
- ⑩ ①同
- ⑪ ①同
- ⑫ ①同
- ⑬ ①同
- ⑭ ①同
- ⑮ ①同
- ⑯ ①同
- ⑰ ①同
- ⑱ ①同
- ⑲ ①同
- ⑳ ①同
- ㉑ ①同
- ㉒ ①同
- ㉓ ①同
- ㉔ ①同
- ㉕ ①同
- ㉖ ①同
- ㉗ ①同
- ㉘ ①同
- ㉙ ①同
- ㉚ ①同
- ㉛ ①同
- ㉜ ①同
- ㉝ ①同
- ㉞ ①同
- ㉟ ①同
- ㊱ ①同
- ㊲ ①同
- ㊳ ①同
- ㊴ ①同
- ㊵ ①同
- ㊶ ①同
- ㊷ ①同
- ㊸ ①同
- ㊹ ①同
- ㊺ ①同
- ㊻ ①同
- ㊼ ①同
- ㊽ ①同
- ㊾ ①同
- ㊿ ①同

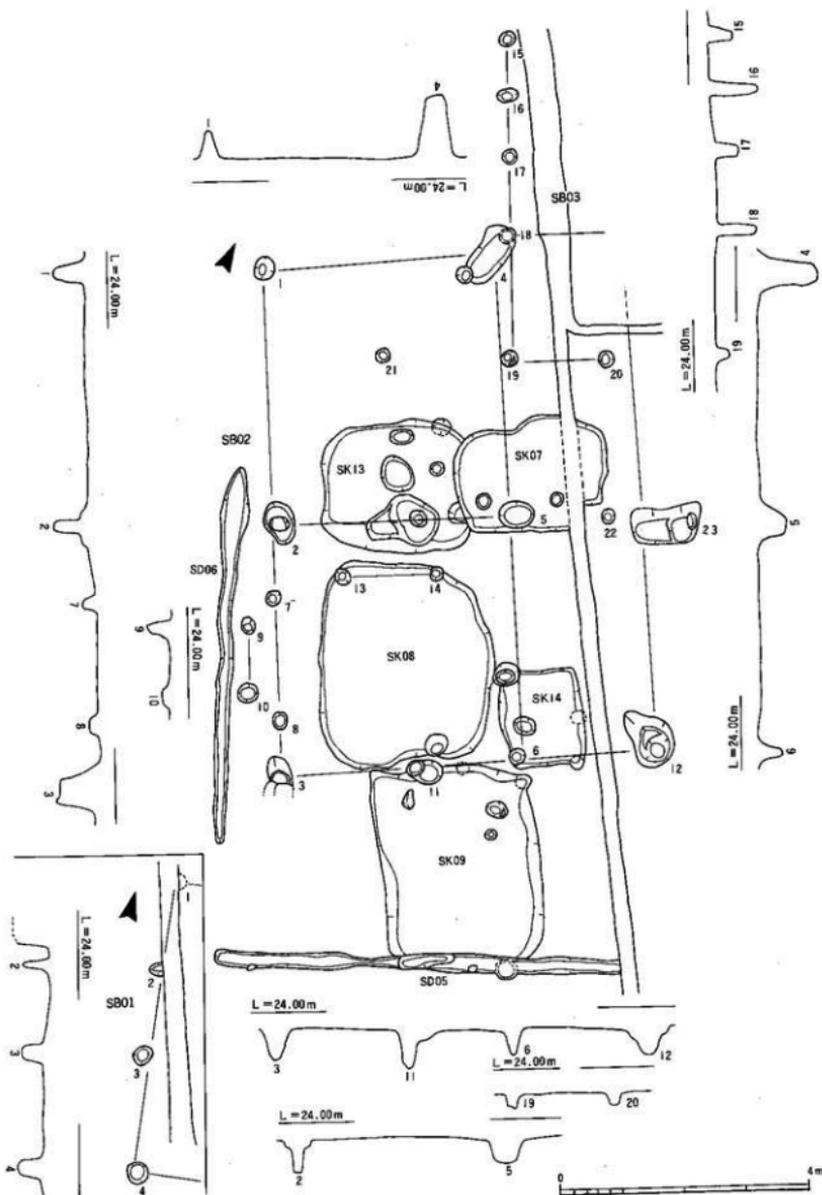
第22図 試掘トレンチ断面図 (7)



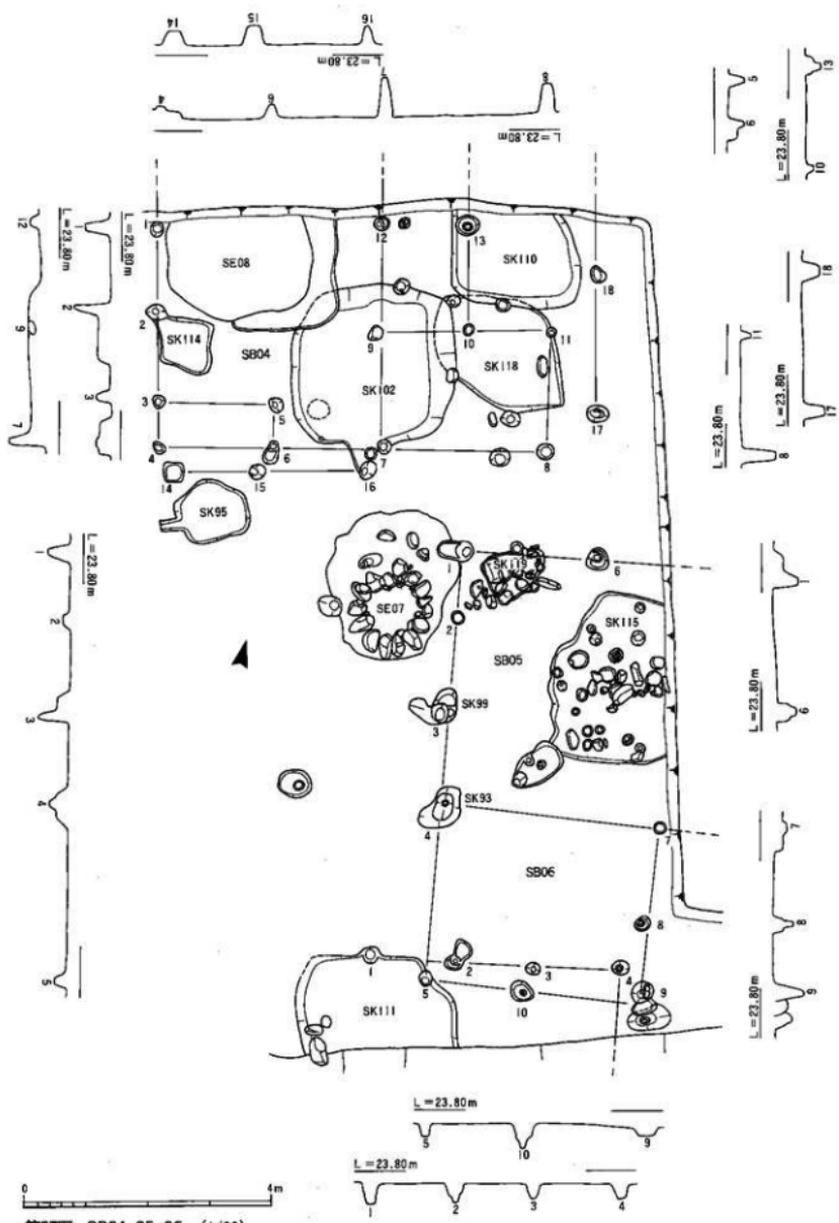
第23図 上層検出断面図 (1/60)



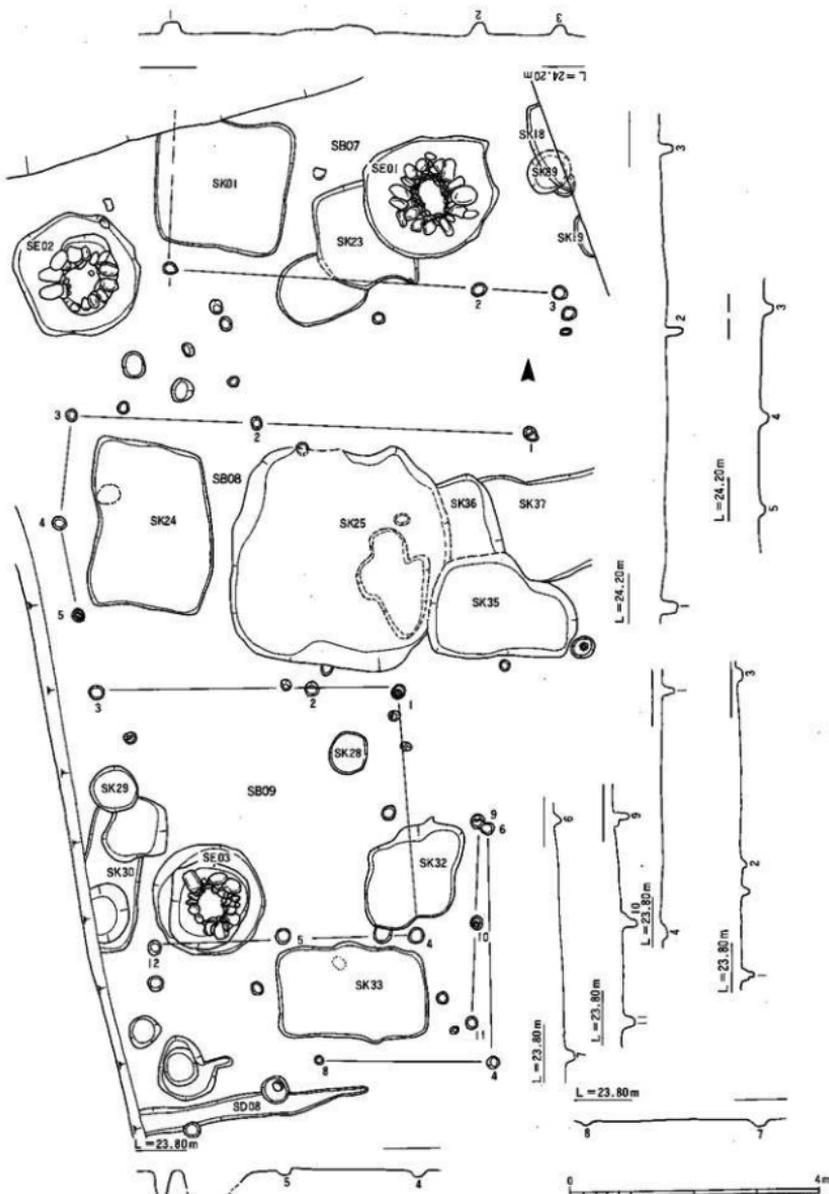
第24圖 上層遺構圖(1) (1/300)



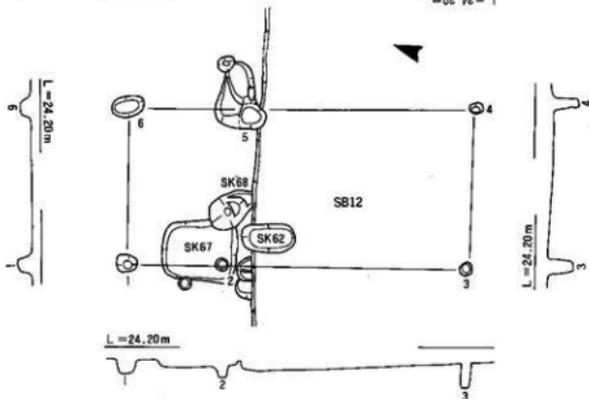
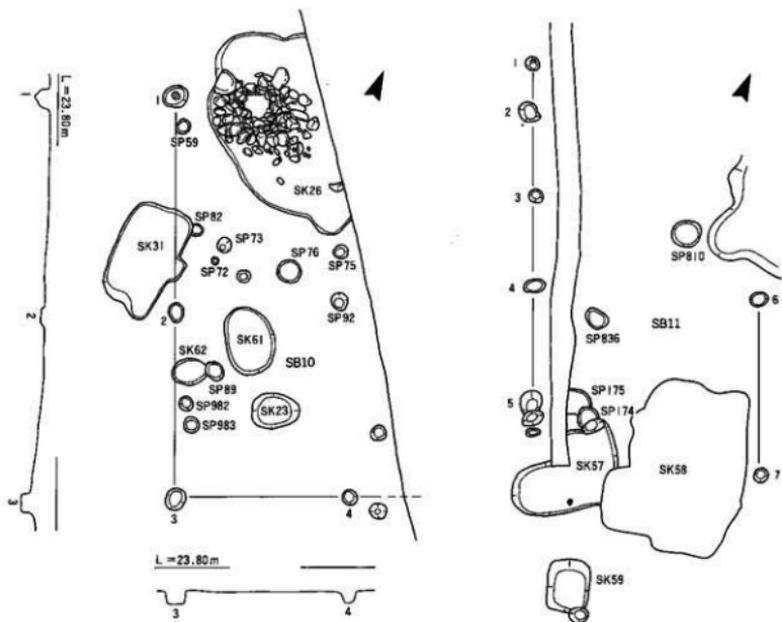
第26图 SB01-02-03 (1/80)



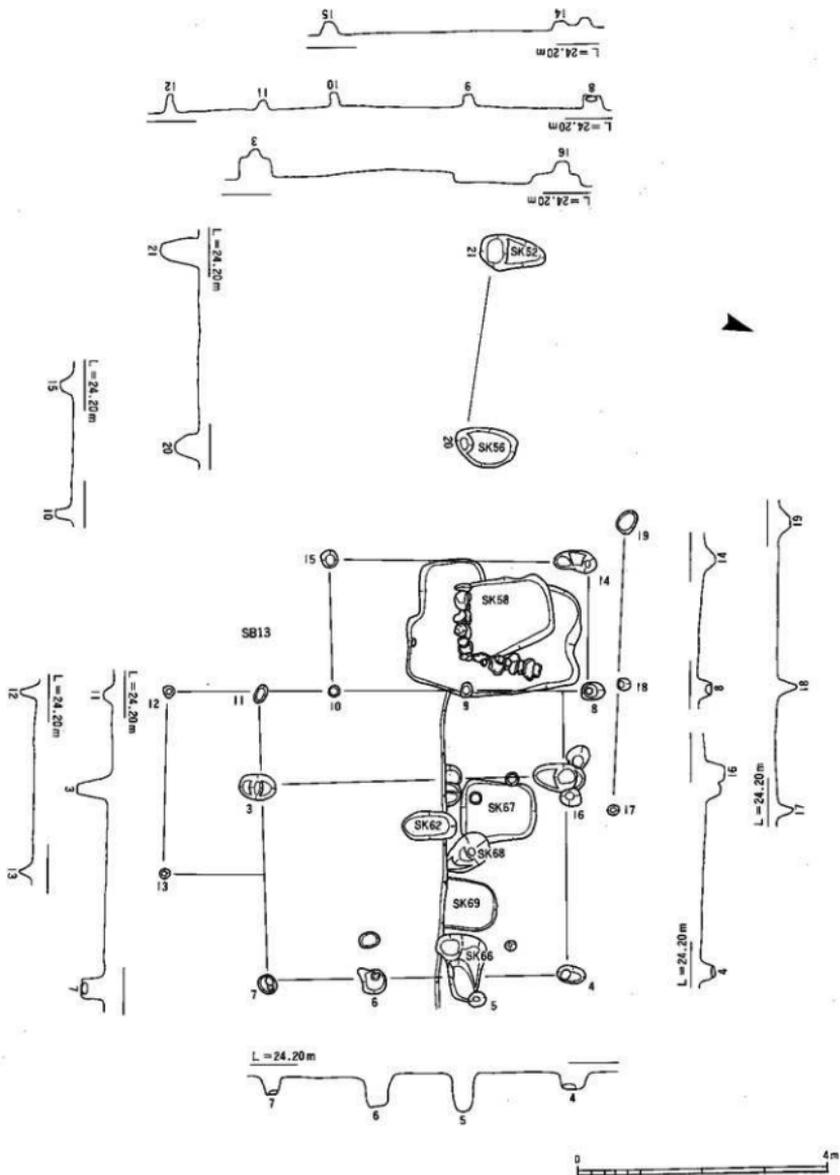
第27图 SB04·05·06 (1/80)



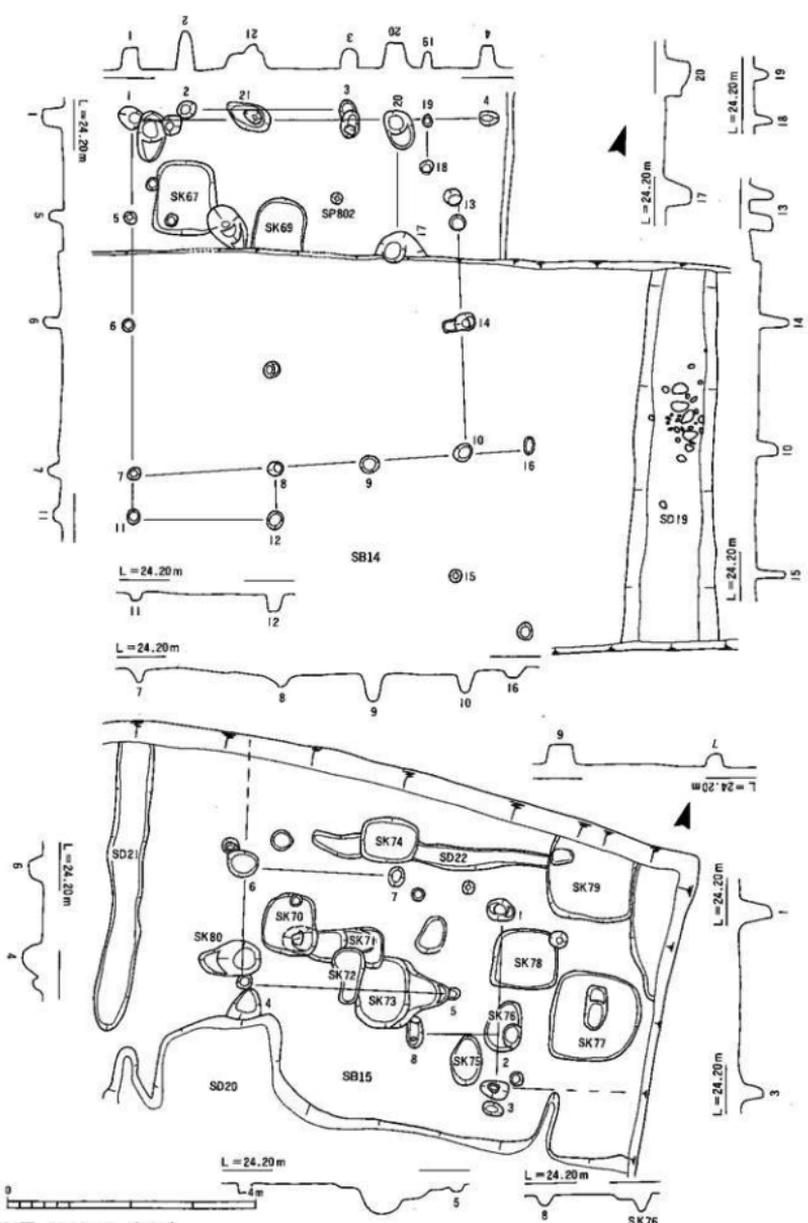
第28图 SB07·08·09 (1/80)



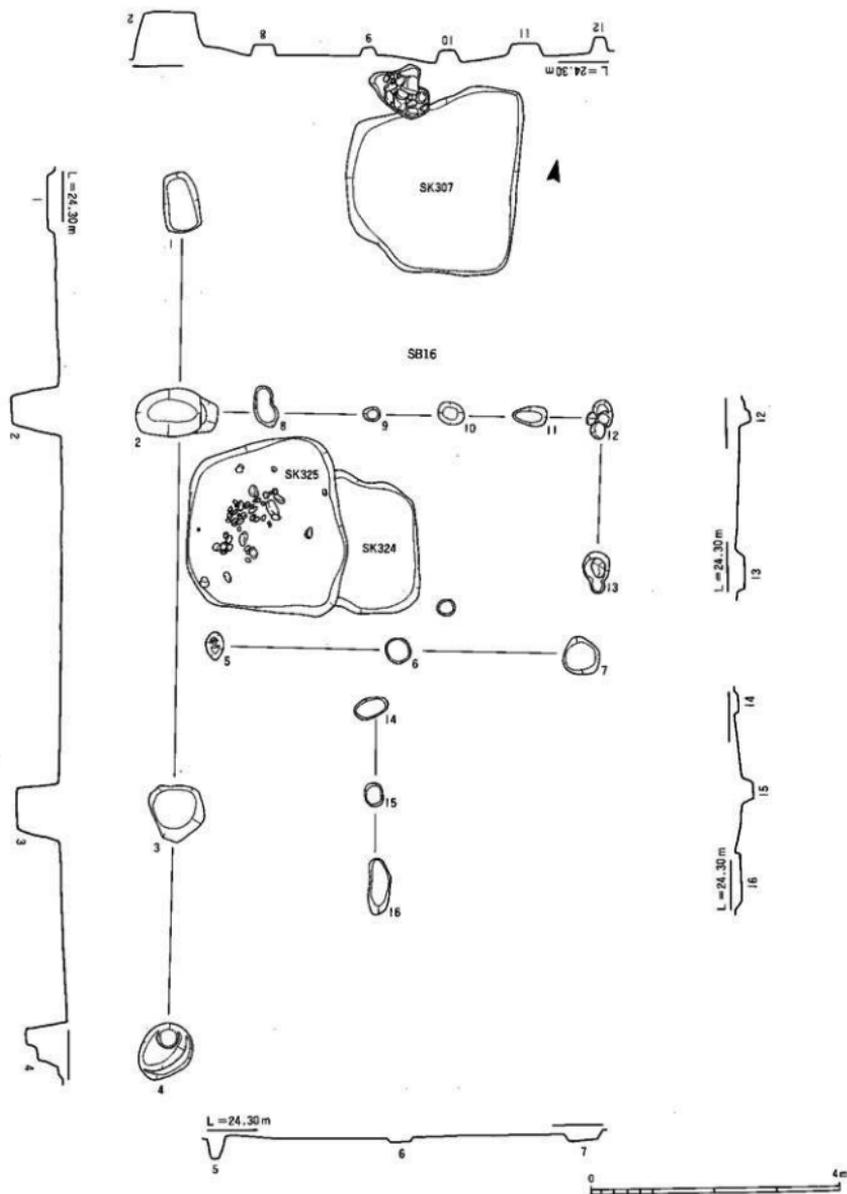
第29図 SB10-11-12 (1/80)



第30図 SB13 (1/80)



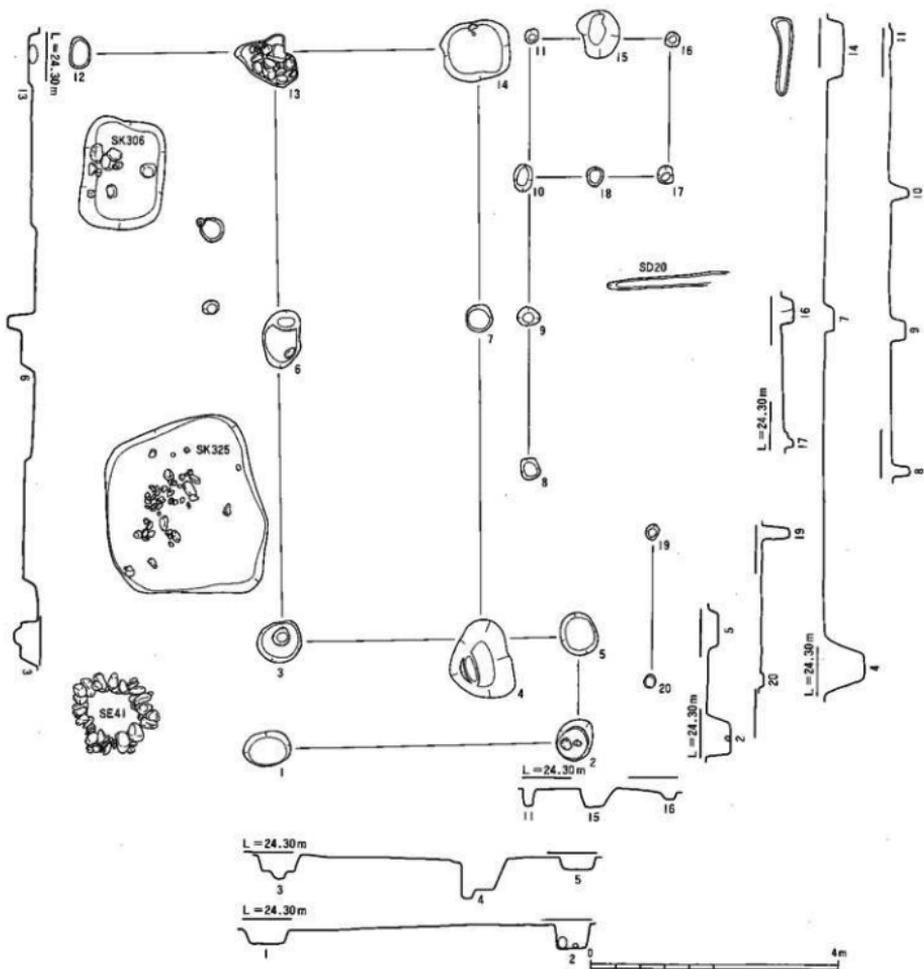
第31圖 SB14・15 (1/80)



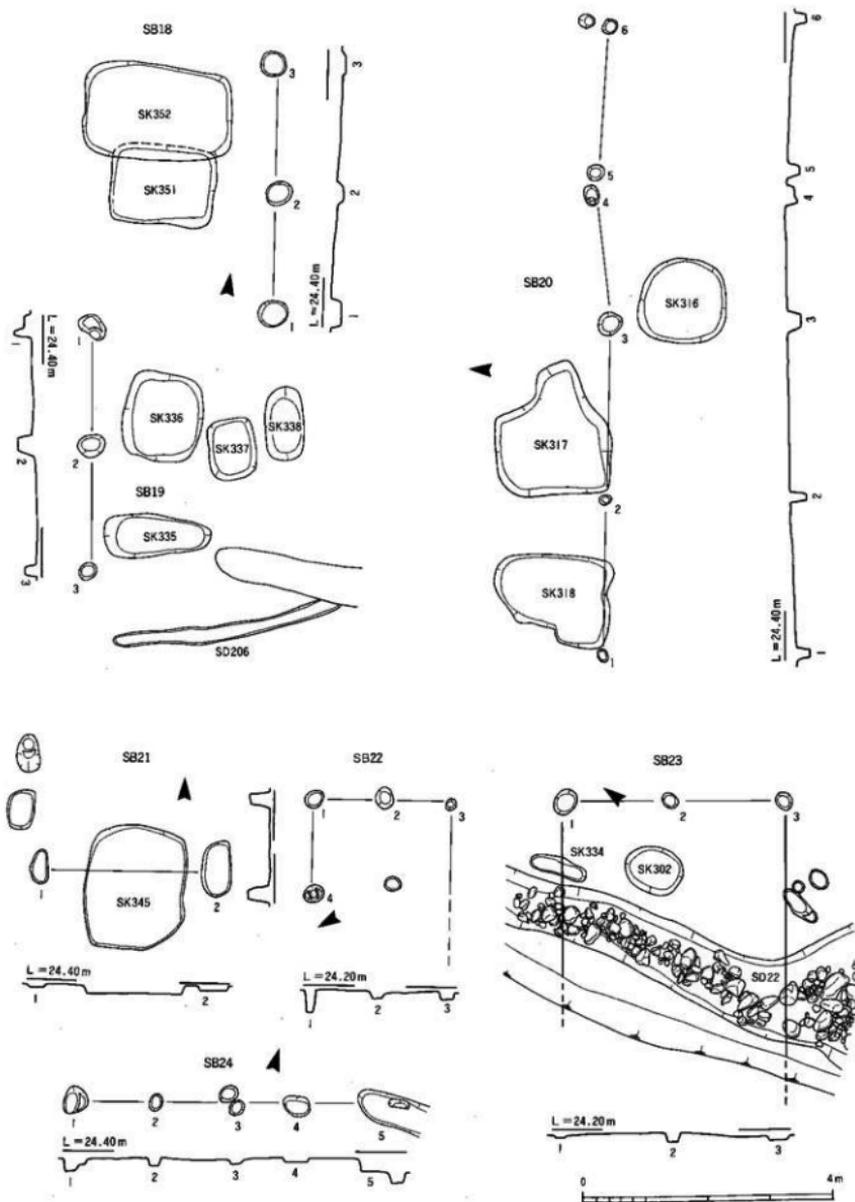
第32图 SB16 (1/80)



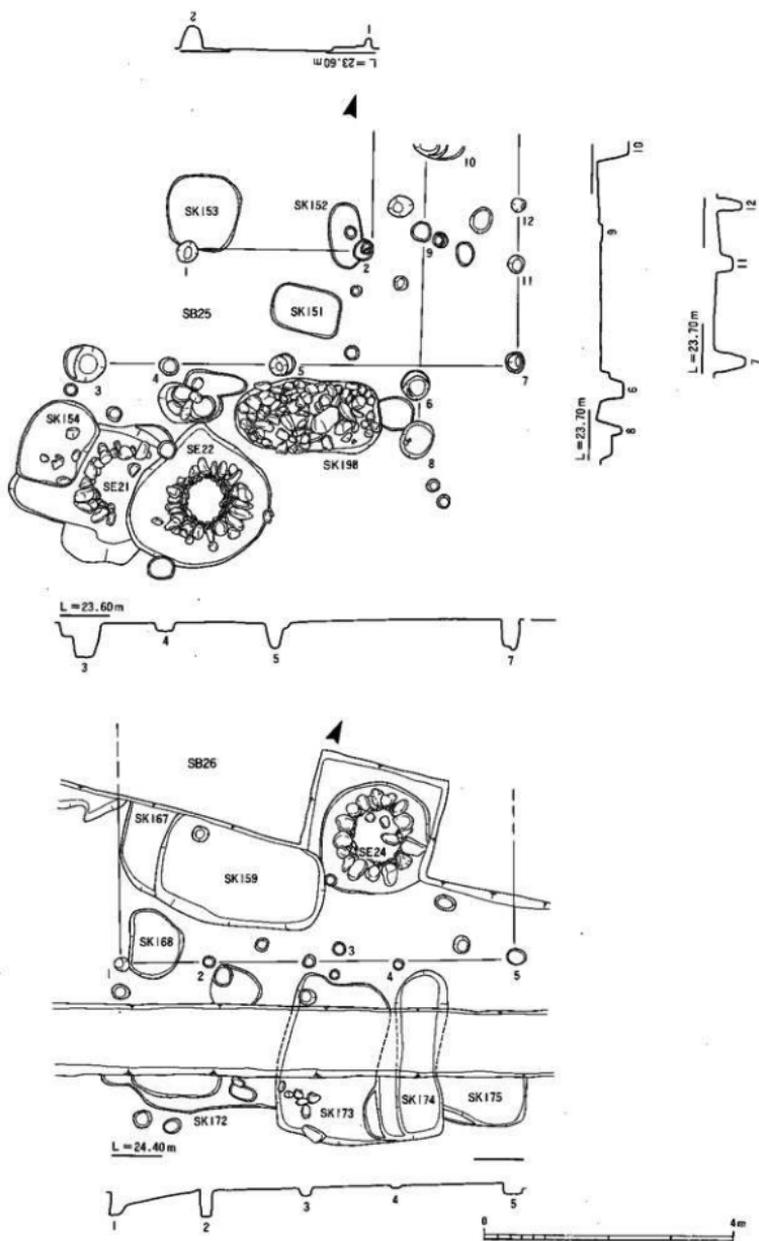
SB17

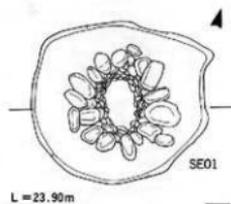


第33圖 SB17 (1/80)



第34图 SB18·19·20·21·22·23·24 (1/80)





SE01

L = 23.90m

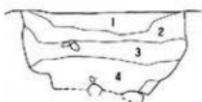


- SE01
① 灰黄褐色+暗赤褐色+砂質シルト

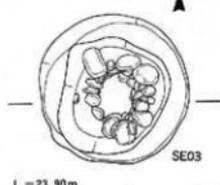


SE02

L = 23.90m

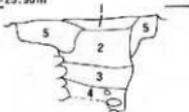


- SE02
① 灰黄褐色+褐色シルト質砂土
② 灰黄褐色+褐色砂質シルト(陸山ブロックを含む)
③ 灰黄褐色土+砂質シルト(陸山ブロックを含む)
④ 褐灰色土+砂質シルト
⑤ 褐灰色土+シルト

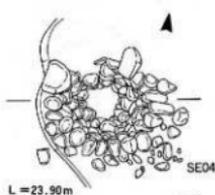


SE03

L = 23.90m

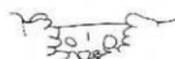


- SE03
① 褐色+灰黄褐色砂質シルト
② 褐色+褐灰色砂質シルト
③ 褐灰色+褐色シルト
④ 褐灰色シルト
⑤ 褐灰色土+濃い黄褐色砂質シルト

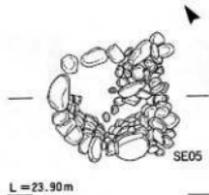


SE04

L = 23.90m



- SE04
① 褐灰色+暗赤褐色砂質シルト
(陸山ブロックを含む)

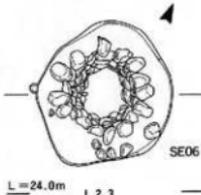


SE05

L = 23.90m

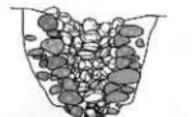


- SE05
① 褐灰色砂質シルト
② 灰褐色シルト質砂土
③ 褐灰色シルト質砂土+褐灰色砂質土
+褐色砂質シルト
④ 褐灰色シルト質粘土(膠化層を含む)
⑤ 褐灰色シルト質粘土+灰黄褐色シルト質砂土



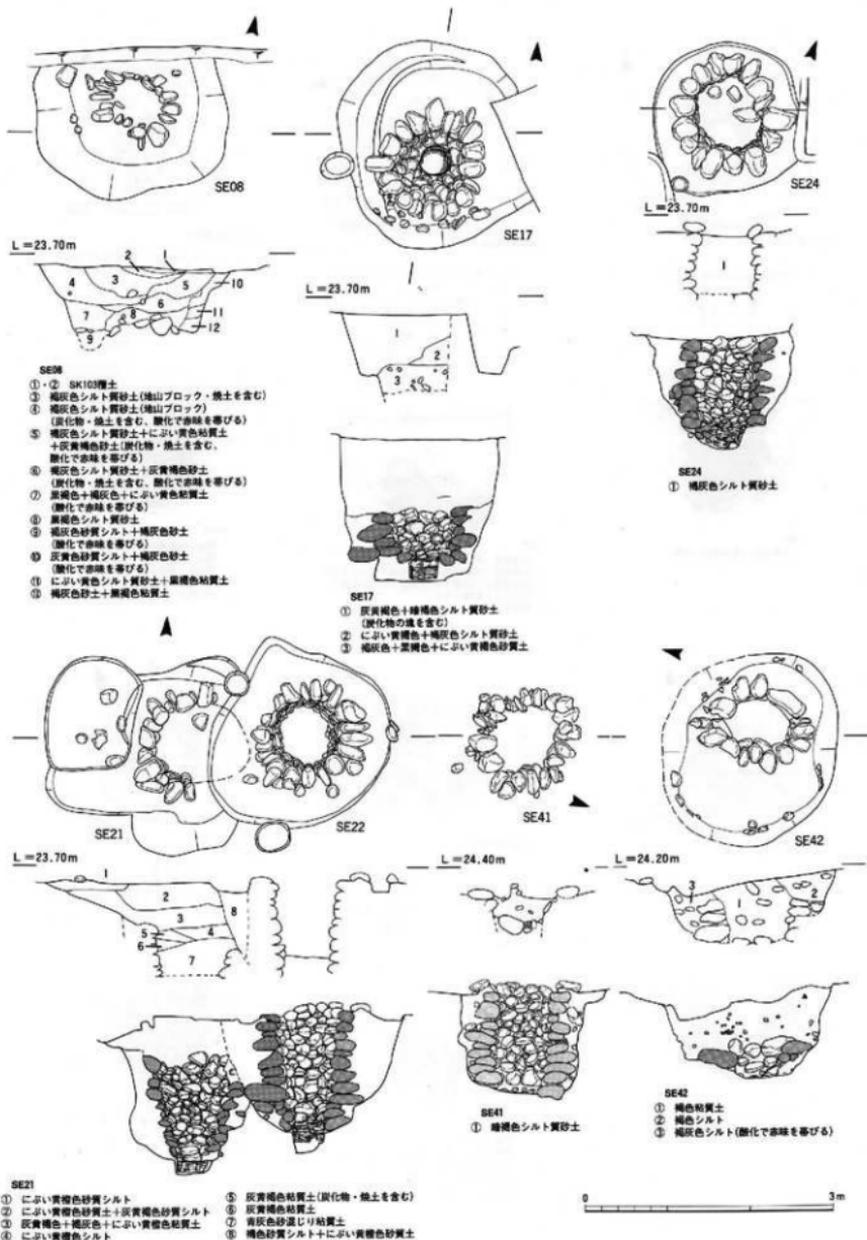
SE06

L = 24.0m

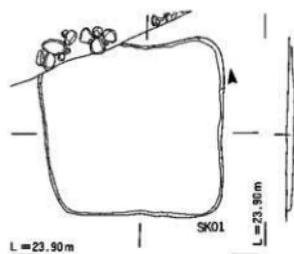


- SE06
① 濃い黄褐色+灰黄褐色砂質シルト
② 灰黄褐色砂質シルト
③ 褐灰色+濃い黄褐色砂質シルト

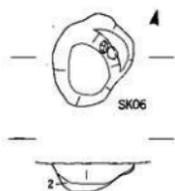
0 3m



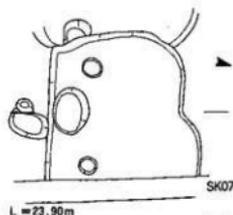
第37図 上層検出井戸 (2) (1/60)



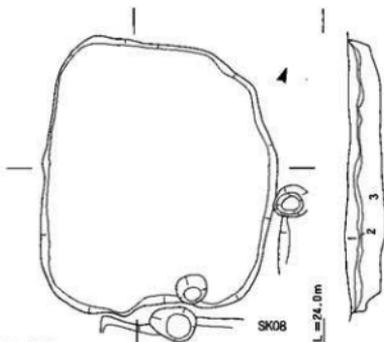
SK01
① 灰黄褐色+赤褐色シルト質砂土
② 黄褐色+黒褐色粘土
(壁に跡より粘結あり)



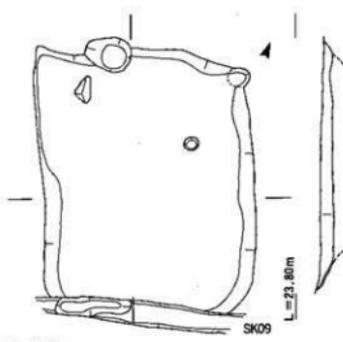
SK06
① 褐色+赤褐色シルト質砂土
② にぶい黄砂+黒褐色シルト質砂土



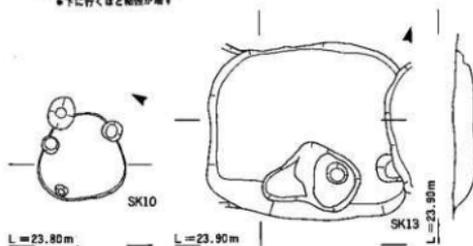
SK07
① 灰黄褐色+赤褐色シルト質砂土
② にぶい黄褐色+赤褐色シルト質砂土



SK08
① 灰黄褐色+赤褐色シルト質砂土
② 灰黄褐色+褐色シルト質砂土
(マンガンブロックを含む)
③ 灰黄褐色+赤褐色シルト質砂土
*下に行くほど粘結が増す

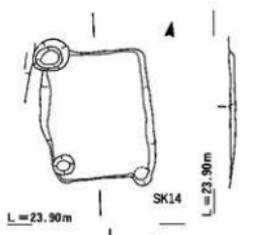


SK09
① 灰黄褐色+赤褐色シルト質砂土
(灰化物を含む)
② 灰黄褐色+褐色赤褐色シルト質砂土
(マンガン塊・灰化物)
③ 黄褐色シルト質砂土
④ 黄褐色+黒褐色シルト質砂土



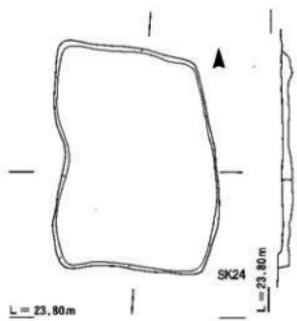
SK10
① にぶい黄褐色+赤褐色シルト質砂土
(灰化物の塊を含む)

SK13
① 褐色+赤褐色+黒褐色シルト質砂土
(灰化物を含む)



SK14
① 褐色+赤褐色+黒褐色シルト質砂土
(灰化物を含む)

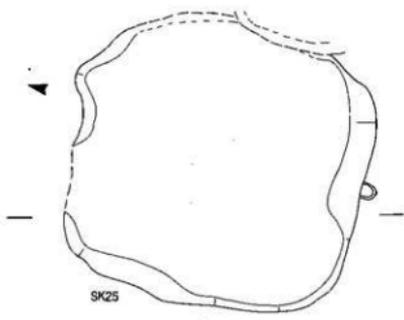
第38図 土坑 (1) (1/60)



L = 23.80m

SK24

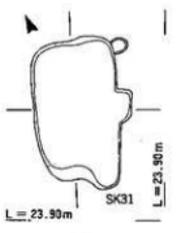
- SK24
 ① 灰黄褐色+赤褐色砂質シルト
 ② 灰黄褐色+赤褐色シルト(埴山)



L = 23.90m

SK25

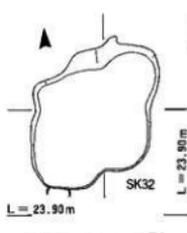
- SK25
 ① 褐灰色+褐色砂質シルト
 ② 褐灰色+ふいふ褐色砂質シルト
 ③ 褐灰色砂質シルト
 ④ 褐灰色+灰黄褐色シルト(粘性あり)



L = 23.90m

SK31

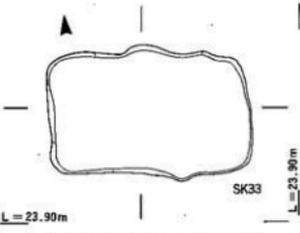
- SK31
 ① 灰黄褐色+ふいふ赤褐色砂質シルト(埴山ブロックを含む)



L = 23.90m

SK32

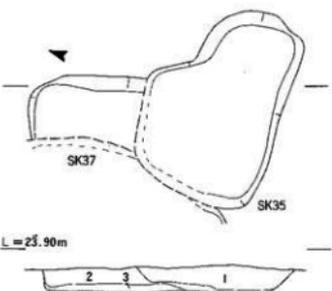
- SK32
 ① にふいふ赤褐色+灰黄褐色砂質シルト
 ② 灰黄褐色+ふいふ赤褐色砂質シルト(ともに埴山ブロックを含む)



L = 23.90m

SK33

- SK33
 ① 灰黄褐色+褐赤褐色シルト質砂土
 ② 灰黄褐色+ふいふ赤褐色砂質シルト(埴山ブロックを含む)

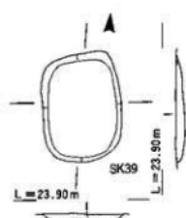


L = 23.90m

SK37

SK35

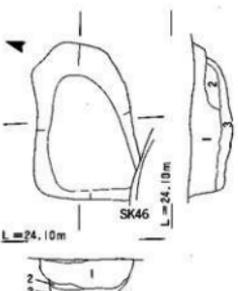
- SK35
 ① 褐灰色+ふいふ赤褐色砂質シルト
 ② 灰黄褐色+褐赤褐色シルト質砂土(炭化物・磁土を含む)(埴山ブロックを含む)
 ③ 灰黄褐色+赤褐色砂質シルト



L = 23.90m

SK39

- SK39
 ① 灰黄褐色+ふいふ赤褐色シルト質砂土(埴山ブロックを含む)



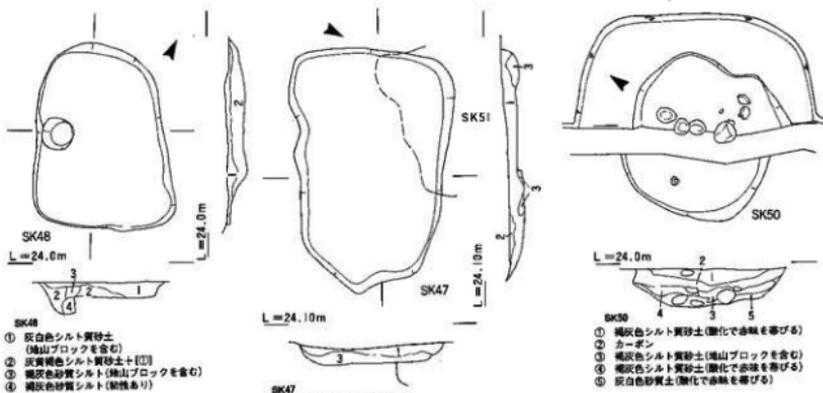
L = 24.10m

SK46

- SK46
 ① 褐灰色+白灰色シルト質砂土
 ② 褐灰色砂質土(マンガン沈着)
 ③ 褐灰色砂質シルト

第39図 土坑(2) (1/60)





SK48

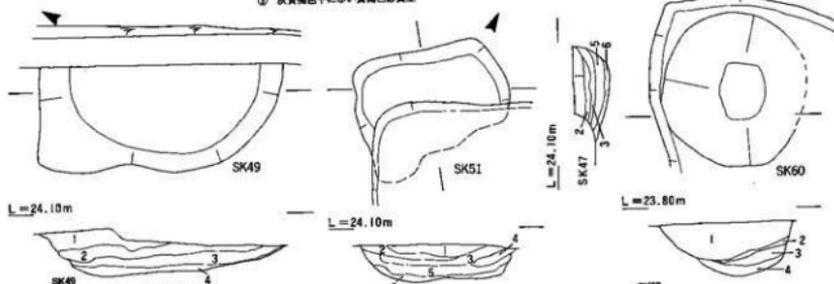
- ① 灰白色シルト質砂土 (埴山ブロックを含む)
- ② 灰質褐色シルト質砂土+III
- ③ 褐色赤砂質シルト(埴山ブロックを含む)
- ④ 褐色赤砂質シルト(埴山あり)

SK47

- ① 褐色赤十にぶい黄褐色砂質土
- ② 灰質褐色砂質シルト+にぶい黄褐色赤砂質シルト
- ③ 灰質褐色十にぶい黄褐色砂質土

SK50

- ① 褐色シルト質砂土(酸化で赤味を帯びる)
- ② カーボン
- ③ 褐色シルト質砂土(埴山ブロックを含む)
- ④ 褐色シルト質砂土(酸化で赤味を帯びる)
- ⑤ 灰白色砂質土(酸化で赤味を帯びる)



SK49

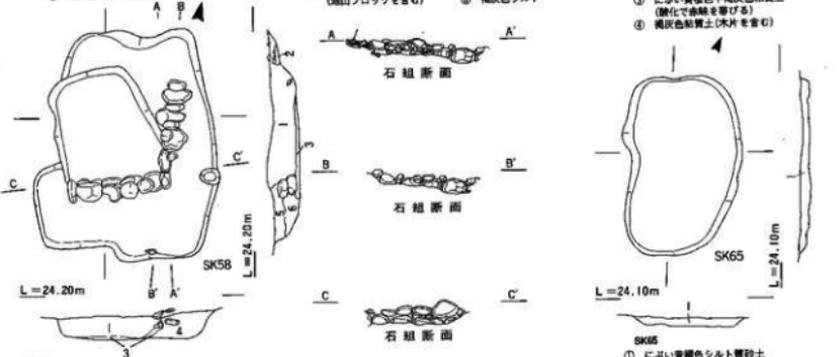
- ① 灰質褐色砂質シルト+褐色赤砂質土 (埴山ブロックを含む)
- ② 灰質褐色砂質シルト
- ③ 灰質赤シルト(埴山ブロックを含む)
- ④ 褐色赤シルト質砂土

SK51

- ① 褐色赤十黄褐色赤砂質シルト (埴山ブロックを含む)
- ② 褐色赤砂質シルト (埴山ブロックを含む)
- ③ 灰白色十にぶい黄褐色砂質土
- ④ にぶい黄褐色十灰白色砂質土
- ⑤ 褐色赤シルト
- ⑥ 褐色赤シルト

SK60

- ① 灰質褐色砂質シルト+褐色シルト質砂土 (灰化物の塊を含む)
- ② 褐色シルト質砂土 (酸化で赤味を帯びる)
- ③ にぶい黄褐色十褐色赤粘質土 (酸化で赤味を帯びる)
- ④ 褐色赤粘質土(木片を含む)



SK58

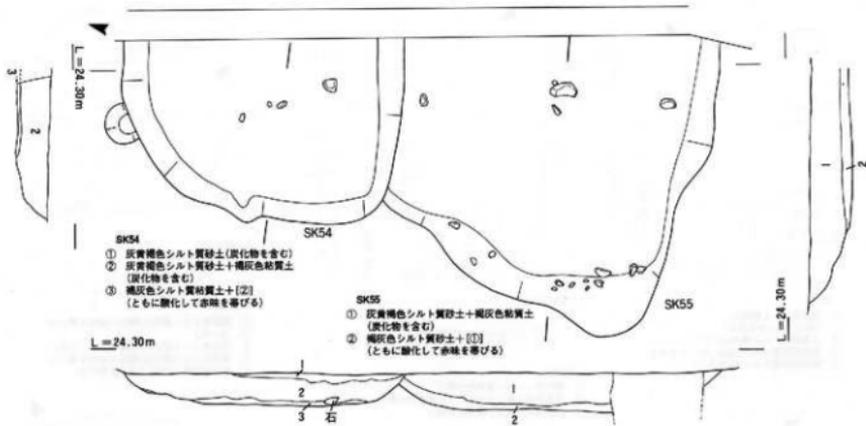
- ① にぶい黄褐色砂質土
- ② にぶい黄褐色砂質土
- ③ 褐色赤砂質シルト(粘土)
- ④ にぶい黄褐色砂質土
- ⑤ 灰質褐色シルト質砂土+褐色赤粘質シルト質砂土 (灰化物・粘土を含む) (酸化で赤味を帯びる)
- ⑥ 褐色赤十褐色赤粘質シルト質砂土 (酸化で赤味を帯びる)

SK65

- ① にぶい黄褐色シルト質砂土 +褐色赤砂質シルト

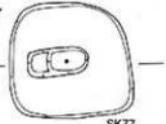
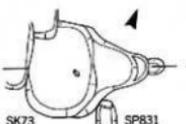
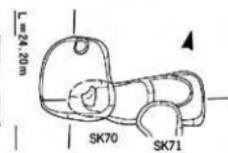
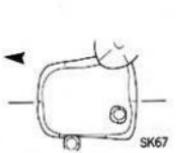


第40図 土坑(3) (1/60)



- SK54
- ① 灰青褐色シルト質砂土(炭化物を含む)
 - ② 灰青褐色シルト質砂土+褐色粘質土(炭化物を含む)
 - ③ 褐色シルト質粘質土+〔2〕(ともに酸化して赤味を帯びる)

- SK55
- ① 灰青褐色シルト質砂土+褐色粘質土(炭化物を含む)
 - ② 褐色シルト質砂土+〔2〕(ともに酸化して赤味を帯びる)



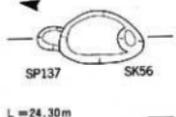
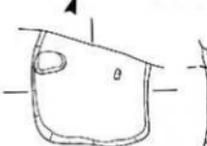
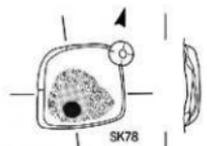
- SK67
- ① 灰青褐色シルト質砂土+褐色シルト質砂土(炭化物・焼土を含む)(酸化で赤味を帯びる)

- SK70
- ① 褐色粘質土(炭化物・焼土を含む。酸化で赤味を帯びる)

- SK73
- ① 灰褐色シルト質粘質土+褐色シルト質粘質土

- SK77
- ① 灰青褐色シルト質粘質土+灰褐色シルト質砂土(炭化物・焼土を含む)(酸化で赤味を帯びる)
 - ② 灰青褐色+灰褐色シルト質砂土
 - ③ 褐色シルト

- SK71
- ① 黒褐色砂質シルト+灰青褐色砂質土+ふい青褐色シルト質砂土+灰褐色シルト質砂土(炭化物・焼土を含む。酸化で赤味を帯びる)
 - ② 黒褐色粘質土+砂質土+ふい青褐色シルト質砂土+灰白色シルト質砂土



- SK78
- ① 褐色砂質シルト(炭化物・焼土を含む)
 - ② 褐色砂質シルト(炭化物・焼土を含む)
 - ③ 褐色砂質シルト+ふい青褐色砂質シルト(炭化物を含む)
 - ④ 黒色炭化物
 - ⑤ 灰青褐色砂質シルト(炭化物を含む)
 - ⑥ 灰白色砂質シルト

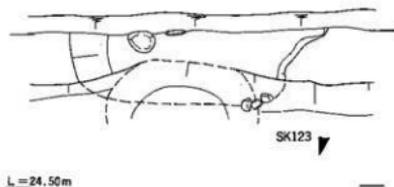
- SK79
- ① 褐色土+ふい青褐色砂質土(炭化物・焼土を含む)(酸化で赤味を帯びる)
 - ② 褐色土+黒褐色シルト質砂土(炭化物を含む。酸化で赤味を帯びる)
 - ③ カーボン
 - ④ 褐色シルト質砂土(酸化で赤味を帯びる)

- SK98
- ① 褐色シルト質砂土+灰青褐色粘質土(炭化物・焼土を含む)
 - ② 褐色シルト質砂土(炭化物を含む)
 - ③ 褐色シルト質砂土(炭化物・焼土を含む)

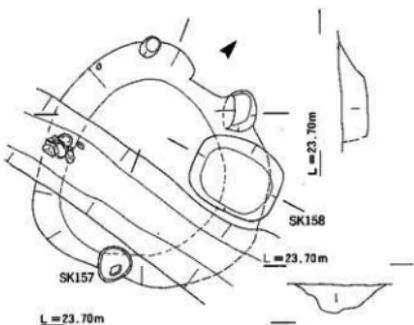
- SK56・SP137
- ① 褐色シルト質砂土(地山の小ブロックを含む)
 - ② 灰青褐色砂質シルト
 - ③ 褐色シルト質砂土(地山の小ブロックを含む)(SP137)



第14図 土坑(4) (1/60)



L=24.50m



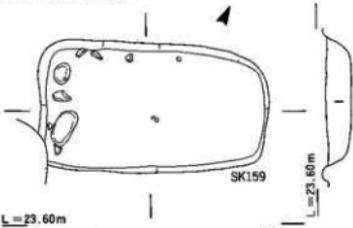
L=23.70m

L=23.70m

L=23.70m

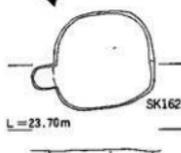
- SK123
- ① 灰黄褐色砂質シルト (灰化物・焼土を含む、酸化で赤味を帯びる)
 - ② 灰黄褐色砂質シルト (灰化物・焼土を含む、酸化で赤味を帯びる)
 - ③ 灰黄褐色砂質シルト+黄褐色シルト質砂土 (灰化物を含む)
 - ④ 灰黄褐色砂質シルト+灰白色砂質土 (灰化物を含む)
 - ⑤ 灰黄褐色砂質土+灰白色砂質土 (灰化物を含む)
 - ⑥ 褐色砂質土 (灰化物を含む、酸化で赤味を帯びる)
 - ⑦ 灰白色砂質土 (灰化物を含む、酸化で赤味を帯びる)
 - ⑧ 褐色シルト質砂土 (酸化で赤味を帯びる)
 - ⑨ 灰黄褐色砂質シルト+灰白色シルト+③④ (灰化物を含む)
 - ⑩ ⑦②+③④シルト質砂土
 - ⑪ 褐色砂質土+黄褐色砂土 (灰化物を含む、酸化で赤味を帯びる)
 - ⑫ 灰黄褐色砂質シルト (灰化物を含む、酸化で赤味を帯びる)
 - ⑬ 灰黄褐色砂質土
 - ⑭ 灰黄褐色砂質土
 - ⑮ 灰黄褐色シルト質砂土

- SK158
- ① 褐色+黄褐色シルト質砂土 (灰化物の塊を含む)
- SK157
- ① 褐色+黄褐色シルト質砂土 (灰化物の塊を含む)



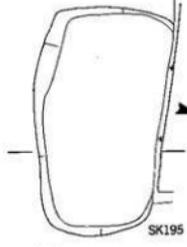
L=23.60m

- SK159
- ① 灰黄褐色+灰白色シルト質砂土



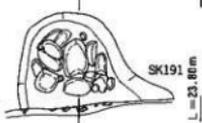
L=23.70m

- SK162
- ① 褐色シルト質砂土+灰白色砂質シルト+黄色シルト質砂土



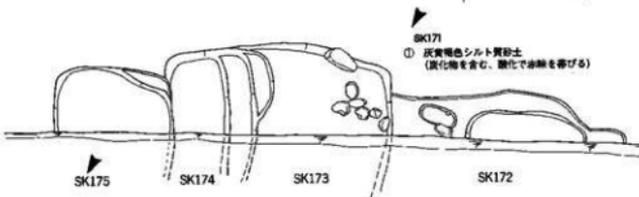
L=23.70m

- SK195
- ① 灰黄褐色+灰白色+黄褐色+赤褐色シルト質砂土



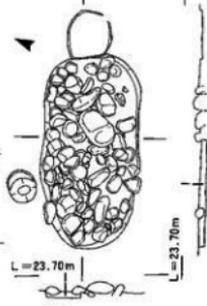
L=23.60m

- SK191
- ① 灰黄褐色シルト質砂土 (灰化物を含む、酸化で赤味を帯びる)



L=23.70m

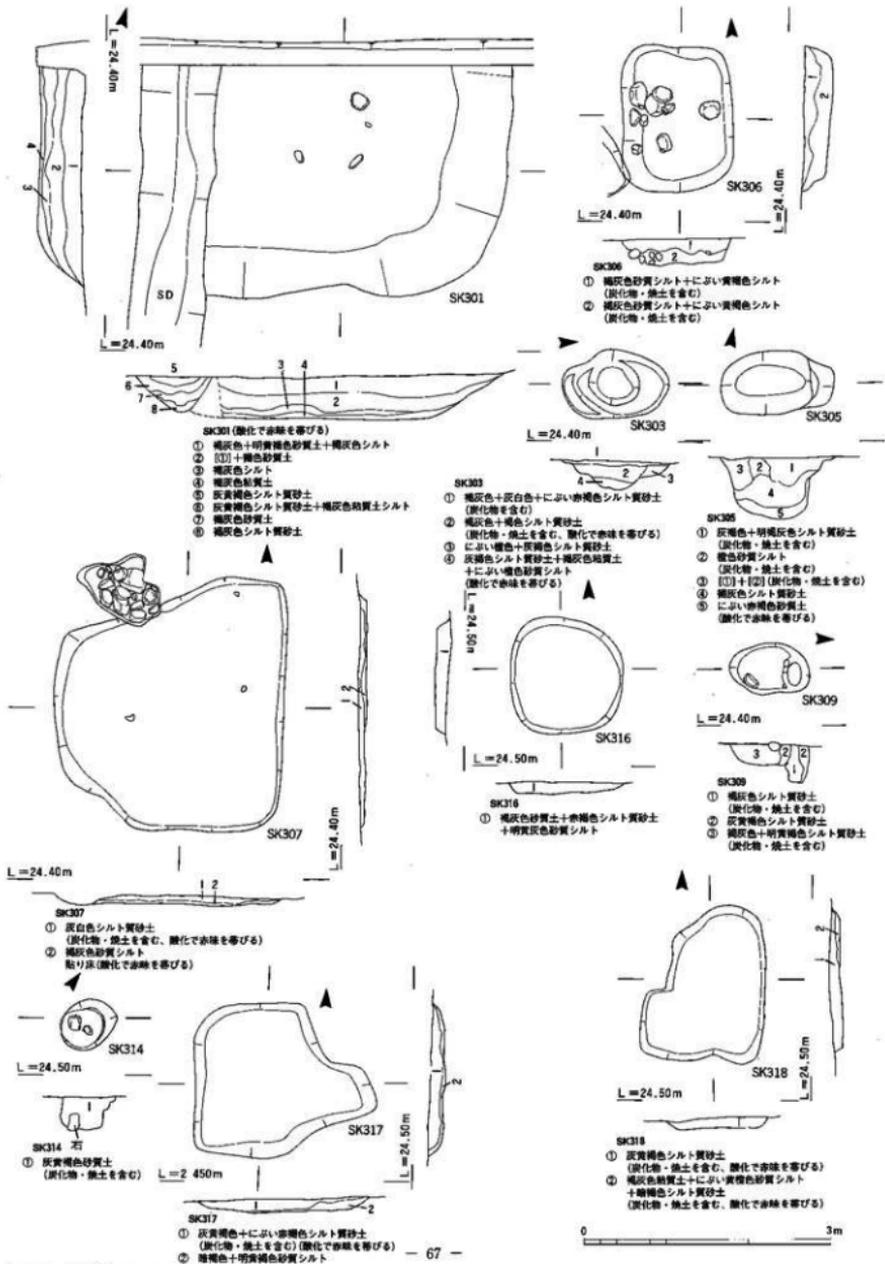
- SK175~172 (灰化物を含む)
- ① 褐色+白灰褐色砂質シルト (焼土を含む、酸化で赤味を帯びる)
 - ② 灰白色砂質シルト質砂土+褐色砂質シルト
 - ③ 褐色砂質土 (焼土を含む)
 - ④ 褐色+黄色シルト質砂土 (焼土を含む、酸化で赤味を帯びる)
 - ⑤ 褐色+褐色シルト質砂土 (焼土を含む、酸化で赤味を帯びる)
 - ⑥ 褐色シルト質砂土



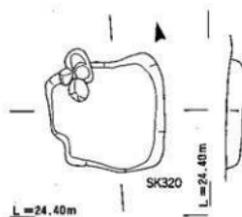
L=23.70m

- SK198
- ① 褐色+褐色シルト質砂土

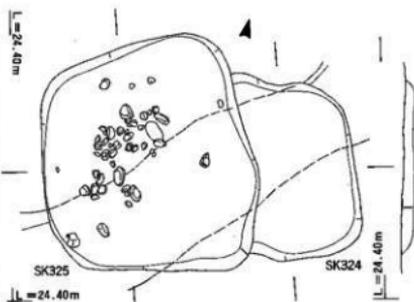




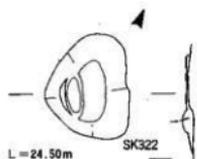
第44図 土坑 (7) (1/60)



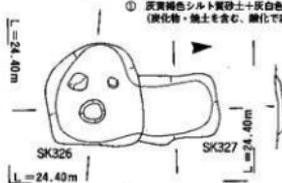
SK320
① 灰黄褐色シルト質砂土
(炭化物・焼土を含む)



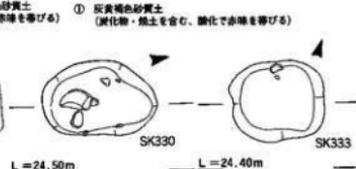
SK325 ① 灰黄褐色シルト質砂土+灰白色砂質土
(炭化物・焼土を含む、炭化で赤味を帯びる)
SK324 ① 灰黄褐色砂質土
(炭化物・焼土を含む、炭化で赤味を帯びる)



SK322
① 褐色シルト質砂土
+黒褐色シルト質砂質土
(炭化物・焼土を含む)
② 褐色粘質土
(炭化物を含む)
③ 褐色シルト質砂土+褐色粘質土
(炭化物を含む)



SK326 ① 褐色シルト質砂土
(炭化物・焼土を含む)
SK327 ① 暗黄褐色+褐灰色砂質シルト
(炭化物・焼土を含む)



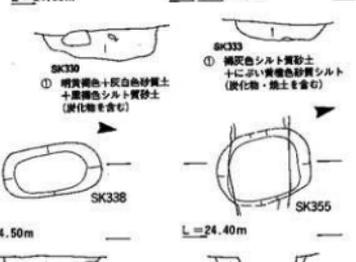
SK330 ① 暗黄褐色+灰白色砂質土
+黒褐色シルト質砂土
(炭化物を含む)
SK333 ① 褐色シルト質砂土
+濃い黄褐色砂質シルト
(炭化物・焼土を含む)



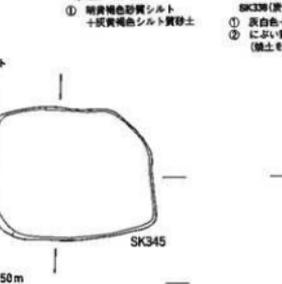
SK336(炭化物を含む)
① 褐色+灰黄褐色シルト質砂土+暗褐色砂質シルト
② 灰黄褐色+褐色+暗褐色砂質シルト



SK338 ① 褐色粘質土
(炭化物・焼土を含む)
SK337 ① 暗黄褐色砂質シルト
+灰黄褐色シルト質砂土



SK339(炭化物を含む)
① 灰白色+濃い黄褐色砂質シルト
+濃い黄褐色シルト質砂土+褐色シルト砂土
(焼土を含む)
SK355 ① 褐色+褐色シルト質砂土
(炭化物を含む)
② 灰黄褐色+褐色シルト質砂土
(炭化物・焼土を含む)

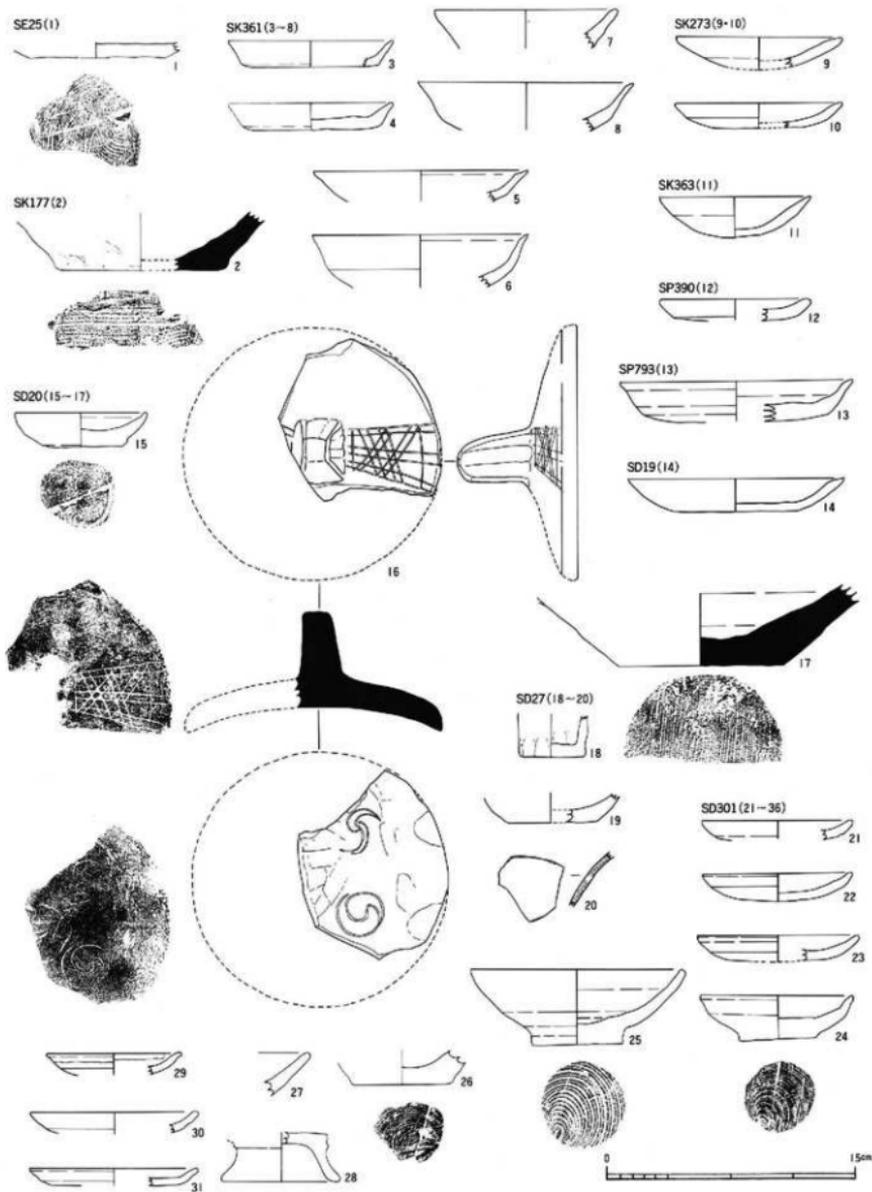


SK345 ① 灰黄褐色砂質土
(炭化物・焼土を含む)

SK349 ① 褐色+褐色シルト質砂土
(炭化物・焼土を含む)
② 褐色砂質シルト+灰黄褐色シルト質砂土
(炭化物・焼土を含む)

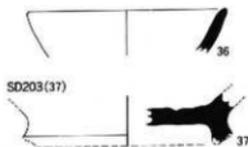
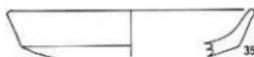


下層遺構出土遺物



第46図 出土遺物実測図(1) (1/3)

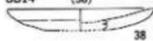
SD301 (21-36)



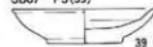
SD203 (37)

土層遺物出土遺物

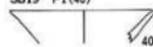
SB14 (38)



SB07 P3 (39)



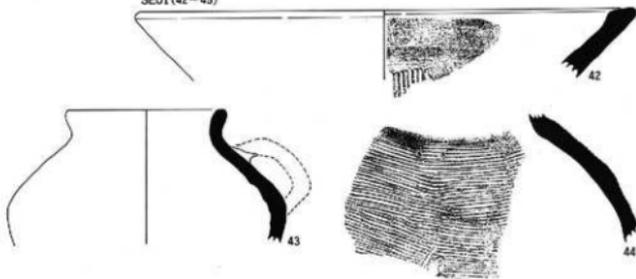
SB19 P1 (40)



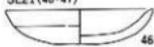
SB25 (41)



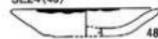
SE01 (42-45)



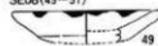
SE21 (46-47)



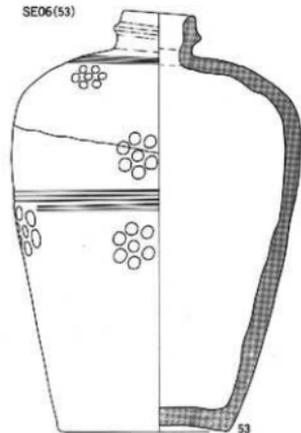
SE24 (48)



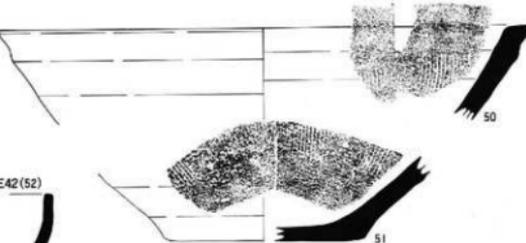
SE08 (49-51)



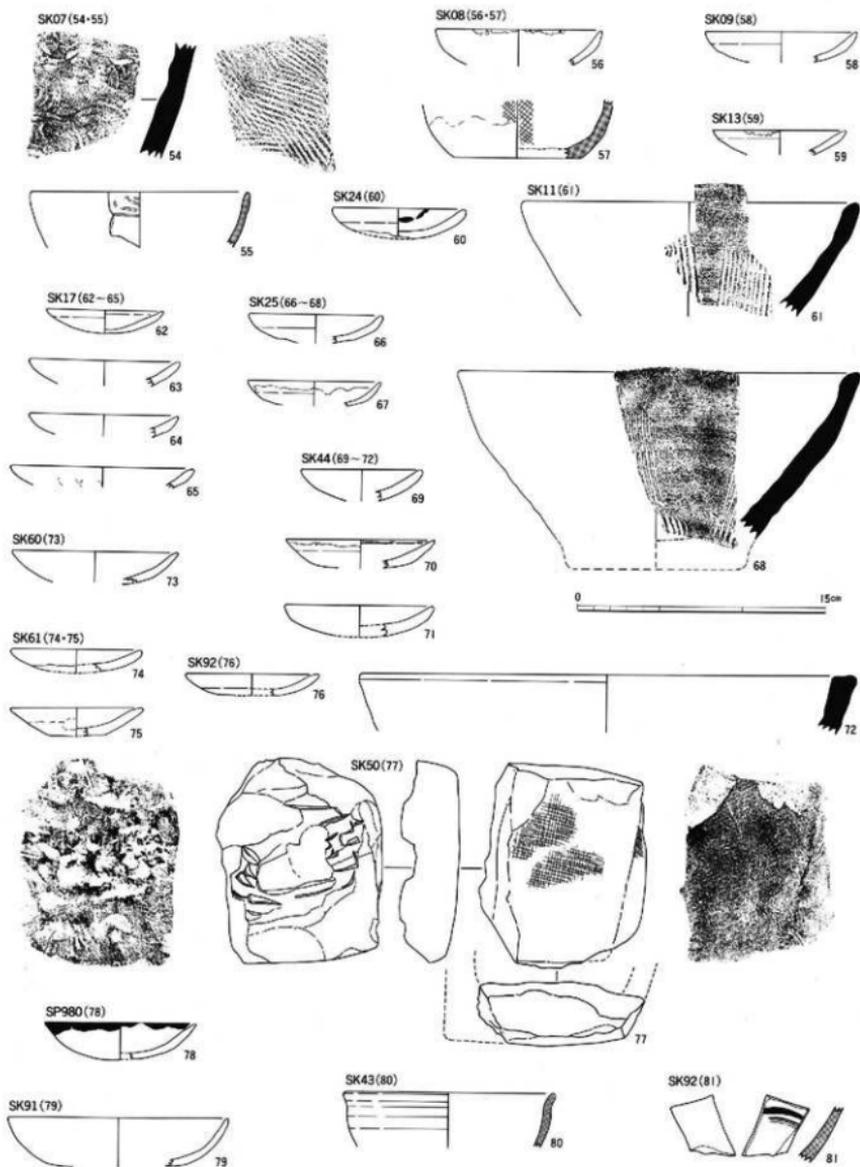
SE06 (53)



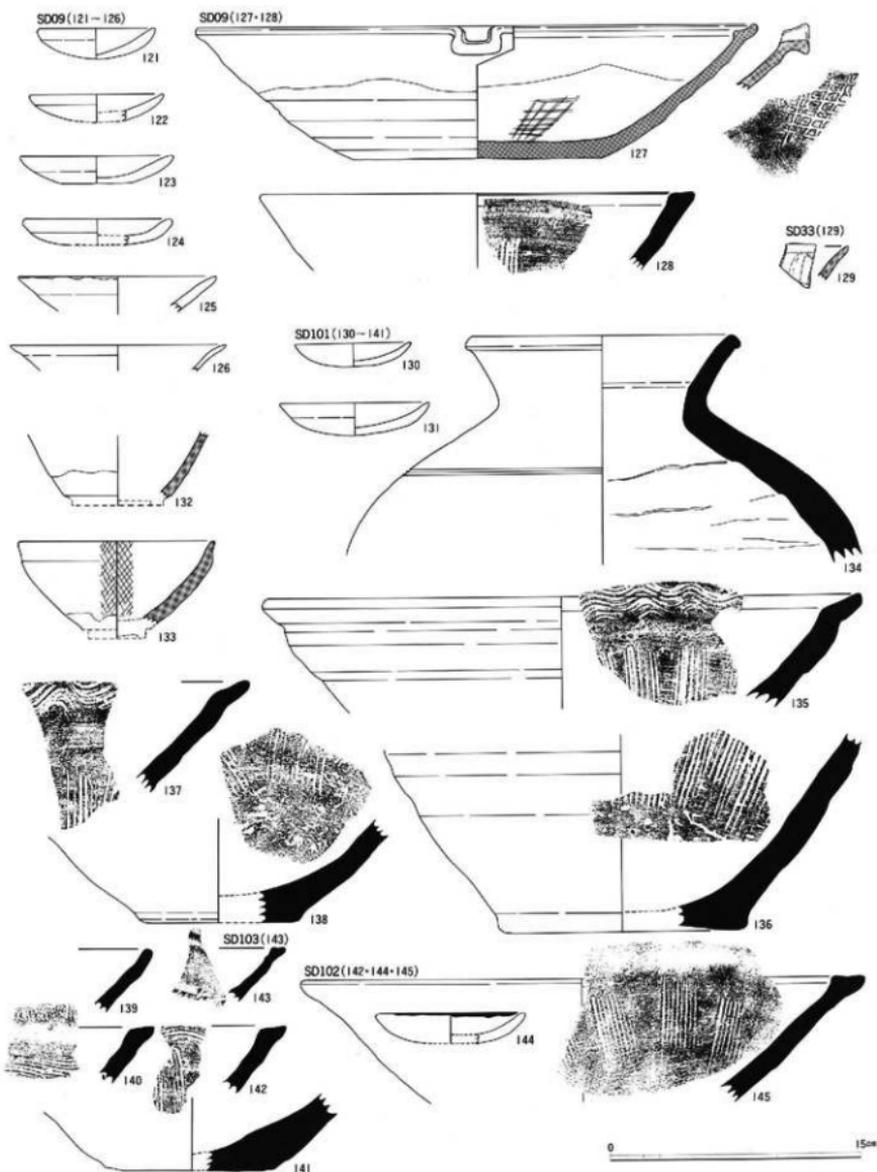
SE42 (52)



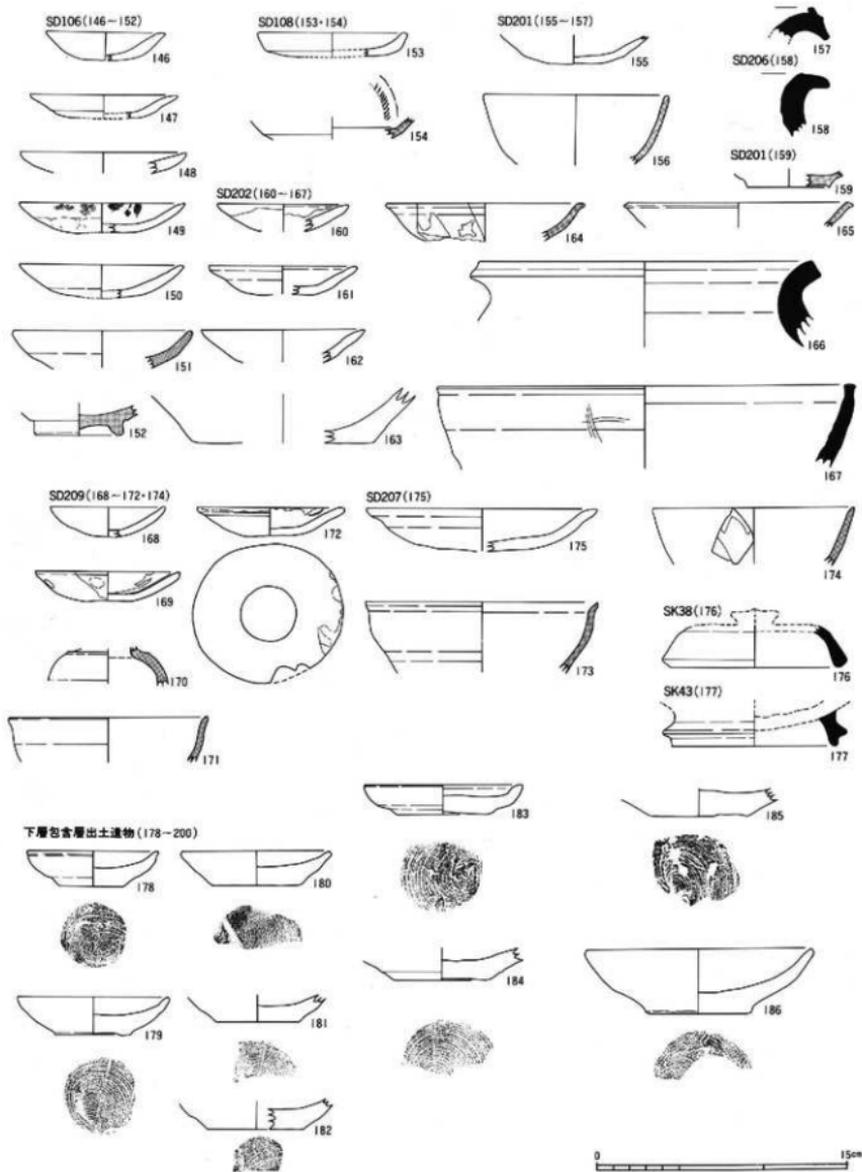
第47图 出土遺物実測图 (2) (1/3)



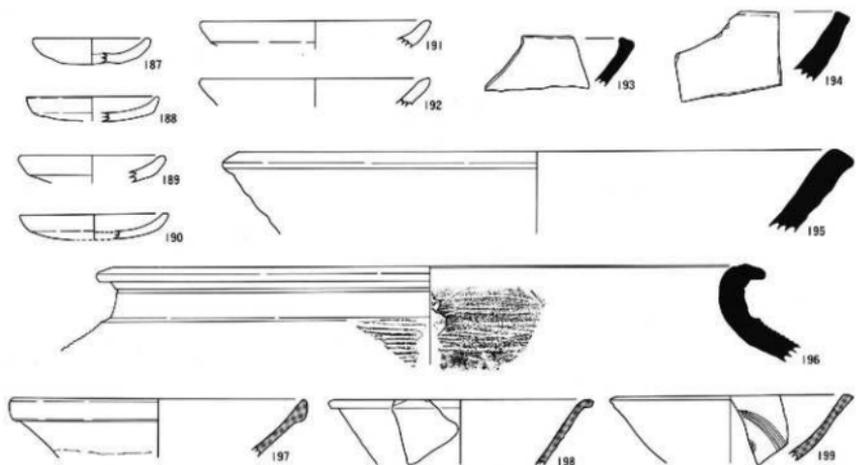
第48图 出土文物实测图(3) (1/3)



第50図 出土遺物実測図(5) (1/3)

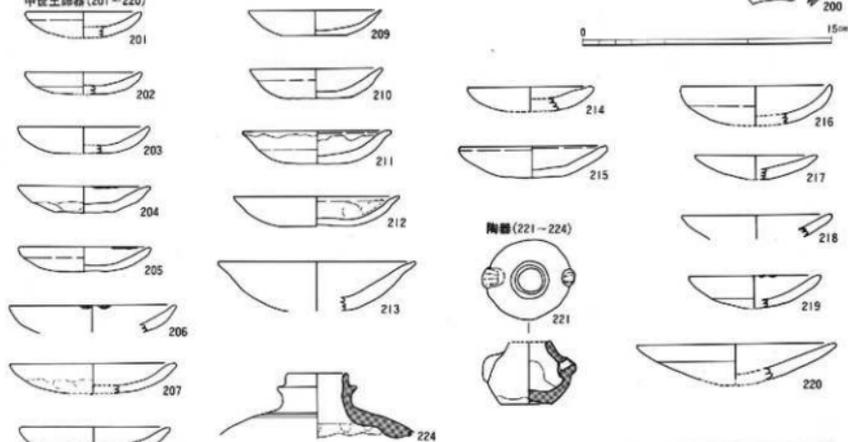


第51圖 出土遺物実測図(6) (1/3)

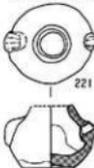


上層包含層出土遺物

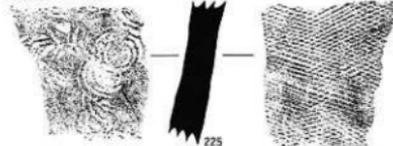
中世土器類 (201-220)



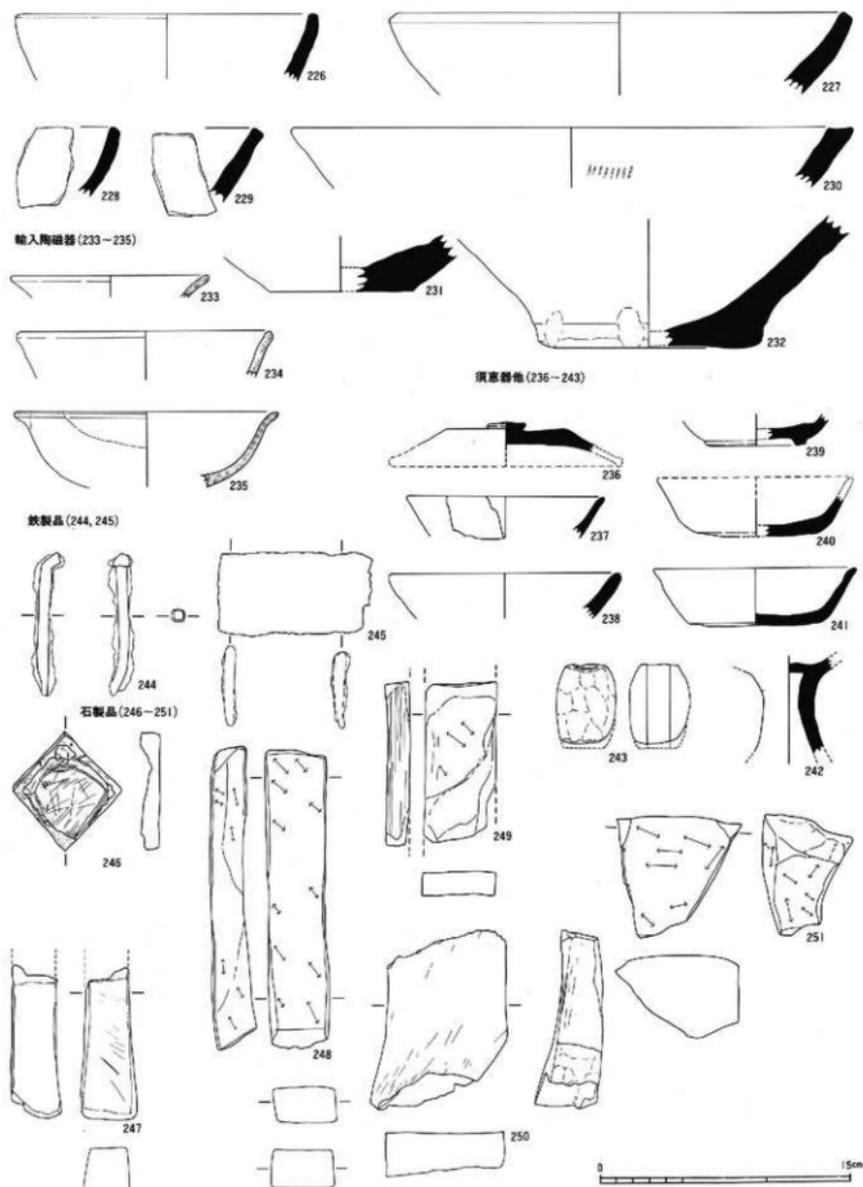
陶甕 (221-224)



珠洲焼 (225-232)



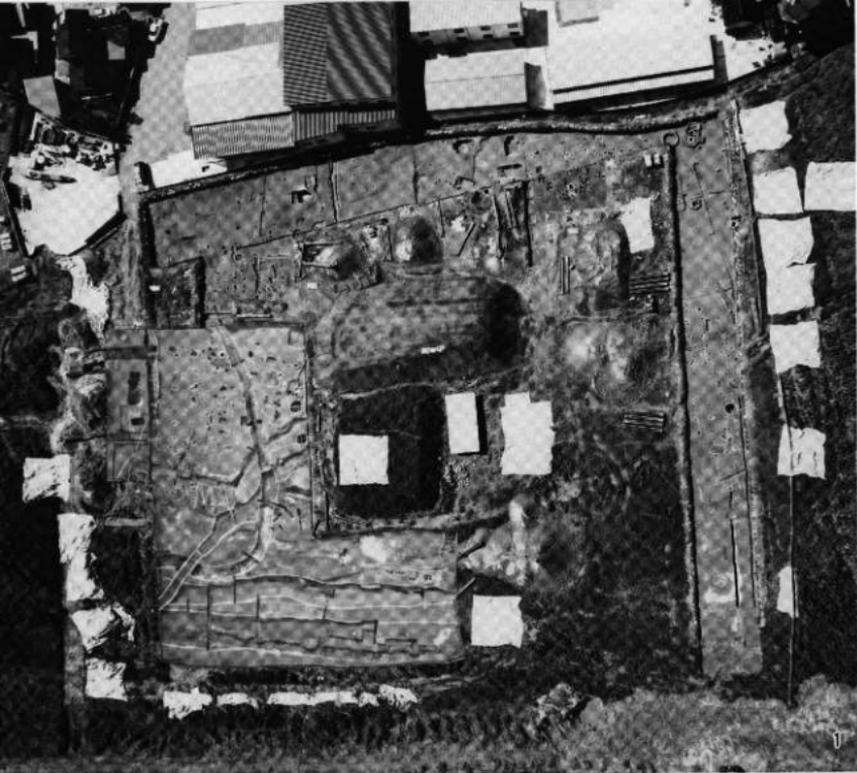
第52図 出土遺物実測図(7) (1/3)



第53図 出土遺物実測図(8) (1/3)

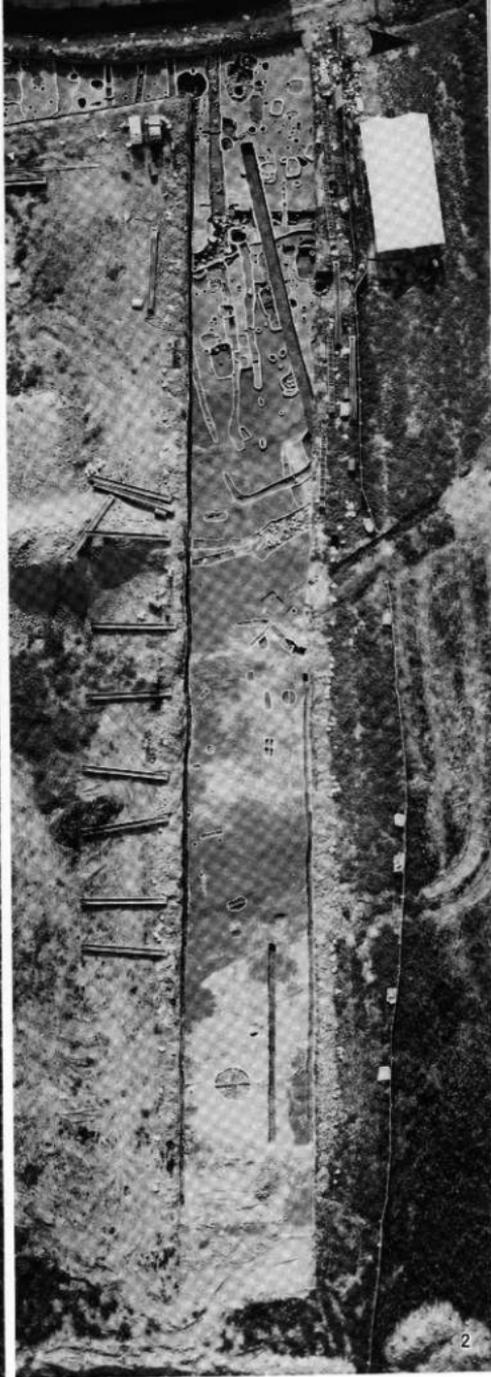
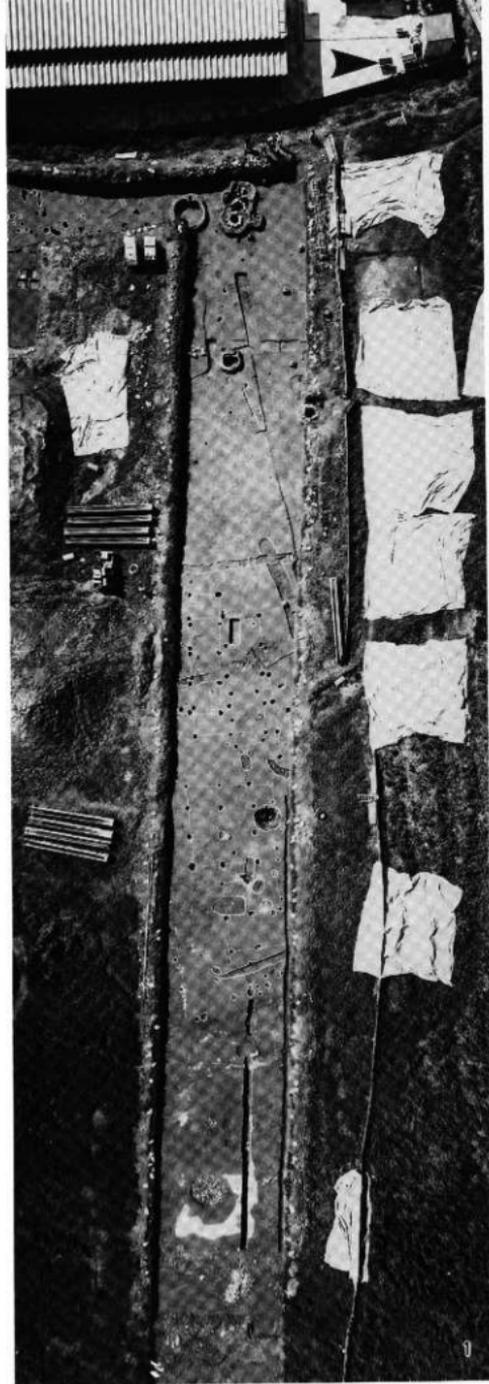


図版1
中名川遺跡航空写真



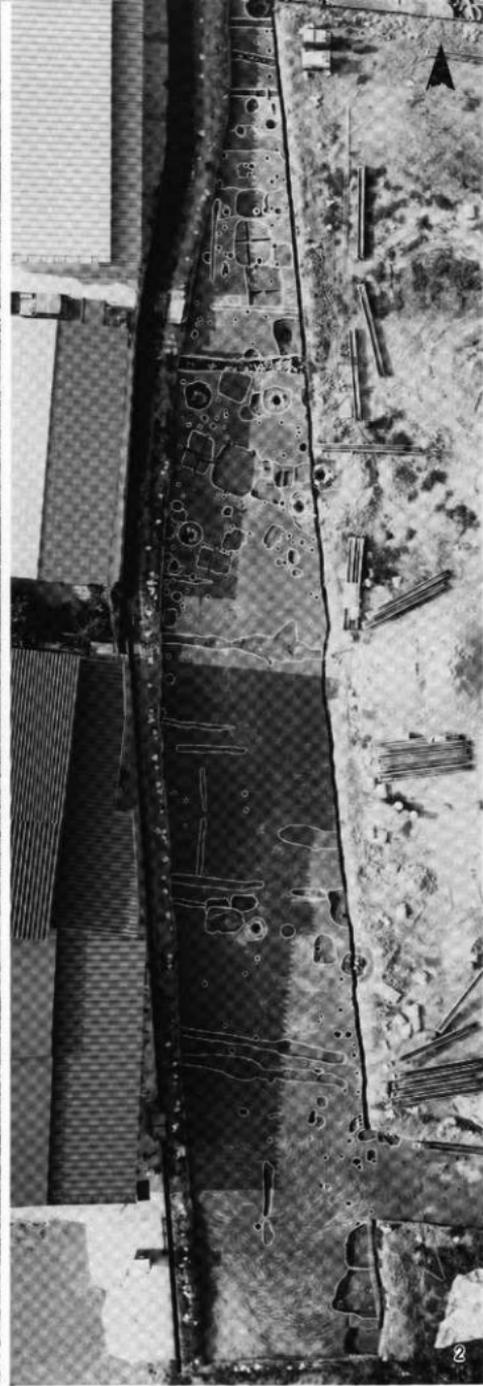
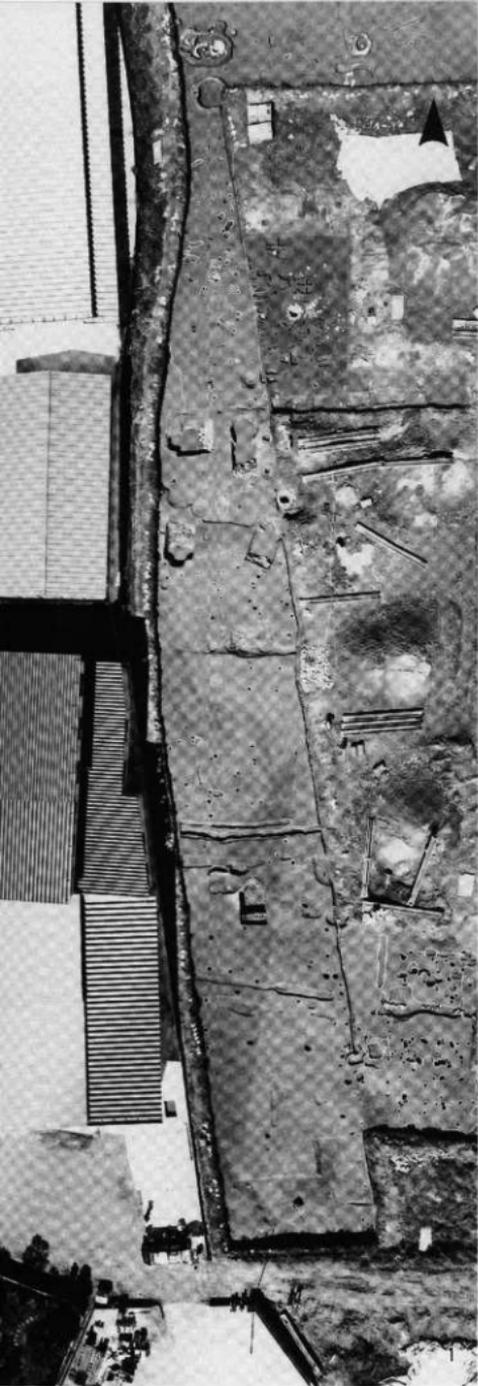
图版2

1 下層検出遺構全景 2 上層検出遺構全景



图版3

1 A地区下层出土遗物 2 A地区上层出土遗物



图版4

1 B地区下层出土遗物

2 B地区上层出土遗物